

元龜三年六月七日

一一六

〔上杉古文書〕〇十一羽前

以別紙申入候、臆而も可致言上處、御口留付而、逢々于今雖不始儀候、内々御意得忝可存候、愚意之通、岩木江申含候、拙身上之儀者、何分ニも御説次第と存事候之條、御前之儀貴殿偏ニ御取成奉、憑候間、御同意可爲本望候、將亦乍輕少三種一荷、并耐之鮎桶力一、令進獻之候、御音問驗計候、尙彼口上相付候、恐々謹言、

小六左

六月十六日

〇年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

職鎮(花押)〇以下斷簡

六月 己卯朔

七日、謙信、蘆名盛氏ヲ諭シテ、佐竹義重ト和セシメ、且ツ、下野眞壁氏幹・同房幹ニ、諸將ノ和融ニツキテ、カラ盡サンコトヲ勸ム、

〔伊達家文書〕一

以別番申候、去夏以來如申届、義重其方御問、謙信取而意見以申度覺悟、及使者候、無際限弓箭、更無所詮處ニ候歟、累年被任御入魂之旨、愚僧意見之處、於被聞届者、一世中之可爲御志候、猶萩原主膳亮ニ申含候間、彼者可有口上候、恐々謹言、

六月七日

謙信(花押)

蘆名修理大夫殿

〔謙信文庫所藏文書〕〇越後

覺書

覺

- 一 疾ニも上口歸 [] 届處ニ、少令所勞延引之事、
- 一 上口先以存 [] 歸馬之事、
- 一 盛氏義重 [] 届候、愚僧被爲免、萬端周旋候而落著 [] 大慶事、
- 一 義重并 [] 謙信書中條目、盛氏披見尤候事、
- 一 此度被差堪 [] 一和者、愚口之可爲御志事、
- 一 去秋以來口 [] 對盛氏、無等閑子細之事、
- 一 結城之晴朝并 [] 氏政手前ヲ引切、義重 [] 之事、

以上

六月 (謙信) 朱印

〔歷代古案〕〇羽前

略〇上 (佐竹義重) (太田資正) 東方三樂稼故、彌相調候、可心易候、萬吉重而謹言、〇全文ハ、七月二十

八月四日

謙信

元龜三年六月七日

一一七

元龜三年六月十二日

河田伯耆守殿(重親)

一一八

〔御列祖史畧〕 元龜三年七月、兵を師て白河を伐んと寺山の城に到り玉ふ、蘆名盛氏の在城會津、白河義親の居城白河、南北の澤小屋を攻めまふ、略中然るに、佐瀬源兵衛、松本源左衛門、田村月齋、馬場之宮に來りて太田資政事斯忠に參會して和親を乞はるるか、事調ふて、互に贈物おとしたる、義重公は八月太田江歸城し玉ふ、

〔常陸金剛院文書〕○集古文

結城晴朝
北條氏ト
絶ス

態及一翰候、仍、義重(佐竹)、盛氏(蘆名)、無際限弓箭、更奥口之勞兵無所□□□一和令意見申副候、入眼候様ニ諷諫其口之可爲備候、扱亦晴朝(北條)、氏政手前被引切、當方へ無二可被入魂由候條、此節其表一途各相談候而、御稼肝心候猶萩原主膳之允(亮)可被在口裏候、恐々謹言、

六月七日

謙信(花押)

眞壁右衛門大夫殿(氏幹)
同 安藝守殿(房幹)

○蘆名盛氏、佐竹義重ト戰フコト、二年五月九日ノ條ニ見ユ、

十二日、丙寅下總結城晴朝、和ヲ佐竹義重ニ求ム、是日、義重、コレヲ北條輔廣・高廣父子ニ報ジテ、晴朝ト共ニ謙信ト結バンコトヲ請フ、

〔吉川金藏氏所藏文書〕○羽前

晴朝義重
ニ綴リテ
謙信ト結
託セント
ス

急度申届候、仍、去比者越府江以使申越候處、種々懇切之由、雖不初儀候、本望之至候、然者結城當方和談、就之義重與有同意、謙信へ晴朝無二可被申談、由候而、先脚力を以被及届候、雖無申迄候、可然様取合任入候、委曲期後音候、恐々謹言、(佐竹)義重(花押)

六月十二日

北條丹後守殿(高廣)
同 安藝守殿(輔廣)

十五日、己巳謙信、加賀・越中ノ一向宗徒蜂起シテ、越中ヲ擾亂スルヲ聞キ、願文ヲ看經所ニ納レテ、管内ノ平安ヲ祈ル、

〔上杉家古文書〕

願文之所

右意趣者、賀州(越中井波勝興寺)并瑞泉寺・安養寺之一揆、可蜂起、由申唱候、依之當郡能化衆六人申付、摩利支天法一七日修行、并仁王經尊勝陀羅尼千手陀羅尼、衆僧ニ申爲讀誦候條、賀州・越中之凶徒、悉退散、雜意消失、越中・信州・關東・越後・藤原謙信分國有無事、安全長久堅固、諸人得歡喜可住、安堵思者也、仍願文如件、

一七日間
摩利支天
法等ヲ修
行ス

元龜三年六月十二日 十五日

一一九

元龜三年六月十五日

元龜參年申六月十五日

藤原謙信(朱印)

一一〇

御寶前○入澤達吉氏所藏文書同文

〔上杉年譜〕十六

元龜三年初夏ノ頃ヨリ、賀州門跡ノ僧侶并ニ〔一向宗ノ〕士民、越中ノ

曹洞派瑞泉寺安養寺此外黑瀬藤兵衛小杉新八郎松永平左衛門湯淺九郎兵衛ト與

カシ、一揆ヲ起サントス、是ニ依テ、同六月十五日、密宗ノ能化六員ニ命シ、愛染明王ノ

法一七日、仁王經、尊勝陀羅尼、千手陀羅尼轉讀有、其加護ニヤ、兩國終ニコトナル事ナ

シ、其御願文云、○願文、前掲ニ付キ略ス、

謙信、兵ヲ率キテ越中ニ赴キ、遂ニ富山城ヲ圍ムコト、八月十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

勝興寺ノ沿革

〔越登賀三州志〕韃靼餘考五

越中勝興寺ハ、

今ハ射水郡古國府ニ在リ、其初メ、文明四年、僧

蓮如、北國ニ來リ、礪波郡蟹谷庄ノ土山ト、新川

郡動清水邑トノ二所ニ堂宇ヲ構ヘ、說法ス、其比、蓮如ノ二男、蓮乘ヲ此堂ニ暫ク置テ住持トス、其後、四男、蓮誓住職ノ時、寺ヲ同國安養寺村ニ轉ス、其六世、顯榮、七世、顯幸ノ時、亂世ニ遇ヒ、安養寺ヲ立ハナレ、所々ニ居ヲナス、其後、佐々成政ニ乞テ、守山ノ麓今ノ古國府ノ地ヲ得、寺宇ヲ再興ス、即勝興寺コレナリ、越中西派ノ總録、子院今猶四百寺アリ、景周按スルニ、顯榮ハ細川晴元ノ曾ナリ、顯幸ハ朝倉義景ノ曾ナリ、今此ニ勝興寺ト云ハ、顯幸ノ時代ニ建タルナルヘシ、○下略

〔雲龍山勝興寺系譜〕

○上略、勝興寺、佐渡ヨリ、越中ニ移ル事ニカ、ル、

永正十六年二月、堂宇燒失ニ付、安

養寺村ニ轉住、法頭職前來ノ通リ、兵亂ノ砌、礪波半郡ヲ領ス、天正九年四月十二日、兵

火ノ爲メ、灰燼同年、古國府ニ移住ス、

〔越登賀三州志〕越中一向宗東方

瑞泉寺礪波郡井波

安養寺射水郡泉村

東方井波瑞泉寺、城端善徳寺屬下、

安養寺新川郡北島村

謙信、直江景綱ヲ越中ニ遣シ、河田長親ト共ニ、鯉坂長實等ヲ援ケテ一向宗徒ヲ擊タシム、景綱未ダ至ラザルニ、是日、三本寺定長、小島職鎮等、一向宗徒ト越中五福山ニ戰ヒテ敗ル、尋デ、景綱之ヲ謙信ニ報ジテ指揮ヲ請フ、

〔上杉家古文書〕

當地爲御加勢、半途訖、御著陣之由候間、令啓候、仍爰元之儀、一昨日十五、各々致談合、〔越中〕

火

宮爲助動、五福山ヘ打上、火手合申候處、敵大軍ヲ以取出、除口慕詰申候、雖然味方中無

何事被罷除候、拙者物共ハ、野本玄蕃允、四月一日、新右兵衛尉、木村善介此等之者とも

としめとして、廿余人爲討死申候、心底可有御察候、將又、當地備堅固ニ候、各々早速有

御著陣、爰元御備可有御談合事簡要候、諸餘以面可申承候間、不能具候、恐々謹言、

伊豫守

〔三本寺〕

火宮城ニ應援ス

野本玄蕃允、四月一日、新右兵衛尉、木村善介此等之者とも

死ス

衛尉等討死ス

死ス

死ス

元龜三年六月十五日

一一一

元龜三年六月十五日

(元龜三) 六月十七日

(直江景綱) 直和 參

定長(花押)

一一三

(上包) 鱒坂清助方直江大和殿へ狀

其地御著陣之儀、存候者可申達候處、唯今之御書中見申候而罷成御報、非疎意候、仍、一
(十五日) 昨日之仕合、不及是非候、雖然各無恙候間、可爲御大慶候、定今度之動、聊爾之樣雖可被
 思召候、自火宮夜々ニ以脚力如申越者、御後詰於遲者、責而五福へ揚入數、付力申候へ
 由候間、河豐致談合、五福へ上申候處、存之外敵出備取懸候、様々致防戰候へ共、以大軍
 慕申候間、神通於渡場、少越度候、乍去爲指者損不申、同心夜交與三、水野越度候、被聞召
 不敏可被思召候、扱々火宮之儀者、除致和談、石動へ罷除之由、一昨日より取刷、我等ニ
 者被相陰候、然故火宮取詰候人數後心安存候而、取出候間如此候、然而爰元御著陣之
 儀、天神山有御談合如何ニも、跡衆相續申候、躰被成之候、人數遣尤候、當地備之事者、敵
 取詰申共、可御心安候、畢竟根強御後詰相極候、節々可申達候へ共、路次不自由候間、不
 能其儀、努々非疎意候、恐々謹言、
 追而、令申候、府へ御注進御申候者、我等今度聊爾之行不致之由、御取成被御申上奉

五福山敗 戰ノ辯疏 神通川渡 場ニテ敗 日宮城將 務ニ開城 ス

頼候、

六月十七日

(直江景綱) 直大 參御報

(鱒坂清介) 鱒清

長實(花押)

火宮開城 小島職鎮 鎗石動ニ 浪居ス 景綱戰況 フ報ジテ 謙信ノ指 揮ヲ待ツ

(越中) 新庄へ飛脚差遣候處、昨夜中罷歸候間、自鱒清之返書爲持、彼指刀則進之候、可然様ニ
 御心得頼入候、火宮之義者、自敵變お入候而落居、爲始小島六郎左衛門尉、何も石動へ
 罷上之由申候、無是非次第迄候、然者御先衆者いまニ石田ニ在留候、併河豐指圖ニま
 うせられ尤之由數度申届候、さて又此上之御備、如何可有之候哉、我々事者如何様ニ
 も可爲御意次第候、彼者新庄へさしこし申候間、才覺ちと可申者ニ者雖無之候、自然
 様體さこし候はんうと存候而差越申候、猶委細者自鱒清之書中ニ被露之候間、不具
 候、恐々謹言、

(直江大和守) 直和

景綱(花押)

六月十八日

(山吉豐守) 山孫 御宿所

元龜三年六月十五日

一一三

謹而申上候、新庄之儀、餘無心元存候而、以飛脚申越候處、從鱒坂清介所之返札差越候間、爲御披見進上候、然者火宮之儀、落城仕候、因茲爲始、小嶋六郎左衛門尉、何も石動へ罷上之由申候、此上之御備如何可被成之候哉、御先衆之義者、自以前如申上候、未石田ニ滞留仕候、併河田豐前守ニ致談合、何篇も豊前守取計次第ニ被致之尤之由、再三申届候、彼者今度新庄へ召遣申候間、自然御尋も爲可被成之指越申候、相替儀御座候者、不限夜中注進可申候、將亦我等事者何趣も可爲御説次第候、此等之旨、可預御披露候、恐々謹言、

直江大和守

六月十八日

景綱(花押)

山吉孫次郎殿

〔寸金雜錄〕

○越中

御折紙令披見候、仍從杉浦壹法橋之御一札令披閱、即不移時日郡内へ申觸候、併遠路之御事候條、難相届令存候、乍去堅固申觸候、委細猶使者令申候、恐々謹言、

六月十日

渡山兵衛次郎(花押)

河田長親ノ指揮ニ委ス

杉浦玄任援ヲ求ム

渡山兵衛次郎

信玄長延寺實了ヲシテ一向宗徒ヲ煽動セシム

勝頼家督甲相一和ノ誓詞ヲ交換ス

〔秋山吉次郎氏所藏文書〕

坪坂伯耆入道殿
參御報野上

的便之條令啓候、抑去年御上洛以來可申處、路次就不合期無音失本意候、一貴寺以馳走於越中表、賀州衆越國衆、至于兩年對陣、于今賀州衆在陣之由及承候、誠無比類、御稼無申計候、併御苦勞難盡紙面候、一信玄向遠三被動干戈、數ヶ所敵城被責落、彼口如御存分候、自當方も如御存、宗者共加勢申候條、一入満足大慶候、一勝頼就御家督猶立越前々入魂可申所、改而兩國誓詞取替浮沈共ニ申合候、可御心安候、一近年甲相鉾楯ニ付而、大坂へも申遠候、如前々可申通候、内々御心得尤候、一當秋之備肝、要候條雖不及申候、越中口行之儀、御油斷有間敷候、當口之事者、右ニ如申顯、勝頼與深重ニ相談申候條、不可有異儀候、委細令期來信之時、恐々謹言、

七月十四日

長延寺(實了)斐(實了)甲

氏政(北條)(花押)

〔參考〕

元龜三年六月十五日

元龜三年七月二十九日 八月六日

一二六

〔越登賀三州志〕

故墟

婦負郡

吳服山陣城、白鳥城

二名一跡也、在長澤鄉金屋村領山、今ハ吉作村領也、麓有白鳥宮、故=白鳥

ノ名アリ、自富城=正西一里強、相傳、上杉謙信、越中攻ノ時、神保越中守長職築テ居ス、

七月大乙酉朔盡

二十九日癸丑、一向一揆、村上國清ノ越中ノ營ヲ襲フ、尋デ、河田長親、國清ヲ援ケ、宗徒ヲ奔ラス、

〔歷代古案〕〇羽前

河田重親
野馬ヲ謙
信ニ贈呈
ス

野馬差越候、一段之馬ニ而見事候、仍、自賀州番手之者共、相重、廿九晦日兩日出備候處、

〔村上國清〕初源五方數多籠置候條、手負無際限仕、出足を違候時分、〔河田長親〕豐前守懸著候故、敵崩備引入

候處、擊押付數十人討捕故、敵退散之由申候、内々可出馬支度申候得共、靜候間、我々義

者、仕置計申付、越山之念願迄候、兎角ニ明後吉日候間、藏田所迄門出申候、無心元思間

敷候、〔佐竹氏〕東方三樂稼故、彌相調候、可心易候、萬吉重而謹言、

八月四日〔元龜三〕

謙信(黒印)

河田伯耆守殿〔重親〕

八月小乙卯朔盡

六日庚申、謙信、一向一揆ヲ擊タントシテ、越中ニ出陣ス、

藏田所マ
テ門出

〔歷代古案〕〇羽前

我々義者、仕置計申付、越山之念願迄候、兎角ニ明後吉日候間、〔五郎左衛門〕藏田所迄門出申候、無心

元思間敷候、〇上下略、全文ハ、

八月四日〔元龜三〕

謙信(黒印)

河田伯耆守殿〔重親〕

〔上杉古文書〕〇羽前

〔上包〕長九郎左衛門佐運

去月廿三尊書、今四日到來、致拜讀候、仍、至當州近日可有御出馬之旨蒙仰候、尤珍重奉

存候度々如申入候、當表之儀、御出張次第可致其催覺悟候、自然御進發於御遲滯者、此

表大切存候、加越之摸様委曲伊藤令口述候趣、可得御意候、恐惶謹言、

八月六日

佐運(花押)

越府

十日甲子、謙信、越中ニ陣スルヤ、武田信玄、北條氏政ノ、上野ヲ衝カンコトヲ慮リ、

越後上田在城ノ長尾顯景ヲ以テコレニ當ラシメ、先ヅ、栗林政頼ヲシテ警備ヲ

嚴ニセシメ、大石藤右衛門尉ニ命ジテ軍ヲ監セシム、

能登ノ將
長重連ニ
出陣ヲ報
ズ

元龜三年八月十日

一二七

元龜三年八月十日

〔栗林文書〕〇羽

今度至于越中出馬、依之（顯景後景勝）喜平次者共可召連處ニ、關東口火急ニ候得者、何も不時ニ越山之儀申付候間、自陣返候得者、遅候間、其元差置候、自然（上野）厩橋山際之間へ、南申之凶徒、打出由申候者、地下人成共集、多ニ見得候様ニ、懸助頼候、爲其爲横目大石藤右衛門尉、其元ニ差置候、傍輩共如在之者候者、以交名可申越候、喜平次ニ申付可爲、及折檻候、兎角ニ諸口人留肝心候、猶彼者可申候、以上、

八月十日

栗林（政頼）二郎右衛門尉殿

謙信（花押）

〔歷代古案〕〇五

〇羽前
定（武田信玄）
定（朱印）

- 一 長柄三間之事、
- 一 持鍵二間之中之事、
- 一 付、實共、
- 一 持小旗差物志ない四方之事、
- 一 射手之事、

地下人ヲ
集メテ警
備セシム
不忠者ヲ
報告セシ
ム
諸口人留
シム
シム

信玄氏政
ト約シ關
東ヲ侵サ
ントシテ
將士ヲ徵
集ス

一 鐵砲放之事、

付、玉藥之事、

一 一統之立場之事、

一 馬之事、

自庵之江湖之申樂舞ニ、妻之衣裝、私宅之造作等之費用、一切被停之、（北條氏政）右條々、無油斷支度肝要候、隨而近日小田原當方双旗、至關東可有御動候、敵味方之覺候間、知行役之外、別而人數令加増、可被動軍役候、此一往者不可成、後日之龜鑑候、有分別被應下知者、可爲感悅候也、仍如件、

元龜三年

八月十一日

龍（武田信玄）
朱印

葛山衆（信濃）

十八日、（壬）謙信、越中新庄ニ陣シテ、加越ノ諸族及ビ一向一揆ヲ富山城ニ攻ム、一揆ノ將杉浦玄任、援ヲ加賀ノ坪坂伯耆等ニ求ム、

〔歷代古案〕〇一

態爲音信珍敷具足到來、祝著候、仍爲越山候間、越中堅固ニ可申付多め、半途へ出馬、賀

元龜三年八月十八日

元龜三年八月十八日

一三〇

州之者共斷而勞兵故、惘望候様ニ候間、半途ニ立馬、彼口手堅一際可付事、輒候間、御心易候、上口未落居ニ候て、越山候得者、其表ニ張陣も不叶、越中も捨事候條、留守中手堅申付、心安爲可張陣、如斯候、○下略、全文ハ、次ノ條ニ收ム、

八月十八日

謙信

河田伯耆守殿

〔寸金雜錄〕

○越中

一向宗徒
富山ニ集
合ス
近江出陣
ヲ後ニシ
越中來援
ヲ先ニセ
ンコトヲ
請フ
宗徒ノ意
氣

輝虎出勢、一昨日十八日者、(越中)新庄表山際ニ野陣仕、此方軍勢過半富山ニ在陣、其間及一里計相歸候、(隔カ)然所、南兩郡者、上口江州表へ可有出陣由、依被仰下、被得其意候旨候、雖然上口之儀、敵陣程遠候間、先々近被防禦、御理運之上者、四郡共上口へ罷出可相働由、北兩郡御兩寺以御同心、如此間、先々一刻も早々此表へ出勢候様ニ堅可被仰付候、彼敵如何様ニ雖相働、加越之軍勢一同櫟合、只以一櫟可相果候由候之間、結句早果道此行ニ相極候、依之心懸次第ニ一騎二騎宛成共、早々可被懸付事、肝要由可被仰付候、恐々謹言、

八月廿日

玄任(花押)○瑞泉

(杉浦壹岐法橋)
杉壹

坪坂伯耆

坪伯入

宇丹入

(川那部左衛門次郎)

川左次

(岸田新右衛門)

岸新右

御宿所

宇丹入
川那部左
衛門次郎
岸田新右
衛門

急度令啓達候、仍而輝虎一昨日十八日ニ新庄表著陣、則山之根居陣候、當表之儀、火急候條、先能美郡衆下口被馳向候様可然存候、當表落居仕候者、越前之覺旁之條、以御才覺可被仰付候、委曲猶從杉浦殿被仰越候條、不能愚筆候、恐々謹言、

旗本中

八月廿日

石川郡(花押)

坪坂伯耆入道殿

川那部左衛門次郎殿

岸田新右衛門殿

御宿所

旗本中石
川郡

先日者乍御報御懇書本望之至候、仍而南方之儀様體具示預畏入存候、其後相易無御

元龜三年八月十八日

一三一

元龜三年八月十八日

一三二

富山城兵
頑強ナリ
信玄信濃
ニ出兵ス

左右候哉、承度候、隨而越中表之儀、富山一段堅固依被相踏、越後衆失手之由候、(武田)信玄、信州へ出馬之間、輝虎人數可被入_ウと之取沙汰仕候、爰元相替儀候者、從是可申入候、恐々謹言、

九月四日

溫井備中守

景隆(花押)

溫井景隆

猶々江國之儀も、粗々示下候者可爲恐悅候、此外無他候、

〔歷代古案〕

○羽前

其御表于今御居陣之由、彌被達御本意之由尤候、珍重存候、仍先度者御馬一疋、鹿毛被送下候、過分至極、致秘藏繫置候、忝存候、就中雖無見立候、具足壹兩腹當物(色力)糸糸□進上候、可然之様可預御披露候、恐々謹言、

遊佐盛光
河田長親
ノ陣中ニ
物ヲ贈ル

九月五日

遊佐四郎右衛門尉

盛光〇熊登昌
山氏部將

遊佐盛光

河田豐前守殿

〔寸金雜錄〕

〇越中

其以後久不申通候、頗背本意令存候、仍京都様御左右、從入道殿被爲仰聞、難有奉存候、猶委細承度存候、而以使着申入候、其蒙仰候者可爲満足候、兼而越中表之儀、彌御利運之由、承候間、祝著之至候、(精)御情ニ入御馳走令推察候、就中雖輕少至極候、蜘蛛三束令進入候、表御音問候迄候、何様罷登心事可申入候、恐々謹言、

長福寺教

長福寺

九月六日

教圓(花押)

坪坂新五郎

坪坂新五郎殿

參御宿所

玄任重テ
援フ坪坂
伯耆ニ請
フ

南兩郡出勢之事、先日以使者雖申越候、未能御返事候間、態二木差上候、此表之備度々如令申候、一大事相極候條、早々南方被成御越、此表備之事堅可被仰付候、當表敵味方之有姿、雖數通申候、自分無越故ニ、能美江沼無承引候歟之間、菟角有御越間、越前助勢之事、先々可被仰留候、京都様之御儀者、御兩寺北兩郡拙者以飛脚令言上候間、可被御心易候、猶格餘此者口上ニ申含候、恐々謹言、

(杉浦玄任)
杉壹法

九月八日

(花押)

元龜三年八月十八日

一三三

元龜三年八月十八日

一三四

坪伯入

川左次

御宿所

返々、久不申上候、御床敷存計候、此表之儀始末可御心易候、敵之鑓兩度之手合案内
にて候、先以心易見へ申候、目出度致歸陣、萬可申上候、此外不申入候、
此間者依取亂細々不申上候、御煩御平愈候由承之間、喜悅無申計候、八日之午刻働ニ、
可然馬上共討捕、得大利候、猶時宜者可被御心易候、兼又上様御左右承度候、乍恐便宜
可預示候、恐惶謹言、

高木甚介

吉政(花押)

九月九日

坪坂新五郎殿

先度預御札祝著之至存候、從杉浦殿之御狀、慥ニ相届申候由、各へ令披露候、乍恐可然
之様ニ御演說奉頼存候、猶期後音候、恐々謹言、

江沼郡(花押)

九月十日

江沼郡

能美郡

能美郡(花押)

坪坂伯耆入道殿

川那部左衛門次郎殿

參貴報

上條政繁、上野厩橋城ヨリ、謙信ニ、北條氏ノ兵武藏羽生城ヲ攻メントスルヲ報
ズ、是日、謙信、沼田城將河田重親ヲシテ、羽生城將菅原左衛門佐等ヲ勵シテ出
援ノ日ヲ待タシム、

〔歷代古案〕一〇羽前

河田重親
具足ヲ謙
信ニ贈ル

態爲音信珍敷具足到來、祝著候、仍爲越山候間、越中堅固ニ可申付、あめ、半途へ出馬、賀
州之者共斷而勞兵故、悃望候様ニ候間、半途ニ立馬、彼口手堅一際可付事、輒候間、御心
易候、上口未落居ニ候て、越山候得者、其表ニ張陣も不叶、越中も捨事候條、留守中手堅
申付、心安爲可張陣、如斯候、扱亦彌五郎申越候分者、氏政向羽生(武藏)出陣之由申越候、彌五
郎越候、飛脚ハ、南衆出張儀者不知由申候、吾分茂突角不申越候、如何實儀ニ候哉、無心
許候、東方茂屬一變候上、近日越山前候間、家中ニ付力堅固ニ可防戰由、細々以飛脚羽
生(城將菅原左衛門佐)へ可申越候、亦歸馬之内者、何方之飛脚も其地ニ留、北方へ不越、續飛脚ニ而可申候、
萬吉歸陣之上可申候、謹言、

氏政羽生
城ヲ攻ム
ルノ實否

元龜三年八月十八日

一三五

織部子ノ
コト

元龜三年九月十七日

一三六

追而、織部子之事、色々申候へ共、陣ニ何茂召連可陣もの無之候間、歸陣之上と申候、
身歸陣申候者、無理ニ取可越候之時、迎を可越候、以上、

(元龜三)

八月十八日

九月 甲申 盡

河田伯耆守殿

十七日、庚子、飛驒ノ將江馬輝盛、越中ニ來リテ謙信ニ會見ス、

〔上杉文書〕〇羽前

昨晚、江馬方被打著候、爲此迎源五方被越候へ者、自敵陣可乗切様ニ見へ候つる間、出

備候得者、あなとヨリ此方之武見之衆へ押懸候、豊前守者共助合、敵十餘討捕、富山へ

押籠候、〇上下略、全文ハ

九月十八日

山吉孫次郎殿

河田對馬守殿

北條下總守殿

山崎秀仙 柳 齋

河田吉久
北條高常
山崎秀仙

長尾喜平次殿

〔附録〕

〔上杉古文書〕〇羽前

尊書致拜見候、先以忝存候、仍此方滞留之儀、先度如申上候、甲府江不通候條、得御意候、
京都へも申上候、然ニ從濃州御注進之趣、可然存候間、何迄も逗留之儀、御意次第候、將
亦、御小袖一重拜受、過當至極存候、尤以參陣、雖可申上候、此等之趣、可然様御取成奉、憑
外無他候、猶直江大和守殿可被申入候、恐々謹言、

(河上富信カ)
花押

十月十日

河田豊前守殿

十八日、辛丑、謙信、長尾顯景、及ビ山吉豊守ニ命ジ、越後春日山城ノ警備ヲ嚴ニシ

テ、武田信玄ノ來襲ニ備ヘシム、

〔上杉文書〕〇羽前

重而申遣候、夕部自敵落來者申分者、當月中ニ大手口へ信玄可打出候、物裏を可見由
申候、何方ニ而も奉公同事候、爲如何候も、頸城春日山凶事出來候て、勞功有間敷候、早
々春日山へ移直江談合候、而、用心簡要候、一人も爰元ヨリ返候者共、在郷江返間敷候、

元龜三年九月十八日

一三七

信玄越後
ニ侵入セ
ントスル
ノ報アリ
顯景等ヲ

元龜三年九月十八日

一三八

シテ春日
山城ニ歸
リ直江景
綱ト議シ
テ信玄ニ
備ヘシム

富山城ノ
敵軍潰散
ノ狀アリ

黒瀧家ヲ
根知ニ庄
田越中守
ヲ不動山
城ニ置ク

身之事者、爰元見合可歸城候、一足も身之出候得者、爰許敗軍之様ニ見え申候、淺間敷體候、身之背下知、一人も爰元へ越候者、口惜候、其元之用心千言萬句候、山吉者も、臆而可返候、昨晚、江馬方被打著候、爲此迎源(村上國清)五方被越候へ者、自敵陣可乗切様ニ見へ候つる間、出備候得者、あなよヨリ此方之武見之衆へ押懸候、(河田長親)豊前守者共助合、敵十餘討捕、富山へ押籠候、其時惣備敵出候間、身之事者見知不申候、吉益五十嵐申分者、三千不足之由申候、又身之見量ニハ、四千内外之由見切候、兎角ニ四万三万與申つる趣不審ニ候、跡之陣ニ者、小旗も人數も一切無之候つる、昨日自未明、小旗を卷、惣宮筋へ無際限敵歸候、是ハ越前衆敗軍共申候、又増山衆拂陣共申候、又能州當方江連々被申候つるが、加様之儀ニ付、而共申候、其故敵之人數無衆ニも候歟、不審ニ候、万吉重而謹言、追而、爰元者可心安候、見詰候間、留守中さへ來月十日比迄無事ニ候者、本意者疑有間敷候、以上、又申候、此方之人數ヨリそつくん無少候、以上、又申候、其元火急之儀候ハ、當陣へ増人數可越候、其人數先留置、其元之用所ニ可立候、又無用ニ候者、此方へ可越候、(西頸城郡)禰知へハ黒瀧衆差越候、(同上)不動山へ者庄田越中守越候間、本庄清七郎をど春日山へ可召寄候、開發も同前ニ可召寄候、以上、

九月十八日

謙信(花押)

山吉(豐守)孫次郎殿

河田(吉久)對馬守殿

北條(高常)下總守殿

專(山崎秀仙)柳齋

長尾(顯景)喜平次殿

〔歷代古案〕

○羽前

如啓先書、内々おし付て可相越處、敵陣殊外もミ、人數引たふ(越中)ひき、火宮筋へ引入候、兎角敵敗北、五日之内之由、自敵懸入者申候、縦、頸城無何事候共、早々春日山へ移候て、直江談合用心簡要候、一時之内ニ、留守中大事者不被知候、爰元者敵之様、昨日見歸、敵無衆安堵申候、始、奥衆身之可歸由申候へ者、無正躰候間、先以見合候、一人も爰元へ越、留守中何事も候者、旁々如何様之奉公候共、崩備口惜候、早々春日山へ可移候、萬吉重而そや、三人飛脚を越候歟、參著候哉、無心元候、謹言、

追而申、中間屋地新四郎申様ニ而、對馬守越候便狀之返事候、以上、

九月十八日

謙信

山吉孫次郎殿

元龜三年九月十八日

一三九

富山城ノ
敵敗走
謙信ノ歸
國ヲ止ム

元龜三年九月十八日

河田對馬守殿

北條下總守殿

專柳齋

長尾喜平次殿

一四〇

〔別前田家所藏文書〕

信玄浦杉
玄任ヲシ
テ固守セ
シム
越後ニ長
陣スル能
ハズ

至于今日出馬遲々定而無曲可被思候、飛州之儀相調、又遠州表之備聞合候故、如此之猶豫可被處不審候、此上ハ無用捨出馬候、畢竟富山之地、無油斷普請、極此一ヶ條候、漸及寒氣候間、至于越後長陣不可叶候、其分別尤候、委曲附與彼口上候、恐々謹言、

九月廿六日

信玄判

杉浦壹岐法橋

長延寺

〔勝興寺文書〕

乾越中

駿河遠江
方面ノ爲
ニ越後亂
入運ル

去年以來、賀越兩州對陣之事候之間、隨分手合之備無油斷候キ、雖然信玄自身至于越後亂入之儀者、遠三之動無據故遲々、其已後彼表明隙歸陣候條、直ニ向越府可動干戈、

信玄ノ先
陣信越ノ
境ニ躡蹠
ス實ハ自
身出馬セ
ズ

之旨令儀定、既信越之境迄先衆立遣候之處、於于途中得病氣躡蹠之砌、輝虎退散ニ付而、無役ニ納馬候、月一日ノ條ニ收ム、

信玄(花押)

勝頼(花押)

十月朔日

勝興寺

二十六日、己酉、織田信長、謙信ニ、朝倉義景ノ動靜ヲ答報ス、

〔溫故足徵〕

謙信朝倉
義景ノ一
向宗徒ヲ
援助スト
開キ山崎
秀仙ヲ遣
シテ其實
否ヲ信長
ニ問フ

朝倉義景至于江北小谷籠城候、種々歸國調儀之由候へ共、懸留リ候間、難測一日一日與在之旨ニ候、是非共打果候、但夜中敗北ニ付てハ不及了簡候、此爲體ニ候條、其節一揆等ニ、朝倉加勢不實候、爰元之趣、專柳齋如見及候、小谷を押詰、虎御前山と申ニ地利三ヶ所申付候、此山と横山之間ニ宮部と申地候、是も一城相構、人數陶々入置候、信長ハ横山ニ移候、東國邊事彌可聞合候、其表備堅固ニ可被仰付儀、簡要候、追々可申候、

信長(織田)

九月廿六日

元龜三年九月二十六日

一四一

不識庵

不識庵

進覽之

元龜三年十月一日

十月小 甲寅朔

一四二

一日甲寅、謙信、越中富山城ヲ陷ル、是日、武田信玄、勝興寺ヲシテ再舉ヲ計ラシム、

〔寸金雜錄〕一 越中

一向宗徒謙信ノ退軍ヲ慮測シテ油斷ス

御折紙并菱喰饋給候、賞翫不及是非候、各江振舞可申候、輝虎退散之事申入候間、其以後も無異儀候、可御心易候、自然相替事候者可申達候、恐々謹言、

杉壹

(元龜三) 九月十七日

玄任(花押)

坪伯入

御返報

猶々、越中之儀御威光候、別而難有存候、與十分可申入候、以上、

態以折紙申入候、仍輝虎罷退候由承候、珍重令存候、御大慶と奉察候、國中御理運程有間敷候、隨而玄丹公此方へ御出陣之儀候、哀此刻被成御越も、連々有増鹽越へ御同道候へかしと念願仕候、何様從有躰罷上可申入候、恐々謹言、

願成寺

連壽(花押)

九月廿一日

願成寺連壽

玄丹

坪坂伯耆入道殿 御宿所

〔勝興寺文書〕乾 越中

其國之様子餘無心許候條、以飛脚申候、抑不慮之仕合故、富山落居無是非次第候、去年以來、賀越兩州對陣之事候之間、隨分手合之備無油斷候キ、雖然信玄自身至于越後亂入之儀者、遠三之動無據故遲々、其已後彼表明隙歸陣候條、直(踏カ)二向越府可動干戈之旨令儀定、既信越之境迄先衆立遣候之處、于途中得病氣、躑躅(踏カ)之砌、輝虎退散ニ付而、無役ニ納馬候、信玄煩も平元之形候、然則後詰之行、聊不可有用捨候、無二父子可令出馬候間、加州衆重而出張、其國靜謐候之様御肝煎尤候、委曲期來信之時候、恐々敬白、

信玄(花押)

勝賴(花押)

十月朔日

勝興寺

〔上杉家譜〕

几下

元龜三年、椎名神保ノ族黨、魚津小出増山ノ土兵萬人ヲ招集シテ、富山城ニ據リ、塞ヲ七所ニ築テ之ヲ守ル、十月、輝虎、越中ニ入り、七塞ヲ陷レ、遂ニ富山ヲ

攻メ、之ヲ拔ク、

六日、己未、足利義昭、織田信長ヲシテ、越中ノ和睦ヲ斡旋セシム、加賀一向一揆ハ、

元龜三年十月六日

一四三

信玄出馬セズ只巧言ヲ以テ宗徒ヲ激勵ス

朝倉義景ニ倚リテ謙信ト和セントシ、武田信玄亦信長ノ斡旋ヲ卻ケ、義景ニ倚リテ謙信トノ和ヲ謀ル、是日、謙信、ソノ形勢ヲ鮎川盛長ニ報ズ、

〔謙信文庫所藏文書〕○越後

重而以飛脚音信喜入候、仍此口追而存知之儘候、越甲一和、以上（足利義昭意見）意織田信長被取、

間定可有一途候、扱亦賀州衆陣城へ押詰候故、昨今者朝倉義景ニ付而令悵望候、兎角ニ當中旬之内ニ者、隙明可歸府候間、可心易候、其地普請用心油斷有間敷候、萬吉謹言、

（元龜三）十月六日

謙信（花押）

鮎川（盛長）孫次郎殿

〔歷代古案〕九羽前

就越甲和與之儀、被加上意候條、同事ニ去秋（元龜二）以使者申届之處、信玄所行寔前代未聞之

無道者、不知待之義理、只今不顧都鄙之嘲哂次第、無是非題目候、○下略、全文ハ十一月二十日ノ條ニ見ユ、

十一月廿日

信長（織田）

不識庵

〔大行院文書〕○新編會津風土記六十三所收

一去秋可被聞及歟、信長以被、優越甲一和意見之處、信玄如何分別候歟、朝倉義景於取

信長足利義昭ノ命ヲ以テ越甲ノ和ヲ周旋ス

刷者、越甲無事可落著候、織田信長至于取刷者、爲同心間敷由候、○上下略、全文ハ、天正元年三月五日ノ條ニ見ユ、

（天正元）三月五日

謙信

遊足庵

（淳相）遊足庵○會津僧

○北條氏政、謙信ト絶テ信玄ト和スルコト、正月十五日ノ條ニ、信長ノ信玄ト

絶テテ、謙信ト共ニ信玄ヲ攻撃センコトヲ約スルコト、十一月二十日ノ條ニ見

ユ、

十八日、辛未越中ノ椎名康胤等、降ヲ請フ、謙信許サズ、是日、コレヲ上野沼田城將河

田重親ニ告ゲ、併テ武田信玄・徳川家康・織田信長ノ情況ヲ報ズ、

〔歷代古案〕三羽前

急度令馳一簡候、仍信玄濃州之内、遠山號岩村認候處、城主取合、敵數多討捕、敵追拂

候、則織田信長兄弟ニ候、織田三郎五郎河尻與兵衛、遠山岩村江入置、遠山七頭織田

被入手候、惣體遠山之證人、信玄ニ差置候處ニ、遠山兄弟令病死候付、此度信玄打不

虞候、結句以此次、而信長、遠山入手、信長成吉事、事候、岐阜へ者、佐久間貳千餘人ニ而

留守中被申付候、

一濃州へ之信玄行相馳、以其足參州號山家三方へ信玄成行候處ニ、是茂家康取合被

信玄美濃ヲ侵ス

徳川

元龜三年十月十八日

一四六

信長家康
一致シテ
信玄ニ敵
對ス
當家之弓
矢わかや
くへき瑞
謙信ノ軍
加賀ニ向
宗徒ニ勝
ツ

追拂、信玄失手、駿州ニ有之由申候。織田信長、德川家康、此度信玄成敵體之事、且無擬、
且信玄運之極歟、さりとしてハ、大事之覺語、信玄怠候、偏當家之弓矢、(瑞)わかやへ(隨)祀、
相ニ候、何様此口打釘、自春中、信長家康申合、信玄ニ汗をか、(瑞)努へく候、定而可爲大
慶候、

一從所々申來分者、賀州凶徒可敗北由申來候、左様ニも候歟、初、椎名、何も敵體之者共、
雖、(瑞)悃望候、とても見詰候間、此度擊取、向後迄此口爲可心易、何をも申拂候、如何様ニ
只者、除間敷候條、可心易候、乍、去夜中敗北候者、無了簡候、

一織田方、德川方使者、飛脚置詰、行談合候間、是亦可心易候、濃州へ者、自當陣五日路ニ
候、參州へ者、七日路ニ候、程近申合候、

一爲披見三木良賴書中、家康書中、差越候、良賴書中之内、自綱相動候とハ、良賴病氣ニ
而不期、(歸)今明日候之間、息自綱當陣へ越せ候事候、萬吉滯陣之節、可申候、謹言、

追而申候、信長ハ、朝倉義景對陣、向義景要害多取立、陣中堅固ニ申付、息壽妙丸爲差
向、信長ハ、濃州へ歸陣候而、家康令談合、如何共、駿州へ打籠、此度可果由候、兎角ニ信
玄(蜂)ちの須(巢)よ手をさし、無用候事仕出候間、信玄折角可申候、家康良賴書中、披見之
上、厩橋へ可越候、飛脚勞候者、彼飛脚ヲハ、吾分所ニ留身、の直書、良賴家康之書中、吾
分飛脚(油)よ爲持、彌五郎所へ指越、返事を取、彼飛脚を可返候、其地所々之寄居、普請用

家康及ビ
三木良賴
ノ書狀ヲ
回視シ之
ヲ厩橋城
ニ回送セ
シム

心弓(油)斷有間敷候、以上、

(朱書)元龜三
十月十八日

河田伯耆守殿

謙信

○謙信、椎名康胤ノ降ヲ容レ、富山城ニ戍兵ヲ置キテ、軍ヲ旋スコト、天正元年正
月、是月ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、上野白井城主長尾憲景、武田氏ノ兵ニ攻メラレ、防グ能ハズシテ某地
ニ退居ス、謙信コレヲ存問ス、是日、憲景答謝シ、且、佐竹義重トノ親和ヲ勸告ス、

〔歷代古案〕一羽前

御貴札拜見、畏入存候、誠此度不思議之仕合を以、(不動山筋カ)當地江罷移候、殊御祝儀被成、大鷹一
居被懸、御意、御懇情之至、過當至極奉存候、將復、兩方之儀、先書ニ申上通ニ御座候條、彌
(佐竹)義重江御懇切御尤ニ候、猶御使頼入候間、令省略候、恐々謹言、
(元龜三)十月十八日 長尾左衛門尉入道(憲景)

越府

人々御中

○謙信、憲景ニ信玄ノ死去、及ビ家康、信長又武田氏ニ迫ルノ狀ヲ報ズルコト、天
正元年六月二十六日ノ條ニ見ユ、

元龜三年十月十八日

一四七

元龜三年十一月七日

一四八

十一月大 癸未 朔 盡

七日己 丑謙信、織田信長ノ子ヲ養ハントス、是日、信長コレヲ諾ス、

〔上杉古文書〕十六 羽前

謙信信長
ニ大鷹ヲ
贈ル

今般以使者申處、則有御入眼種々御懇慮本懷不少候、隨而(大)お鷹五連被懸御意候、前代未聞過當至極候、別而寵愛無他候、右之趣御取成所仰候、恐々謹言、

(元龜三)
十一月七日

(織田)
信長(花押)

(景綱)
直江大和守殿

〔歷代古案〕二 羽前

追而申入候、抑御誓談條々忝次第候、殊爲御養子愚息可被召置旨、寔面目之至候、於何時自路次様子可進置候、向後彌得御指南可申談候、此等之趣御披露可爲本望候、恐々謹言、

十一月七日

信長

直江大和守殿

〔上杉年譜〕十六

元龜三年十一月七日、信長ヨリ重而飛札到來ス、是ハ信長ト御誓約ノ上、信長ノ子息ヲ越府ニ差置ルヘキトナリ、實ハ質人ナリ、然レ共如何ナル評議

ト行ハレズ

ニヤ、越府へ下向ノ沙汰ナシ、
十七日亥、越中瑞泉寺、加賀ノ一向一揆ト協力シテ、謙信ノ兵ニ對抗センコトヲ謀ル、

〔寸金雜錄〕一 越中

態令啓上候、仍此表之儀、彌敵之備手強陣取候、能美(加賀)江沼衆著陣、近頃可然存候、就其諸篇申談度候間、一夜泊御越可然候、於其上國々體京都へ可有言上、子細有之間、從我等如此可申由候、猶自杉壹(女任)可有演說候、恐々謹言、

(元龜三)
十一月十七日

瑞泉寺(花押)

御藏方衆

○是時、富山城再ビ一向一揆ノ手ニ歸シタルガ如シ、富山城陥ルコト、十月一日ノ條ニ、椎名康胤等、降ヲ請ヒ、謙信之ヲ許サザルコト、十月十八日ノ條ニ、謙信、康胤等ノ降ヲ容レ、富山城ニ戍兵ヲ置キテ、軍ヲ旋スコト、天正元年正月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔瑞泉寺文書〕中 越

元龜三年十一月十七日

一四九

敵ニ對シ
手強ク陣
取ル
加賀能美
江沼ノ一
向一揆著
陣

勸進狀

本願寺緯
如瑞泉寺
ヲ建立ス

略○上 去明德初曆季陽下旬暫辭上都之塵累遙赴北陸之邊邑頻在幽居之志屢卜栖息之地然而无本尊之可恭敬无寺院之可住持只致瞻仰於虛空之外僅凝觀解於禪念之中雖應不乖法界唯心之真理无便于想淨土真要之靈儀爰不圖先得一勝地即越中國都波郡山斐郷内以此處稱井波山深兮俗緣偷里遠而人事稀觀念无妨練行在便仍擘山腰拂莓芸既及立柱之企兼定題額之字蓋於此地_(緯如)在靈水故稱瑞泉寺○下

明德元年八月 日

勸進沙門堯雲敬白

〔眞宗假名聖教〕_(十二反古裏)

緯如上人越中國井波トイフ所ニ一字御建立瑞泉寺ト號ス是又勸願寺ナリ後小松院ノ御宇明德元年ノ比造立ナリ

〔二十四輩巡拜圖會〕_(越中之部)

井波蘭_(東派御堂)杉谷山瑞泉寺ハ人皇百一代の聖主後小松院の勸願所として本願寺第五世の別當緯如上人建立し給ふ所なり本堂十七間四面本尊阿彌陀如來を勸願安國の尊像と稱す○中 此寺越中第一の貴院にして代々東本願寺御門主の御連枝寺務し給ふ所なり靈寶數品傳來これを略す

二十日_(壬寅)謙信織田信長ト誓書ヲ交換シテ武田信玄ニ當ラントス是日信長

答書シ相共ニ信玄ヲ攻撃センコトヲ約ス

〔歷代古案〕_(九羽前)

就越甲和與之儀被加上意候條同事ニ去秋以使者申届之處_(武田)信玄所行寔前代未聞之無道者不知侍之義理只今不顧都鄙之嘲哂次第無是非題目候

一信玄既如此之上者以專柳齋_(山崎秀仙)如誓約永可爲儀_(義カ)絶事勿論候自其方兩通之罰文加披見候先書之御返答者自他不入子細候今度改而被仰越候一儀專用候信長與信玄

信長信玄
ト絶テ謙
信ニ結ブ
長景連信
長ニ使ス

間之事御心底之外ニ幾重も遺恨更不可休候然上者雖經未來永劫候再相通問敷候以誓詞蒙仰之趣與愚意令啐喙間則翻牛王血判長與_(景連)顯眼前候貴邊も信長與申談信玄退治不可移年月候行等之儀切々可申承候

信玄退窮
セン

一遠州表信玄備之體一向不首尾之由候駿遠間之通路慥切留候然而自此方令出勢之條信玄近日之陣場を引崩信州を後ニ當山奥へ夜中ニ執入候信州へ道を作可往還候半是も深山節所人馬之足も輒不立候由候間可爲難義之旨候畢竟可敗軍

信長謙信
ニ越中ノ
方面ヲ後
ニシテ先
ツ信玄ヲ

候一越中富山表之模様具承届候一揆等并諸牢人種々懇望申由候雖不珍候堅固ニ被仰付候故候就其愚意可啓達候由候間乍憚申越候敵陣廿日卅日之間ニ可相果候趣ニ付而者押詰可被決事尤ニ候若又來春迄も可續之様ニ候之先々差赦被納

元龜三年十一月二十日

亡サンコ
トヲ求ム
遠江方面
ハ家康ニ
委ス

朝倉義景
滅亡近キ
ニアリ

信長ノ意
見ヲ用ヒ
テ謙信越

中ヨリ納
馬ス

小田守治

越中陣引
揚信長ノ使
者ヲ厚遇
ス

飯田長家

河隅忠清

直江景綱

元龜三年十一月二十日

馬候而、信上表御行可然候半、左候之、從此方信州伊那郡其外成次第ニ可發向候、遠州者家康與此方加勢之者共一手ニ備、信玄ニ差向候者、彼是以敗軍案之圖ニ候、信玄足長ニ取出候事、時節到來幸之儀候間、不可遁此期子細候、信玄を被討果候上ニ至而ハ、賀越之一揆御成敗雖何時候、更以不可入手間候ハハ歟、前後之處、御校量御分別專要候、

一江北小谷表之事、落著不可有幾程候、朝倉義景歸國之調義、無油斷候へ共、懸留候間、不任心中由相聞候、士卒共以難堪不過之旨ニ候、然間籠城之體沙汰之限候、一度々如申候、虎御前山其外諸城ニ人數漫ニ入置、信長自由ニ可働支度候、聊無越度様ニ令覺悟候、於時宜者可御心安候、猶長與可爲口上候、恐々謹言、

(朱書)元龜三

十一月廿日

不識菴 進覽候

〔歷代古案〕

六羽前

不思議之世上故、其以來者不申届口惜候、仍去秋越中表へ出馬、向敵地數ヶ所向地取立暫可立馬處、可有其聞候、信玄向遠州參州立武色之條、德川家康、織田信長依好誼家

康、信長無二無三信玄ニ事切、當方江入魂、信玄可押詰、内談事終而、信長意見早々從越

中、愚老納馬、關、信當秋一功肝要候、月二十一日、全文ハ、天正元年四月、條ニ收ム、

(天正元) 四月廿四日

小田太郎殿

謙信花押

〔上杉家古文書〕

御書拜見仕候、仍敵追日無衆ニ罷成候由御説候、彌雪中ニ向申候間、可致退散事乍恐必然奉存候、殊良頼も漸御著陣之段、彼是以可然御事ニ御座候、然者御上使信長之使中へ御小袖則結構ニ相調申候而、大和守持參、直渡進候、何も過分之由御請被申候條、指上申候、此旨可預御披露候、恐惶謹言、

飯田孫右衛門尉

十月十一日

長家花押

河隅三郎左衛門尉

忠清花押

直江大和守

景綱花押

元龜三年十一月二十日

元龜三年十一月二十四日

吉江喜四郎殿

一五四

〔參考〕

〔北越軍記〕四下

謙信越中在陣ヨリ長與一郎ヲ使者ニテ、信長へ被申通、信長ヨリ返簡、極月謙信富山城ヲ攻落、二千餘被打果、右信長ヨリハ、家康ト信玄遠州口ニテ取合候間、謙信ハ越中ヲ指置、信州へ働、信玄カ留守ヲ被攻候ハ、表裏ニ敵ヲ受、信玄遠州ヨリ可引入トノ申合ナリ、

二十四日、丙午下野高取東ノ來迎寺僧露庵、良閑ト共ニ、上洛ノ途、越後ヲ過ギテ、

平等寺藥師堂ニ參詣ス、

〔平等寺藥師堂内題書〕後越

關東下州高取東之來迎寺所化露庵、上樂洛之時分、爲形見、南無阿彌陀佛、淨土之末學良閑書之也、

元龜三霜月廿四日

○天正五年四月十九日、參詣者ノ題書、便宜左ニ合收ス、

〔平等寺藥師堂内題書〕後越

關東上州白井住人小淵又三郎

天正五年四月十九日

○藥師堂再興ノ事、永正十四年六月是月ノ條ニ、此外ノ堂内題書ハ、永祿十年四月廿五日ノ條、天正六年三月是月ノ條ニ見ユ、

天正元年癸酉紀元二千二百三十三年

正月癸未朔

是月、是ヨリ先、謙信越中ニ入りテ一向一揆ヲ擊ツ、椎名康胤等降ヲ請フ、謙信、織田信長ノ勸ヲ容レテコレヲ許シ、富山城ニ戍兵ヲ置キテ歸國ノ途ニ就ク、

〔大行院文書〕○新編會津風土記六十三所收

○上當口□爲、出馬度々勝利、當陣及二三度敵間を押詰候故歟、正月賀州、越中之凶徒令、惘望候間、關信之依以□任惘望、□爲號、富山地利爲出城、半途迄納馬候處、○下略、全

三月五日天正元

游足庵淳相

〔歷代古案〕○羽前

雖未申通候、令啓達候、仍和融之儀ニ付、而種々被入御精、殊拙者進退別、而御馳走之段、

天正元年正月是月

一五五

椎名康胤

長尾顯景
ニ依リテ
降ヲ請フ

天正元年正月是月

御懇意之至、難申謝候、於向後者、彌可然様ニ、身上御取成頼入候、猶期後信候、恐々謹言、

正月廿日

長尾喜平次殿

康胤

〔顯如上人御書札案留〕

元龜第四

本願寺顯
如越中ノ
情況ヲ朝
倉義景ニ
報ズ

別番之御狀令披覽候、自^(武田)信玄遠三尾濃門下之輩働事、貴邊へ被申越由承候、切々申付様候、雖然時宜見合儀ニ候間、其遲速之段者不及了簡候、三州之儀も勝^(曼)萬寺近日令進發由申來候、濃州表之儀者、舊冬勢州長島より申付、濃州之内ニ新要害を相構、日根野備中守入置候、岐阜與其間三里有之所ニ候、日々及行由候、將亦越中表之儀ニ候、越後勢爲押加州衆罷立候處、輝虎自身令出馬于今彼表ニ在陣候、隨分方々申付候、聊無油斷候、次江北表之儀、如御存知、淺^(淺井長政)備無人ニ付而、門下之者竭粉骨様候歟、委細下間上野可申入候、右之通以御分別可有演說事專用候、此方へも細々信玄直札到來、飛脚等上下度々事候間、萬端申談候、於遠州表極月廿二合戰、甲州衆無比類働不及是非次第候、大慶此事候、尙追々可申展候、

正月廿七日

信玄本願
寺ト類リ
ニ談合ス

〔朝倉義景〕
左衛門督殿

〔歷代古案〕

九羽前

信長越中
ノ敵ヲ救
シテ信玄
ニ當ラン
コトヲ謙
信ニ勸ム

一越中富山表之模様、具承届候、一揆等并諸牢人、種々懇望申由候、雖不珍候、堅固ニ被仰付候故候、就其愚意可啓達候由候間、乍憚申越候、敵陣廿日卅日之間ニ可相果候趣ニ付而者、押詰可被決事尤ニ候、若又來春迄も可續之様ニ候之、先々差赦被納馬候而、^(信濃上野)信上表御行可然候半、左候之、從此方信州伊那郡其外成次第に可發向候、^(略全文)

ハ元龜三年十一月二十日ノ條ニ收ム、
^(元龜三)

十一月廿日

信長^(織田)

不識庵

進覽候

○謙信越中ニ入り、新庄ニ陣スルコト、元龜三年八月十八日ノ條ニ、富山城ヲ陥ルコト、十月朔日ノ條ニ、椎名康胤等降ヲ請フコト、十月十八日ノ條ニ、康胤復、叛クコト、本年三月五日ノ條ニ見ユ、

二月壬子朔

四日、^(乙卯)去冬、徳川家康、織田信長ノ援ヲ得テ、武田信玄ト、遠江三方原ニ戰フ、謙信、使ヲ家康ニ遣シテ之ヲ慰問ス、是日、家康答謝シ、併テ兵ヲ信濃ニ出サンコ

天正元年二月四日

三方原戰

トヲ請フ、

〔改正三河後風土記〕

(武田) 信玄は、已に(遠江)

二股城を攻抜き、元龜三年十二月廿二日、二股を

出で、(德川家康) 神君の居給ふ濱松近邊より、毛鹿堀江の城に打廻らんとて、處々の村里を放

火し、(遠江) 三方原に陣を取り、四萬三千餘騎段々に備へたり、神君是を聞き、敵我郊野を踏

付るを、一矢を射ざるは大丈夫にあらずと仰られ、八千の人数を發して三方原へ出

給ふ、衆寡の數明なれば、申刻に戦ひ始り、はや黄昏に及び、雪は頻に降て、濱松勢は惣

敗軍となる、究竟の勇士三百餘人討死す、信長より加勢にさし向られたる、(盛政) 佐久間瀧

川一戦にも及ばず敗走、(三) 略

〔信長公記〕(五) 元龜三年十二月廿二日、(三) 身方が原にて數輩討死在之、(三) 略

〔伊能茂左衛門氏所藏文書〕(三) 下

以使僧承候條、得其意候、仍二俣之普請出來候間、向三州進陣之砌、家康出入數候之條、

去廿二日、當國於見方原、遂一戰、得勝利、參遠兩國之凶徒、并岐阜之加勢衆千餘人討捕、

達本意候間、可御心易候、又如巷說者、御手之衆過半歸國之由、驚入候、各勞兵勿論候、雖

然、此節信長滅亡時刻到來候處、唯今寛宥御歸、勞而無功歟、不可過御分別候、猶附與彼

口上候、恐々謹言、

信玄三方原之ヲ朝倉義景ニ報ジ且ツ勵マス

(元龜三) 拾二月廿八日

(武田) 信玄(花押)

謹上 朝倉左衛門督殿

〔古今消息集〕

舊冬就一戰之儀、遠路御飛脚深志之至候、委細横田半介口上申入候、抑、信玄至野田、在

陣候、就夫參州吉田江相移、尾濃之者同陣候、後詰之儀、近日信長出馬之間、此節可相果

覺悟ニ候、然ハ加州表被屬御存分、由、尤大慶候、殊更信州可有御出陣旨、急速御手合願

存候、尙以使者從、是可申述候、恐々謹言、

(德川) 家康

(天正元) 二月四日

上杉殿

〔參考〕

〔北越軍記〕(四) 下

天正元年癸酉、(謙信) 四十四歲、二月、家康公ヨリ植村與三郎ヲ使者ニテ

被仰越候ハ、去冬極月廿二日、遠州口箕方原合戰、無勝利ニ付、信玄勝ニ乗テ東參河へ

發向仕候間、謙信ハ信州へ働、甲州迄モ御攻入候ヘトノ事ニテ書狀有、并備前守家ノ

刀ヲ御進入、異名ハ德用ト號ス、謙信ヨリモ音物贈答、信玄參州岡崎城へ攻詰申候ハ

バ、謙信ハ信州ヨリ甲州へ取懸可申旨約諾有之、

天正元年二月四日

一五九

謙信横田半介ヲ三河ニ遣ス

家康謙信ニ刀ヲ贈ル

天正元年二月二十六日

一六〇

〔上杉年譜〕十七

天正元年癸酉春二月上旬、三州徳川家康ヨリ、新年ノ祝儀ヲ賀セラレ、使節到來ス、是、往歲以來好ミヲ通セラル、故ナリ、進物ハ備前良工ノ太刀也、此太刀ハ、代々徳川家ニ傳ハル名劔ニテ、其名ヲ徳用ト號シ、別シテ珍藏ナレハ、定テ管領ニ於テモ懇篤ニ存セラルヘキ由、念頃ニ申來ル、使价者（遠江秋葉山）葉山ノ別當權現堂ナリ、家康ヨリノ口上ニハ、舊冬遠州味方原ノ合戰ニ、信玄勝利ヲ得タリ、モシ其鋒ヲサマサス攻ルニ於テハ、落城疑ヒ有マシキ所ニ、如何ニ思レケルニヤ、即時ニ人數ヲ引揚ラハ、是皆家康不意ノ仕合ナリ、管領聞シ召レ、信玄早速群士ヲ卒シ、濱松ヲ攻ラレサルハ、爭カ越度ニアルヘカラス、信玄ハ、只家康數年ノ覺悟ヲ察シ、氣遣レタル故ニ、其勢ヲハ引揚タルヘシ、誠ニ深意ノ謀略ナリ、家康ノ手柄モ又莫大也ト御褒美アリ、去ハ其頃諸國ノ武士評シテ曰ク、信玄切處ヲ怠リ、軍利ヲ得ラレサルハ尤殘念ナリ、○中是皆家康信長家運ノツヨキシルシナラン、管領モ内々此思シ召タルヘキ事ナレ共、家康積年ノ軍功ヲ稱シ、又信玄ノ軍配ヲモ諂リ給ハス、

謙信信玄ノ退軍ヲ評ス

二十六日、近江淺井長政、越中勝興寺ヲ勵マシ、一向一揆ヲ糾合シテ、謙信ニ抗セシム、

〔勝興寺文書〕○越中

〔表書〕勝興寺御同宿中

淺井備前守長政

今度啓達候處、御懇報畏悅候、其表之御樣體具承満足候、雖不及申候、彌御堅固ニ御備可爲專一候、輝虎和與之懇望候共、信玄（武田）江無御相談而者、一向無勿體候、敵計略ニ申族可有之候、御一味中被示合、互於同心上者、別條候、御門主樣江モ右之通連々得御意候、將又當月十三日、公方樣被立御色、義景拙身江被成下御内書候、爲御披見寫進入候、當國志賀郡一篇此方屬手候、東國之儀、遠州三州不及申、東美濃加治田御不奈多尾三ヶ所城、重而信玄江申合候、甲州先勢至東美濃亂入候、義景當表早々進發相極候、申談可及行候、諸方首尾候之間、自他御本意不可有程候、是非無御退屈御籌策肝要候、猶以御備之時宜爲可承、追而申入候、恐惶謹言、

二月廿六日

長政（淺井）花押

勝興寺御同宿中

三月 辛巳朔

五日、是ヨリ先、謙信、越中ヨリ歸國ノ途ニ就クヤ、椎名康胤、復、背ク、仍リテ謙信、コレヲ富山城ニ攻メ、是日、戰況ヲ會津遊足庵淳相ニ答報ス、

〔大行院文書〕○新編會津風土記六十三所收

天正元年三月五日

一六一

信玄ト謙
セズシテ
謙信ト和
スル勿レ
義昭信長
ト戦ヒ援
ヲ淺井朝
倉兩氏ニ
求ム

盛氏佐竹
義重ト白
河口ニ戰

以使□□返可申處、□□直談爲可申分延引□□白川□盛氏(蘆名)父子之出馬仕合能、結句義重(佐竹)乘向候處ニ、父子御擬故、敵敗北、誠心地好無比類候、一、白川被渡、不肖之間、愚之越

歸馬ノ上

山無之者、可被、遂、無事由候、(歟)尤候、雖然、浮沈共ニ盛氏父子江當方申談處、敵味方無其

淳相ト議

隱候條、歸馬之上、其方招候て始末談合申、其上、兎も角も父子可爲御分別候、越山之有

シテ盛氏

無者、於白川者不及申、深谷(上野)羽生(武藏)可引助、處存詰之間、父子之御分別尤候、一、三樂(太田資正)以、稼義

ノ爲ニ計

重盛氏一和雖被、(極月)當方への望計ニ一和仰切之由、難盡筆紙候、一、深谷并北條丹後守

太田資正

父子如注進者、□□關東方へ氏政遣□□無用之弓矢立候、而、初、(佐竹津宮)佐宮諸家中同事而打

ラントス

向、既一戰之被擬候處、廿九夜中自多切原敗北之處ニ、東方の衆擊押付、數千人討捕候

北條氏政

故、岩付ニ一騎にて氏政逃入候、由申候、加様に東方之衆ニさへ出合令敗軍候、増而愚

關東ニ敗

之越山日ニ可合旗歟、腹□候、去秋深谷羽生(北條氏照)江源三代官に立由候歟、身の當口へ之無

軍ス

手透處ヲ見聞申、様々のめり出候、向□越山申候に、氏政計兼而及對陣者、其方咲物ニ

氏政ハ謙

せらるへく候、信玄氏康同陣候時も、度々愚老乘出、退散之時も候つる、旁々も可被及

信ノ敵ト

聞候、一、東方此上盛氏於談合申者、何も別義有間布歟、氏政へ爲同心、由候得共、氏政□

ラズ

手作舊冬東方に打出候ニ付、而、東方何も敵ニ作立候條、縱東方の衆、盛氏愚老ろとへ

盛氏謙信

爲同心、間敷分別に候共、そや氏政も手切之上者、此方江爲不取付、不叶候歟、一、去秋可

信長ト信
玄トノ不
和

被聞及歟、信長以被、(極)越、甲一和意見候處、信玄如何分別候哉、朝倉義景於取刷者、越、甲

信長家康

無事可落著候、織田信長至于取刷者、爲同心、間敷由候、而、徳川家康へ手出し、同濃州向

共ニ謙信

遠山、信玄立色候、家康息者、信長むこよて、信長芳志故、家康三州遠州被入手候、依之遠

ニ頼ル

州、參州江信玄手出し、信長へ事切も同前之處、猶以濃州之内遠山へ信玄出物色候間、

信玄實了

彌信長、家康無二無三當方へ浮沈共ニ以數通之誓詞被申合候、信玄可押詰ヲ存時者、

フシテ一

當口□爲よ出馬、度々勝利、當陣及ニ三度敵間を押詰候故歟、正月、賀州、越中之凶徒令

向一揆ヲ

悞望候間、關、信之依以□任、悞望□□爲號、富山地利爲出城、半途迄納馬候處、自信玄使

煽動セシ

號、長延寺者、表裏申候付、而、敵富山へ引返候間、愚老事も押返、富山へ凶徒追入、稻荷同

越中平定

岩瀨本郷二宮、押上向城敵地之間、上道或半里、又一里、又十町有之處も候に、押詰、向城

ノ後歸陣

取立、普請五日之内ニ出來、其上仕置申附可納馬候、左候者、其方可招候、早々大義ニ候

シテ淳相

共被越、靜に雜談申度候、扱亦、賀州、越中之凶徒者、神通川向に陣取候、富山之外に一ヶ

ノ來越ヲ

所も敵城、神通ヨリ内ニ無之候、果而富山持募義者有之間、布候、一、極月廿一、於遠州、信

待タント

玄、家康有仕合、小幡尾張守初、息兄弟五百餘人、敵打捕、家康被得勝利以來、信玄除兼申

ス

候、于今遠三之山入ニ有之、由申候、大山ニ候間、道作事成間、布由申候、飛州、能州、何も隣

神通川以

國無別義候、可心安候、萬吉重而恐々謹言、

東敵無シ

小山佐竹
二氏ノ關
係ヲ疑フ

天正元年三月五日

一六四

追而(小山)氏治佐竹へ縁邊ニ取組由候哉、如何不審ニ候、舊冬も被越使、理而懇頃
に候、僞歟と思候、以上、

三月五日

謙信(花押)

(津相)
游足庵○會
津僧

〔細川家記〕二藤孝二

一向一揆
富山城ヲ
保持ス
謙信稻荷
ニ戍兵ヲ
置ク

略○上先書ニ大方申候、謙信越中一揆楯籠富山ニ差向、稻荷屋敷と云地を要害ニ相構
候、其間五六町有之由ニ候、同新庄と云城ニ置人數、彼屋敷へ相移、今月朔日、越府ニ至
て納馬之由、重而使節來候、左候へハ諸口當も隙明候間、不圖令上洛可勵存分候、每事
無隔心預指南者祝著ニ候、替模様候へ、雖遠路候、切々示給可爲快然候、尙期來音候、
恐々謹言、

三月七日

(織田)
信長御黒印

(細川藤孝)
〔上包〕細兵殿

彈

○謙信、富山城ヲ陥ルコト、元龜三年十月一日ノ條ニ、織田信長、椎名康胤ノ降ヲ
許スヲ謙信ニ勸ムルコト、同十一月二十日條ニ見ユ、

〔參考〕

大行院

〔新篇會津風土記〕之六十三 陸奥國耶摩郡 大行院

遊足庵宥
順

本山派ノ修驗ナリ、其先ヲ應慶ト云、正和四年ニ遷化ス、五世ノ孫宥春子ナカリシカ
ハ、太郎丸河内守盛次カ孫某ヲ養テ修驗職ヲ相續シ、正善院春榮ト稱セリ、盛次百石
ノ地ヲ分ツト云、今ニ其地ヲ正善院林ト稱ス、春榮カ遠孫宥順ト云モノ、始メ遊足庵
ト稱セリ、上杉謙信ヨリアタヘシ書翰トテ、今ニ持傳フ、蠹テ讀ベカラザル處アリ、書
翰、前掲ニ
付キ略ス、

〔附録〕

〔上杉文書〕○羽前

春中、其家中何興哉、覽御取亂之様ニ候つる條、半途迄及出勢處、爲其禮義、游足庵被差
越、條々向後迄入魂之筋目承、令啐喙之上、謙信事も聊心馳之處、入魂申候、彌々御分別
可爲大慶候、猶游足庵可有口舌候、恐々謹言、

追而、折節見來之間、雖左道候、扇子見々きつけ、拾本進之候、以上、

七月三日

謙信(花押)

蘆名平次
郎

蘆名平次郎殿○年次詳ナラズ、
姑ク茲ニ附收ス、

十九日、癸巳謙信、長景連ヲ織田信長ニ遣シテ、徳川家康ト與ニ、武田信玄ヲ夾撃セ

天正元年三月十九日

一六五

天正元年三月十九日

一六六

シコトヲ協約セシメ、且ツ、山門ヲ再興セントノ意ヲ告グ、

〔保阪潤治氏所藏文書〕後〇越

覺

信長臣林平右衛門尉

一ウ、様ニ林平右衛門尉方へ（河田長親直江景綱）兩人之從所爲申越候、乍去信長被當機ニ候者、此以條書申分用捨之事、

山門再興ハ信長ノ功徳トナルベシ

一山門再興先納得候而可然候、左様ニ候へど信長畢竟山再興候ニ成候間、信玄失手候者、都鄙之唱、又者信長（祈禱）さたうとも成可然歟之事、

信玄ヲ滅ホスノ後長政等ヲ信長ノ意ニ任セン

一淺井身上之儀も、是も先々義景被申成ニ尤候、左様ニ候者、信長家康分國被相靜、其上信玄則時ニ愚老、信長家康申合可打斷候、其以後者、淺井者不及申、何方へ之信長存分も可相届候、此段可申分事、

右、如何共信長備堅固ニ候へウしと覺悟候而申候、於可當機ニ者一切無用、以上、

（天正元）三月十九日 謙信（花押）

長與（景連）一殿

〔北越軍記〕四下

元龜三年壬申、四十三歲（謙信）〇中、謙信越中在陣ヨリ、長與一郎ヲ使者ニテ、信長へ被申通、信長ヨリ返簡、極月、謙信富山城ヲ攻落、二千餘被打果、右信長ヨリ

ハ、家康ト信玄、遠州口ニテ取合候間、謙信ハ越中ヲ指置、信州へ働、信玄ガ留守ヲ被攻候ハ、表裏ニ敵ヲ受、信玄遠州ヨリ可引入トノ申合ナリ、

〔附録〕

〔上杉古文書〕〇十二羽前

御書拜領過分之至、□入奉存候、然者以御條目被仰出之條々、奉得其意候、仍、信州御調儀之段、被仰出候、目出度肝要ニ奉存候、於當口兩度得勝利候之上、彌以成田押詰可申候、此等之旨、可預御披露候、恐々謹言、

河田善右衛門大夫

六月二日

忠朝（花押）

河田忠朝

林平右衛門尉殿〇年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

二十日、庚子足利義昭、織田信長ト隙ヲ生ジ、之ヲ除カントシテ成ラズ、是日、謙信ニ、武田信玄、及ビ、本願寺ト和シテ、信長ヲ擊タンコトヲ委囑ス、

〔松平義行所藏文書〕一色家證文之内

度々雖申越、追々染筆候、甲越并本願寺門跡半儀、此節遂和與、天下再興儀頼入候、令三和於上洛者、諸國輝虎可任覺悟、事案中候、然末代可爲名譽、爲其差越、最勝院、猶藤長昭

諸國謙信ノ覺悟ニ任ス、使僧最勝院一色藤長

天正元年三月二十日

一六七

眞木島昭光

天正元年三月二十日

木島光可申候也、

三月廿日

不識庵

(足利義昭)判

義昭智光院類慶ヲシテ謙信ニ説カシム

追々染筆候、甲越并本願寺門跡半儀、此節遂和與天下再興儀頼入候、令三和於上洛者、諸國輝虎可任覺悟事案中候、然末代可爲名譽、得其意上杉可加異見儀肝要、爲其差越、叡勝院猶藤長昭光可申候也、

三月廿一日

智光院

(足利義昭)花押

〔歷代古案〕

○羽前

追々染筆候、甲越并本願寺門跡半儀、此節遂和與天下再興儀頼入候、令三和於上洛者、諸國輝虎可任覺悟事案中候、然末代可爲名譽、得其意上杉可加異見儀肝要、爲其差越、叡勝院猶藤長昭光可申候也、

三月廿一日

川田豐前守とのへ

(足利義昭)花押

義昭信長ヲ退ケントス
信長義昭ヲ諫ム

〔信長記〕

六 室町殿御謀反之事

扱モ可有事ニアラネト、室町殿對信長卿謀叛ヲ企サセ玉フ由、粗聞へ有、コハソモ何事ソヤ、今京都御安座之儀、皆信長卿ノ忠功ナルニ、天魔ノ化カシ歟ナト奇ミ奉ル、其趣ヲ尋ルニ、去年ノ冬、信長卿ヨリ十七箇條ヲ以諫申サル、事有是公ノ御振舞仁政ニソムキ、不義非禮ナル事而已ナレハ、其器ニ當ラセ玉ハヌ事ヲ、深難キ思召、長久ノ御治世モイカ、有ヘキト痛ミ被申ニ依ナリ、諫言逆耳事世ノ習ナレハ、今此梟惡ヲハ思召立ケルナリ、略右ノ條々道理至極スト云ヘトモ、比干心ヲサカレ、伍子胥刑ニ逢習ナレハ、室町殿御憤有テ、謀叛ノ企究ケルナリ、折節東國ニハ武田信玄、遠江國東表へ差出、近江國ニハ淺井下野守子息備前守、美濃國關原邊マテ出張シ、越前國ヨリ朝倉モ加勢ノ淺井カ跡ヲ守リケル、斯ル時ヲ計ヒ、忽信長卿ヲ亡シ玉ハント、既ニ逆意ヲ搆給フナリ、信長卿サコソハ憤リ思ハレケンナレトモ、狂人走ハ不狂人モ趨ト、フトリアヒ奉ツテ、年來ノ忠義ヲ空セン事モ無詮ト思召ケレハ、御憤ノ旨趣ヲ承テ、何様ニモ御説ニ任スヘシト、日乘上人嶋田所助、村井長門守、彼等三人ヲ以君臣ノ義ヲ盡シ、理ヲ究メ、様々被申ケレトモ一向御承引ナク、御謀叛ノ色ヲ立玉ヒテ、早勢田ノ光淨院山中ノ磯貝新右衛門渡邊等ハ、江州堅田右山兩所ニ要害ヲ拵、人數ヲ

天正元年三月二十日

天正元年三月二十日

一七〇

信長義昭
ヲ石山城
ニ攻ム

入置キ、方々ノ手賦疑ヒ無ケレハ、信長卿此上ハ無力、彼徒黨等踏散サン事ハ不便ナ
レトモ、方々矢錢等ヲカケ、萬民ヲ惱ス事モ奇怪ナリ、早々行向ヒ追拂ヘトテ、柴田修
理亮(光秀)、明智十兵衛尉、丹羽五郎(長秀)、左衛門尉、蜂屋兵庫頭被遣ケル、彼四人ノ大將(天正元)、二月廿日
ニ打立、同廿四日ニ勢田ヲ越(近江)、石山ヘ推寄ル、石山城ニハ山岡光淨院大將トシ、伊賀甲
賀ノ者トモヲ集、楯籠リシカ、四人ノ人々使者ヲ立テ、信長卿ノ重恩ヲ忘レサセ玉フ
ノミナラス、每物非禮ヲ事トシ玉フ、公儀ヲ見續可申結構會テ無謂、急キ心ヲ變セヨ
カシト云ヤリケレハ、理ノ在ユル所尤トヤ思ヒケン、石山ヲ開渡シ、可屬幕下旨返狀
有ケル間、則石山ヲ請取、彼カ勢ヲ并セ、同廿九日、柴田ヲハ京都ノ押トシ、殘ル三人ノ
大將ハ堅田ノ城ヘ打向フ、海手ヲハ明智十兵衛尉請取テ、圍舟ヲ捲、海上ヨリ攻寄ス
ル、丹羽五郎左衛門尉、蜂屋兵庫頭二人ハ南ヨリ攻カ、ル、海陸ノ関ノ音夥ク鳴渡テ、
大山モ崩レテ海ニ入カトソ覺タル、城中ニモ究竟ノ兵五六百人楯籠リ、爰ヲ專途ト
防戦シカトモ、終ニ打負テ、午刻計ニハ攻落シ、三百餘人討レニケリ、生殘タル者共モ、
手ト身ト計ニ成テ、這々京ヘソ逃延タリ、角テ頭數三百餘岐阜ヘ進上申ケリ、其後明
智ハ坂本ノ城ニ殘リ、三人ハ三月二日ニ歸陣ス、其比室町殿及ナキ謀反ヲ企ラマレ
シ事ヲ、サミシ申者ヤシタリケン、洛中ノ辻々ニ札ヲ立テ、一首ノ古歌ヲソ書ニケル、

義昭敗軍

カソイロノ、ヤシナヒ立シカヒモナク、アラクモ雨ノ花ヲウツヲト、

○義昭、再舉ヲ計リ、信長之ヲ山城、檜嶋城ニ攻ムルコト、七月二十九日ノ條ニ見

ユ、

四月辛亥朔

五日、卯河田長親、牛丸備後守ヲシテ、越中富崎村ノ地ヲ知行セシム、

〔秋田藩採集文書〕十八

神保覺廣
知行買地
分

(越中) 婦負郡之内、神保近江守知行令買地分、富崎村進置候間、御知行不可有相違者也、仍如
件、

元龜四

四月五日

長親(花押)

牛丸備前守殿

十九日、己北條氏政、蘆名盛氏ニ勸メテ、與ニ佐竹・結城兩氏ヲ攻メントス、是日、
結城晴朝、コレヲ上野厩橋城將北條高廣ニ報ズ、

〔歷代古案〕七羽前

急度令啓候、抑己前度々如申達候、爲麥秋行、至野州口、近日可致出張候、内々以使始中

天正元年四月五日 十九日

一七一

氏政盛氏
ヲシテ義
重ニ當ラ
シム

天正元年四月十九日

一七二

終處存雖申述度候、路次不自由之間、不及了簡候、願者至于中旬、向佐竹御出張所希候、若替儀有之者、重而可申入趣、委細弟候源三、可申候、恐々謹言、

(天正元)
三月廿二日

(北條)
氏政

(盛氏)
蘆名殿

〔上杉家古文書〕

晴朝謙信
ノ越中平
定ヲ祝ス

氏政深谷
羽生ヲ攻
メントス

信玄歸國
ノ風説

其以來依無指題目令絶音問候、誠意外ニ候、抑如巷説者、於越州輝虎如思召被屬御本意之由、簡要此事ニ候、從越國珍説候哉、無御心元候、然者氏政麥秋爲調義、向深谷、羽生出馬之由、其聞候、如舊冬可有越河候哉、當方物近之間、窮屈千萬ニ候、佐竹義重も彼爲備可被打出催之由申來候、此上相替義候者、聊可申届候、自何去比者、兩度以簡札承候、則及回報候き、于今大慶ニ候、將又信玄從濃州陣歸國之由、風聞事實ニ候歟、委細來便可承候、恐々謹言、

四月十九日

(結城)
晴朝(花押)

(高廣)
北條彌五郎殿

○氏政、蘆名盛氏ト約シ、兵ヲ下野ニ出サントシテ果サズ、盛氏ヲシテ佐竹氏ト絶タシムルコト、七月二十三日ノ條ニ見ユ、

二十日、庚午謙信、越中ヨリ旋リテ、越後糸魚川ニ次シ、越中ノ諸將ニ情報ヲ送り、且ツ、敵狀ヲ報ゼシム、

〔歴代古案〕

○羽前

獵銃ノ音
ヲ聽キテ
信玄到ル
ト驚怖ス
越中ノ敵
ノ動靜ヲ
案ジテ糸
魚川ニ屯
ス
通行ヲ嚴
檢ス

急度以飛脚申候、様々各々異見候間、當地糸井河(西頸城郡糸魚川)へ昨晩令著馬候、信州諸口如何ニ茂無事候間、可心易候、小野主計助山中ニ鉄炮之音壹つあり候とて、信玄打出候由申、諸軍へ爲恐怖候、此鉄炮ハ狩人之鉄炮之由申候、少茂案間鋪候、今日茂爰元ニ人數不散、滞留申候ハ、爲如何ニ茂其地ニ各指置安知候間、一左右之内ハ、思候て身之事も滞留申候、從十八日今日迄之仕合、其地ニ有之時ヨリ猶々安知候而、日夜目ヲくゞす候、委返事ニ敵之模様可申越候、隨而番手之衆人數可歸候間、人留ヲ申候、柿崎清七郎(景家)、織部(吉江)、約束之判を爲三人庄田隼人(資)らへ被越候者、其判よて可通由申付候、萬吉重而可申候、謹言、

(天正元)
四月廿日 刻己

謙信

上條 彌五郎殿

琵琶嶋 彌七郎殿

柿崎 和泉守殿

上條政繁
琵琶島彌
七郎
柿崎景家

天正元年四月二十日

一七三

天正元年四月二十日

一七四

新津大膳
亮
平賀左京
亮
船見宮内
少輔
吉江景資
加地藤次
齋藤朝信
石川中務
少輔
山本寺定
長
上杉十郎
板屋修理
本庄繁長
代

新津大膳亮殿
平賀左京亮殿
船見宮内少輔殿
吉江(景資)織部佐殿
加地藤次郎殿
齋藤(朝信)下野守殿
石川中務少輔殿
山本寺(定長)伊豫守殿
上杉(上杉)十郎殿
鶴松
松本代板屋修理殿
本庄(繁長)彌二郎代

謙信松倉
城ニ入ル

〔上杉家古文書〕

頃者疎遠之條令啓候、仍先度爲返札謙信、信長江被仰合子細ニ付、松倉迄御納馬之由、
其後無御左右候、新地兩城共堅固之御仕置申由、示給候條快然候、(越中)
十五日ノ條ニ收ム、
卯月廿五日
江馬

輝盛(花押)

河田(長親)豐前守殿

御宿所

二十一日、辛未謙信、越後春日山城ニ歸リ、尋テ、常陸小田守治ニ、徳川家康、織田信
長ト與ニ、武田信玄、及ビ、北條氏政ヲ攻滅センコトヲ報ジ、關東鎮撫ノ爲ニ參陣
ヲ求ム、

〔歷代古案〕

六羽前

不思議之世上故、其以來者不申届口惜候、仍去秋越中表へ出馬、向敵地數ヶ所向地取
立、暫可立馬處、可有其聞候、(武田)信玄向遠州參州立武色之條、徳川家康、織田信長、依好誼、家
康、信長無二無三信玄ニ事切、當方江入魂、信玄可押詰内談事終而、信長意見早々從越
中、愚老納馬、關信當秋一功肝要候、左候者、家康申合從參、濃後詰涯分可致之由堅候、殊
上口之儀者小敵、於信玄擊者以其鋒不及弓箭、可消由候之條、城々ニ人數無不足籠置、
當廿一至于春日山納馬候、信玄事者、信長家康令談合、輒候、氏政者、信玄押詰候者、以其
足(蹴)け(倒)と(於カ)拔(郡カ)せ(於カ)へ(於カ)候、兎角ニ只今之分ニ有之者、關東無正躰候條、此度有御分別、其筋被
執繩、當群出越山者一際御稼肝心候、依此挨拶重而可申候、恐々謹言、

四月廿四日

謙信

天正元年四月二十一日

一七五

信長ノ意
見ニヨリ
軍ヲ旋ス

天正元年四月二十五日

小田太良殿(守治)

〔別歴代古案〕八

如仰未申通候處、預御珍簡、恐悅至極候、隨而今度越中表有御出馬、過半被屬御存分、先以御歸陣之由、太慶不斜候、殊當國珍疊之虎皮送給候、則拜領、此御事候、雖微少之至候、卷物二竹柄二百挺、致返進候、向後者互可申談候、御啐啄所希候、心緒御使者可有演說候、恐々謹言、

謙信ノ歸陣ヲ祝ス

五月拾日

信濃守泰高以下斷簡

〔歴代古案〕一羽前

上口存分之儘ニ有之、納馬ニ付而爲祝義樽肴并來之脇差到來不斜候、猶吉江喜四郎(資堅)可申越候、謹言、

五月十二日

謙信

小中彦兵衛尉

小中彦兵衛尉殿

二十五日、乙飛驒江馬輝盛、河田長親ニ、京都及ビ三河ノ狀況ヲ報ジ、併テ武田信玄逝去ノ風説アルヲ告グ、

〔上杉家古文書〕

謙信松倉城マデ納馬ス
富山ニ對シテ新砦ヲ築ク

頃者疎遠之條令啓候、仍先度爲返札、謙信、信長江被仰合子細ニ付、松倉迄御納馬之由、其後無御左右候、新地兩城共堅固之御仕置申由、示給候條、快然候、中務方(河上富信)へ懇々承候趣、令存知候、愚拙之儀、聊非疎略候、可御心易候、西表模様可示給候、尙中務可申候、恐々謹言、

江馬

輝盛(花押)

〔天正元〕
卯月廿五日

河田豐前守殿(長親)

御宿所

態令啓上候、仍此間者不申展候、御床敷奉存知候、隨而先度者、御屋形(謙信)樣松倉迄被納御馬候旨示預候、信長與被仰合子細御座候旨御尤候、新地兩城共御堅固ニ相調候條、乍恐御心安存置候、聽而拙者雖可罷下候、諸事用所等付遲々候、敵方備指儀之有間敷存知候、併無御弓斷(油)可被仰付事專一候、一上方之儀、信長御上洛ニ付、公方(義昭)樣被去御座候而、被成御懇望、二才之御曹子樣人質ニ信長へ有御渡御無事之由、然共御館石垣以下被直候、京中一變ニ候而、若君樣有御供奉、江州棹山迄御納馬候處、都仁被殘置候、信長臣下衆、公方樣へ有被申事、再亂由而、又自棹山御上洛と承候、如何與相果可申候哉、海

義昭和ヲ
信長ニ請
ヒ尋テ又
之ニ抗ス

天正元年四月二十五日

信玄死去
ノ風説ア

道説之分申入候、一、信玄之儀、甲州へ御納馬候、然間御煩由候、又被成死去候共申成候、如何不審存知候、一、濃州尾州之儀、甲州入與有陣觸、由申候、此段候者、信玄御越度も實説うと存知候、右此條々御屋形様へ雖可申上候、巷説不實存知候付、無其儀候、事實ニ承候者可申入候、定而其方へも種々雖可被聞召候、海道説之分申入候、替子細候者、追而可申上候、恐惶謹言、

河上富信

卯月廿五日

河上中務丞
富信(花押)

河田殿

參人々御中

〔参考〕

〔天正玄公佛事香語〕

○甲斐所藏
惠林寺

天正癸酉孟夏十有二日

先考惠林寺殿於軍中

俄然薨矣

以有遺命、雖懷悲傷之心、外不

露闌維之禮者、已是三四回、却後天正丙子今月十有六日、憑仗吾門諸大老、赴涅槃大城

底祭儀、盡善矣、盡美矣、○下略、信玄兵ヲ率キテ、三河ニ德川氏ヲ攻メ、病

〔甲陽軍鑑〕

○十

四月十一日

未の刻より、信玄公御氣相あしく御座候て、御脈殊外

はやく候、又十二日の夜亥刻に、口中よりはくさ出來、御は五ッ六ッぬけ、それより次第

四月十二日
信玄陣
中ニ卒シ
喪ヲ秘ス
ル四年

信玄勝頼
ニ遺命シ
テ謙信ニ
倚ラシム

よよりはり給ふ、既に死脈うち申候につき、信玄公御分別あり、○中人々悉被召寄、信玄公被仰は、○中勝頼弓箭の取やう、輝虎と無事を仕り候へ、謙信はたけき武士なれば、四郎わかき者よ、おめみする事有間敷候、其上申合てより、たのむとさへいへば、首尾ちがふ間敷候、信玄おとなげなく、輝虎を頼とさへ云事申さず候故、終は無事になる事なし、必勝頼、謙信を執して、頼むと申べく候、さやうよ申くるしからざる謙信なり、二十九日、己、謙信ノ、織田信長及ビ德川家康ニ遣セル使者、越中松倉城ニ歸著ス、是日、河田長親、使者ニ托シテ、越中ノ狀況并ニ武田信玄逝去ノ説アルヲ謙信ニ報ズ、

〔吉江文書〕

○羽前

謹而言上、仍、濃州、遠州へ被召使脚力罷歸候間、則差上候、於様體者直書被申上候、隨而信玄遠行必定之由、不隱便申廻由候、如何様煩之儀者無疑奉存候、鹽屋筑前守近日可罷下候間、委相尋、慥成義承可致言上候、將又當表之儀、先日本郷へ相動候、以後無別條候、就中諸城何も無事候、濱邊用心不奉存、油斷候、魚津普請堅申付候、相替儀御座候者、夜中成共可奉注進候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

河田豊前守

天正元年四月二十九日

鹽屋秋貞
來ルヲ待
テ實否ヲ
確メン
長親越中
本郷ニ兵
ヲ出ス
魚津城修
築

天正元年五月八日 十四日

(天正元) 四月晦日

吉江喜四郎殿

長親(花押)

吉江資堅

五月庚辰朔盡

八日、丁亥細川藤孝、謙信ニ、織田信長ト協力センコトヲ勸ム、

〔上杉文書〕○七羽前

岩州越後
ニ下ル
藤孝義昭
ト信長ト
ノ和睦ヲ
斡旋ス

知恩寺長老御下向條、令啓達候、其已來不得尊意候、遠境付不任心中候、抑京都不慮次第、不及是非候、某、御入洛以來、信長江致御使筋目候間、其首尾相届、今度上洛候刻、致馳走御無事姿候、貴國事被對信長、別而被仰談儀候、猶以於御入魂者、都鄙可爲基、靜謐候、此等之趣、可得御意候、恐々謹言、

五月八日

(細川) 藤孝(花押)

彈正少弼入道殿

十四日、巳癸謙信、河隅忠清、庄田隼人ニ命ジテ、越中堺海岸ノ守備ヲ嚴ニシ、直江

景綱ヲシテ、鮎川盛長ト共ニ、越後春日山城ノ修築ニ當ラシム、

〔横澤文書〕○上杉輝虎

大和方より申上し候ふんハ、加せう去ゆハ、たいさんてとりこしおれあつて、

椎名氏ノ
浪人海賊
ヲナス

市振宮崎
邊ヲ警戒
スベシ

地下人ニ
武備ヲ命
ズ

春日山城
實城ニノ
郭三ノ郭
ニ辨ヲ造
ラシム
境宮崎ニ
於テ竹木
ノ伐採ヲ
禁ズ

(海賊) いぞくハ、(椎名) 浪人(致) いたすよし申候、(左) さやうも候ハ、(海) かいぞく(者) のもの共、(不) し
(衆) ゆのよし申候、(越中) さやうも候ハ、(向) さやうこうハ、(舟) 彌見候ハ、(境) さうい(西頸城郡市振) ちふり、
(玉ノ木) (宮崎) (邊) へんのもの共ニ、(鑓) やりよふい候へく候、(小旗) こたを(相) もさうたうニ申つ
(其) 近(邊) (村) のむら一つ(あか集) つまり、(舟) ふねつけ候ところへ、(降) りり候ハ、(掛) と
(連) てもすまじく候、(敵) てき一人も見忍候へハ、(散) ちり(遁) け候間、(能) 事と心へむら
(々) (働) へたらさ、(燒) やさま(廻) り候、(堅) たくさやうこうハ、(地下) ちけ人も身だめ(爲) 候間、(鑓) やりこ
(旗) (用意) したよふい申へさよし、(付) 申つけへく候、(庄) しやう田てつそう、(砲) いくん共よふい申つけへ
(吾) 候、(分) ごふん身だめ、又ハ身のうちたへの(奉) 候間、(公) いくん共てつそう十五ちや
(用) 意) うよふい申へく候、(も) とより、(者) そのほりを(越) こすへく候、(向) さやうこう(必) ならず
(市) (振) (玉ノ木) (境) (宮) (崎) (者) のもの一つになり、(走) はしりめぐらせへく候、
(直江景綱) (鮎川盛長) (越) 又やまと孫二郎こし候間、(普) せん心やすく候て、(堅) けんご(實城) (春日山城) ちやうハ申よはす、
二のくる(三) のくる(三) まで、(辨) へい(申) つけへく候、又ちん(陣) しゆ(衆) さうひ(宮) み(崎) やさきの
竹木(伐) きらせましく候、(伐) さり候へハ、(村) むらよふういな(害) なく、(手) あさ(淺) 見あすものニ候、
孫二郎(大和) やまとともよこのたん申、(せ) いたうさせへく候、又ふたう(無) 道) なさやうよ申付さ
せへく候、謹言、

天正元年五月十四日

天正元年六月二十六日

追而、河田對馬守(吉久)方(方)へ文をこし候、ちきよと、けへく候以上、

五月十四日(天正元)

謙信

河隅三郎(忠清)左衛門殿

庄田隼人殿

六月大酉朔

二十六日甲戌、謙信、上野白井城主長尾憲景ニ、武田信玄ノ逝去ヲ報ジ、併テ、織田信長ト、今秋ノ計畫ヲ議セントスルヲ告グ、

〔赤見文書〕〇丹波

謙信亦見
某等ヲ召
ス

家康駿河
ニ入ル

越中追日
存分ノ儘

態以飛脚申遣候、少大事之用所候間、談合申度候、亦見歟、牧歟、兩人ニ一人被越可申越

候、可然事ニ候間、無心元儀ニ者無之候、扱亦、信玄果候儀必然候、其故者、徳川家康、五月

上旬ニも駿州久野根小屋始、駿府在々打散被引返候き、重而亂入之由ニ候、信長も其

支宅(度)之由候、明日之内ニ使者當方江下由候間、定而當秋之調儀之可爲談合候、其方本

意も漸近付候、可心安候、越中口追日存分之儘ニ候、是亦可心安候、万吉使之時分可申

候、謹言、

六月廿六日(天正元)

謙信(花押)

長尾(憲景)左衛門殿

七月大酉朔

二十三日辛丑、北條氏政、蘆名盛氏ト約シテ、兵ヲ下野ニ出サントセシガ、謙信、織田徳川兩氏ト與ニ、氏政及ビ武田氏ヲ攻滅セントスルヲ以テ、氏政出ヅル能ハズ、是日、コレヲ盛氏ニ辯疏シ、且ツ、佐竹義重ト絶タシム、

〔歷代古案〕〇羽前

急度令啓候、抑、疾可令出張處、難去子細有之而遅々、全非油斷候、然者來廿六七之間、必

令出馬候、兼日如申合、不移時日(下野)宇都宮へ雖可取詰候、越國輝虎、尾州之信長相談、當秋

向甲相可動干戈、由申來間、依之甲、信兩國之人數悉益前駿州へ發向、駿遠之境ニ被築

地利候、加様之處無心元間、内々敵之是非承届候上、雖可令出張、餘手延候條、先利根川

端へ打出、各味方中相談一動成之、來月中旬迄も西北至于無事者申合行、無二可存詰

候、如此委細申届意趣者、此方出馬與有之而、被及卒爾之御行、此方之首尾不合者、後日

氏政相違之様ニ候而者、口惜候條、有之儘存分申届候、猶自陣中可申達候、被遂御鹽味、

何分ニも御指引肝要候、同者早速佐竹へ御手切外聞實儀所希候、委細源三可申候、恐

々謹言、

天正元年七月二十三日

氏政將ニ
下野ニ出
デントス

天正元年七月二十九日

七月廿三日

蘆名殿

○氏政、蘆名盛氏ト與ニ、佐竹・結城兩氏ヲ攻メントスルコト、四月十九日ノ條ニ見ユ、

氏政

一八四

二十九日、織田信長、足利義昭ヲ山城・槇嶋ニ攻ム、謙信、京都ノ情狀ヲ探リ、是日、河田長親等ヲシテ、越中・加賀ノ一向宗徒ヲ撃タシム、

義昭再ビ
信長ト戰フ

〔安土日記〕

天正元年七月三日、公方様亦御敵之色ヲ被立、御館ニハ藤宰相・日野大納言・伊勢守・三淵大和守被置、真木島、天下一ノ節所構ト思召、被成御楯籠、○下

〔信長公記〕

天正元年七月五日、公方様又御敵之御色を立られ、○中、真木嶋に至て御座を被移候之由、注進在之、○下

〔吉江文書〕

○羽

信長上洛
シ義昭大
和ニ走ル

先日令啓候、參著候哉、爰元之義一段無事候、一昨日敵可相動之由申廻候間、令用意候處、一人も不罷出候、於其元承候より、敵如何ニもち候様見へ申候、是も百方御吉事共御到來故、興存候、近日者御機嫌一段可然候、由承歸宅申候、一自飛州重而被申越候分者、信長上洛、二條ニ在陣之由候、公方様和州へ被移御座、由候、家康・駿州亂入之由

信玄ノ死
確實トナ
ル

候、信玄死去必定之由候、鹽屋差越候書中進之候、有御披露可然候者、御取成頼入候、一、以前申入候キ、信長・義景和談之義、又ハ信玄死去、賀陣ニおゐて下々比判、此兩條致恐怖候、由重而申來候、一、八朔之御祝義申上候、宜様御取成頼入候、恐々謹言、

七月廿三日

國清(花押)

吉江資堅

吉喜

〔歷代古案〕

○羽前

信長江越候脚力、爰元江差越候、能々口上聞届候へハ、信長存分之儘之由候、自何可然事共候、扱亦、杉浦下候由、差儀有間敷候、惣別大坂・賀州之者共者、越前ハ不及申上意を力ニ申候間、公方様如此御成候へハ、手近ニ大坂折角ニ可成候、左候へ者、賀州者當方カ打向、大坂彌あいにさるへく候條、手引も候者、吾分何共大坂へ計策可申候、從爰元如何共可申様無之候、猶信長へ一兩日之内ニ委可申越候、万吉重而謹言、

七月廿九日

謙信

山田修理

山田修理進殿へ

〔本願寺文書〕

○山城

天正元年七月二十九日

一八五

天正元年七月二十九日

一八六

義昭幼兒ヲ出シテ降ル

信長謙信ノ加賀攻入ヲ勸ム

一七月二日、公儀京都御退座(山城)、槇島要害へ御移候、則取懸、宇治川乘渡、外構追破、數多討捕、本城可攻崩之處、種々有御懇望、若君様涉被置、御退城之事○中略、一越中表貴國人數就、被出、賀州一揆蜂起候、由風聞候、於其儀ハ、早速謙信有御發足、此刻可討果候、○中下略、全文ハ、八月二十日ノ條ニ收ム、

信長朱判

八月廿日

謙信

進覽之

〔信長記〕六 室町殿重御謀反之事

略○上案ノ如ク、室町殿同年七月朔日、又逆心ノ色ヲ立玉ヒテ、二條ノ御所ニハ、日野大納言藤宰相伊勢々々守三淵太(大)和守彼等四人ヲ大將トノ入置レ、御身ハ宇治ノ眞木嶋ヘソ楯籠給ヒケル、此事岐阜ニ聞ヘケレハ、同三日、廻文有テ、五日早天ニ、信長卿岐阜ヲ打立玉ヒ、佐和山迄馳付ラレ、兼テ用意セラレタル十餘艘ノ大船ニ、亥ノ刻計ニ軍勢悉取乗セテ、順風ニ夜モスカラ渡ラセ給フ程ニ、明ル六日ノ辰刻ニ坂本ヘ打上リ、午ノ刻計ニハ、洛中洛外焼立、狼烟天ヲ曇シ、鯉波地ヲ動シケレハ、上モ下モ驚アヘル計也、○中略、信長室町ヲ陷レ、檣都合其勢五萬餘騎、同日巳ノ刻計ニ、二口ヨリ中島サシテソ押寄ル、眞木嶋ノ御勢モ、爰ヲ專途ト防戦ヒケレトモ、一向屑斥セス、追立々々

義昭眞木島ニ據ル

信長入京義昭ヲ攻ム

義昭和ヲ求ム

信長義昭ヲ若江ニ放ツ

込入、柴田、佐久間、蜂屋三人カ手ヘモ首五十餘討捕、即外構二三個所モミ破テ、火ヲ放、焼立シカハ、室町殿今ハ叶ハシトヤ被思召ケン、御命ヲ繼マヒラセヨトソ被仰ケル、信長卿サスカニ害シ奉ル事モ猶不快ニヤオホサレケン、(佐久間、羽柴)信盛秀吉兎モ角モ相計テ、何方ヘモ送り進セヨト宣ヘハ、兩人承テ河内國若江マテ送届奉リケリ、其落人ノ御有様タトヘテ云ン方モナシ、

八月小己酉朔

十日、戊午謙信、越中ニ入りテ、一向宗徒ヲ掃蕩シ、進ミテ加賀朝日城ヲ攻ム、宗徒和ヲ請フ、是日、謙信、戦況ヲ吉江景資ニ報ズ、

〔歷代古案〕一羽前

就越中江出馬、態使大慶候、越中悉一變、(加賀)賀國迄放火、内々暫賀ニ可立馬處、賀州之者共、悃望之旨候間、爲越山○中略、與云、旁々明日至于春日山納馬候、以上、追而、越中敵地落居之注文差越候、以上、

八月廿二日

謙信

木戸忠朝

木戸伊豆守殿(忠朝)○以下宛名略、全文ハ、八月二十一日ノ條ニ收ム、

〔中條清資氏所藏文書〕○羽前

天正元年八月十日

一八七

吉江景泰
彈丸中ニ
馳驅ス謙
信其命
ヲ危フミ
陽ニ怒リ
テ之ヲ禁
鋼シ書ヲ
親景資夫
妻ニ與フ

柿崎源三
等銃瘡ヲ
受ク

天正元年八月十日

一八八

(別) 龜つして書をもつて申候、あさひとりはせめ候へハ、いつきもとも候ふクニ、さ
の與次(吉江景泰)い流(吉江喜四郎)き四郎身の事もいぞん申候へとも、もちいせ、ひとりてつらうのさ
さへうぞりあるれ候、身の事ハふとつしやニ候間、こまをたのミ、ひきすりウへし、
いまにおしこめ候、ささめてあんせへく候へとも、身のミあいふから、てつらうのさ
さへこし、て抜おせ候とも、うちこ流させ候とも、ささめてそのときハ、この入道を
ふらてハう(恨)らましく候、一さんおいこ免候事ハ、くるしうらす候とたもひ、その多
めさめ申候、よくくとおもふへく候、ウ(柿崎)きざきけん三も、をうらおもてへうち終
うれ、や、よよそりウへし候、ちうけん(中)まと四郎も、てつらうこ流され候、い
まもつくし候間、このなうハあらせ候、こ比とくニ候間、ておい候とも、いまさめ候
よりハ、ふ(夫)う(婦)ふののともうらむへく候間、このさん申候、せいし(制止)を申候へとも、ふ
く、身のいけんよきたうを候間、きやう(向)こうハ(後)おりにそむおくよまらうハある
ましく候、ウへり候ハ、ふうぬあからふひんニ候ハ、まつく、あふましく候、あや
まち候ハ、不(這)へまハり候とも、よう(用)こつましく候、このことハり申へきため、ふう
ふうとへ一まゆニ申候、めてとくうさをて以上、

(天正元)
八月十日

謙信

(吉江織部景資)
よし江おりへ殿
を次(老)らう(母)へ

〔上杉年譜〕十七

十七

天正元年八月、越中ニ御出張在テ、椎名肥前守泰種(康胤下同)カ居城新川郡

椎名康胤
ヲ金山城
ニ攻ム

松倉庄金山城夜ヲ日ニ繼テ取詰玉フ、寄手ノ大將ニハ、河田豊前守長親、先陣ハ長尾
和泉守秀忠、同左衛門景忠、竹俣三河守慶綱、五十公野右衛門大夫重家、吉江織部佐宗
信、北條下總守高常、小林左京亮等ヲ引卒ス、城中ニモ椎名カ一族家臣、其外諸浪人、數
多楯籠リ、心ヲ金石ヨリモ堅ク、命ハ鴻毛ヨリモ輕シ、城門ヲ開キ、突出々々防戦ス、敵
味方ノ鬨聲、鏡炮鐘鼓ノ音、山河モ響キ、天地モ只顛崩スルカ如シ、寄手ノ軍勢勇ミ進
テ攻寄ル、斯リケレハ、泰種モ群勢ニ攻付ラレ、爭カ持コラフヘキ、勇力屈シ、同國不動
山ノ衆徒ヲ頼ミ、軍門ニ降ン事ヲ請フ、泰種素ヨリ國郡ノ蠹害、本所ノ痼疾ナレハ、根
ヲ斷、葉ヲ枯シ、屠殺アルヘキト思シ、召詰ラレシカ共、管領天然仁義相兼タル大將故、
年來ノ好ミ捨難ク、流石ニ誅戮ヲモ忍ヒカタク、近年ノ不義悉ク赦免アリ、依之金山
城明渡スニ付テ、泰種ハ同國今泉城ニ遣ハサル、此節越中一偏ニ御手ニ屬シ、金山城
經營有テ、河田豊前守長親ニ賜ル、長親近年魚津城ニ居住シ、軍功比類ナケレハ、管領
モ褒賞有テ、御感狀ニ十七萬石ノ地ヲ差添賜ル、長親如何ナル御夙縁ヲ結ヒケルニ

天正元年八月十日

一八九

康胤ノ降
ヲ許ス

河田長親
ヲシテ金
山城ヲ守
ラシム

長親ノ信任

天正元年八月十日

一九〇

長親附屬ノ將士

ヤ、昔時江州守山ノ者ニテ、側陋ノ身也ト雖モ、如此管領ニ吹舉セラレ、行年二十八歳ニテ、伎倆ノ大身トナリ、武名ヲ後代ニ輝ス事、タメシ少キ次第ナリ、是ヨリ先、越後古志ノ内、山東郡ヲ賜リ、長尾ノ姓ニ改メラレシトナリ、長親是ヲ辭シ、願ハ本姓ヲ以テ御取立ニ預ラハ、此上ノ御芳恩タルヘキ旨、頻リニ言上スレハ、管領モ此道理ニ感シ玉ヒ、其意ニ任セラレ、長尾ノ姓ヲ不賜、然レ共、長尾家ノ紋ニ相並、河田ノ紋トス、彌寵遇ノ餘リ、古志ノ諸士ヲ付給フ、所謂ル長尾紀伊守同和泉守同左馬助下條半七同五郎同久七同刑部同大學助、後號安樂齋同平十郎左近司傳兵衛同治部左衛門同男縫殿助同二男喜左衛門同男源助山田修理亮小越平左衛門同男宮内少同二男與十郎同三男百束左馬助同源三郎、後號與山崎小五郎下物熊千代庄田左馬助同九郎三郎、後號九兵衛百束新六郎岡村主膳同惣助北村茂助宇加地新八郎石坂藤五郎早川武右衛門佐藤十郎澤二郎左衛門鈴木玄蕃南右馬丞同葛之助同左門同五郎右衛門南宗助同男七兵衛同彦左衛門福島彦兵衛澤島之丞佐田惣右衛門曾根甚五左衛門同小三郎市川彦二郎小幡長閑齋同與吉小西惣右衛門新貝久助池田十左衛門古海二郎兵衛小野寺治部庄田左助庄田惣右衛門山下茂左衛門瀨波九左衛門河上新右衛門岡本主水村尾專助田代九郎兵衛木滑半四郎木村善右衛門沼波清兵衛山田傳内長谷川右

物主

河田家來

將 上口ノ鎮
長尾景行ノ椎名氏
相續ヲ止メ富山城ニ置ク

神保椎名兩氏ノ向背
謙信越中ニ入レバ信玄信濃若クハ上野ヲ侵ス

馬助武藤清右衛門佐藤五郎兵衛戸嶋小左衛門土田庄左衛門中野半助古志郡横山物主志賀十左衛門同處浦瀨物主近藤織部介折下土佐守舟橋名兵衛志賀新三郎河田九郎左衛門市川彌兵衛越中先方水長谷安房守同山城守岡村式部少河田家來須江伯耆守石坂入道道久以下ナリ、此外越中所々降參ノ輩ヲモ、少々寄騎ニ付ラル、手勢寄騎ノ軍兵ヲ以、領知ヲ相守リ、上口ノ鎮將トナサシム、御一族飯野長尾小四郎景行ハ、椎名肥前守逆心ニ付、椎名家督ノ契約ヲ相違ス、然レ共越中諸士ノ存ル所モ是アレハ、景行ヲハ厚祿ヲ賜リ、富山城ニ差置ル、景行家臣太田式部少信能横口宮内少親宗ヲ始、舊功恩顧ノ輩ニ、又越中降參ノ軍士數多付置レ、是又上口御出勢ノ便リトナシ玉フ、去レハ兼テヨリ管領越中ノ諸城ニ、雄威知謀ノ軍士ヲ籠置ル、ニ依テ、越中大國ト雖モ、御手間入ヘキ事ナラネト、神保ハ信長ト一味シ、椎名ハ信玄ト心ヲ合スル故、管領越中ニ御進發アレハ、必ス信州飯山邊カ、若クハ上野筋ヘ働キ出、是ニ依テ越中ノ御出張度々ニテ思召ノ儘ナラス、角年月ヲ送り玉フ、去レ共、武運歸スル處ナレハ、此度ノ一戰ニ御靜謐ナリ、

二十日、辰織田信長、謙信ニ、畿内ノ形勢ヲ報ジ、且ツ、越中ヲ平定センコトヲ勸ム、

天正元年八月二十日

一九一

〔本願寺文書〕五 ○山城

覺

信長義昭
ヲ破ル

淺井長政
ヲ攻ム朝
倉義景之
ヲ援ク

義景ヲ破
ル

義景一乘
谷ヲ没落
ス

義景ヲ追
撃ス

一七月二日、公儀京都有御退座(山城)、槇島要害へ御移候、則取懸、宇治川乘渡、外搆追破、數多討捕本城可攻崩之處種々有御懇望、若君様涉被置御退城之事、

一先書委曲如申候、去十日、江北小谷取詰候處、朝倉義景罷出、木本多部山陣取候條、小谷與敵陣之間取切候、義景及難儀候キ之事、

一木本多部山者、此方陣取之間節所候條、先大嶽へ攻上、則内攻崩、悉討果候事、

一不移數日、越前陣所へ夜籠切懸追崩、朝倉掃部同孫六同治部丞同土佐守同權守山崎長門守訖美越後守、印牧新右衛門尉河合安藝守青木隼人佐鳥居與七、小泉藤右衛門尉初、其外歷々者共三千餘討捕、木目追越、府中ニ陣居候處ニ、義景明(越前)一乘、大野郡引退候條、彼谷初國中放火候事、

一今日先勢差越、義景楯籠所之及行候、大略可討果模様ニ候、若於相踏馬寄可令追發候、時宜可御心易事、

一討殘諸侍朝倉兵庫助魚住備後守朝倉駿河守同孫六郎同大炊亮同近江守其外悉罷出一禮候、朝倉式部大輔同孫三郎、義景前引退、山中有之色々、雖惴望候、至于今不

召出候事、

加賀能美
江沼二郡
ノ一揆信
長ニ降ル

謙信
進覽之

八月廿日

信長朱判

二十一日、北條氏政、上野ヲ侵ス、關東諸將、援ヲ謙信ニ請フ、是日、謙信、加賀ヨリ歸國シ、尋デ、關東ニ出陣セントス、

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕前 ○羽

長尾憲景
北條氏ノ
來侵ヲ沼
田及比越
後ニ報ズ

謙信

八月朔日

長尾左衛門尉

憲景(花押) ○上野白井城主

吉江喜四郎殿

天正元年八月二十一日

謙信菅原
左衛門佐
等ヲシテ
出陣ヲ待
タシム
佐藤筑前
守越中ニ
來リテ關
東出陣ヲ
請フ

〔歷代古案〕○羽前

就越山之儀、重而被申越透トラリ誠々無餘義、共可申様無之候、抑其方兩人忠信第一可畏義、勿論候歟、但後人爲忠信ニモ亦信申之取亂與云、殊東方一變之上者、可然時節爭而可、弓斷候哉、爰元人數集置候處、佐藤筑前守并菅左被越候使見聞ニ候間、可心安候、越山之内家中付力堅固ニ備被申候付可被相待候、猶筑前守可申候、目出重而恐々謹言、

八月八日

菅原左衛門佐殿

〔色部文書〕○越後

櫻井市作氏所藏

去廿一日之御注進狀、昨廿二於中途披見、抑去廿日、從厩橋入衆拂而乘籠奇被及防戰、號入江者爲始十餘人被討捕、被得勝利之由、御出陣之御物先與云、寄特之仕合、雖每度之事候、感悅不淺存候、委曲於先陣被申述候間、省略候、恐々謹言、

八月廿三日

那波駿河守殿

同答

〔歷代古案〕○羽前

就越中江出馬態使大慶候、越中悉一變、賀國迄放火、内々暫賀ニ可立馬處、賀州之者共

北條氏照
戰況ヲ那
波駿河守
ニ報ズ

木戸忠朝
等使ヲ遣
シ狀ヲ問
フ謙信之
ニ答書ス

惘望之旨候間、爲越山與云、旁々昨日至、于春日山納馬候、此人數爲不散、越山成之、旁々進退をも可工夫候、譜代之者共を被集置尤ニ候、万吉重而可申候、恐々謹言、
追而、越中敵地落居之注文、差越候、以上、

八月廿二日

木戸伊豆守殿武藏羽生城將

同 右衛門大夫殿佐脫カ

菅原右衛門殿廣田出雲守子木戸伊豆守智

〔上杉年譜〕十七

○謙信越中加賀ニ出陣ノコト、十日ノ條ニ見ユ、
略

〔栗林文書〕○羽前

今日未刻北條彌五郎申越候分者、南甲之凶徒出張之由、於事實者、人數可遣候、其元之者共足誘可申付候、又厩作ちとも申身之出馬様ニ取成尤候、度々境目之儀ニ候間、苦勞雖痛敷候、取懸弓箭ニ候間、無了簡候、地下人迄も足誘と態觸させへく候、扱亦關東之飛脚勞候者、可送越由可申付候、穴賢々々、

八月廿八日刻戌

謙信

天正元年八月二十一日

高廣厩橋
ノ危急ヲ
報ズ

天正元年八月二十一日

一九六

栗林二郎左衛門尉とのへ

〔鑲阿寺文書〕

九野 金剛乘院

謙信出陣
ノコト關
東ニ傳ハ
ル

來札具令披見候、然者越國衆出張之段、被御申上候、其旨趣能々奉披露候、御悦喜之由上意ニ候、猶以珍敷儀も候者、急度御注進可然令存候、殊更院中御苦勞之段、令察迄候、何江も御心得頼入候、恐々謹言、

定綱

九月十六日

定綱(花押)

年行司

金剛乘院

御報

兵庫太夫
定綱

(表書)年行事

金剛乘院

御報

兵庫太夫

〔浦野文書〕

野 〇上

浦野中務
少輔ノ子
ヲ質トス

越國衆出張之由、此度抽忠信肝要□□爲證人、實子倉賀野江可被越候、恐□□□

九月十九日

氏政判

浦野中務少輔殿

〇謙信、越中ヨリ歸國スルコト、及ビソノ兵ヲ關東ニ出スコト、右文書ニ見ユト

雖モ、ソノ行動詳ナラズ、

〔附録〕

〔栗林文書〕

前 〇羽

謙信關東
ニ出馬セ
ントシ河
田吉久等
ヲ先發セ
シム

五日之以注進、自倉内申來以來、重而注進無之候、無心元候、雖然爰元へ出馬候間、明日者鹽澤へ可打著候、早々旁々急候而、倉内江打著可然候、關左爲懸助候ニ差置候處、一騎一丁人數不足ニ候者、其曲有間布候、若黒川江打入凶徒退散候者、淺貝ニ成共、猿京成共ニ相待、一度ニ可供候、又于今差□候者、倉内へ可打著候、例式ニ心得候者、不可有曲候、相替義候ハ、注進待入候、謹言、

九月十一日

謙信(花押)

河田吉久

河田對馬守殿

新保清右

新保清右衛門尉殿

衛門尉

栗林二郎左衛門尉殿

栗林政頼

本庄清七郎殿

松本

代姑 〇年次詳ナラズ、
姑ク茲ニ附收ス、

九月

大寅盡
戌寅朔

天正元年九月十三日

一九七

十三日、庚寅謙信復、越中ニ入り、是日、栗林政頼ヲシテ、急行參陣セシム、

〔栗林文書〕〇羽前

返々、自夜中早々打立、迎之人數ニ合次第、濱通を當陣江可急候、以上、

越中東岩瀬ヨリ濱通夜中ニ來援セシム

打續遠道上下辛勞ニ候、明日從夜中、濱通を、東岩瀬を當陣江、河端を押候而可越候、併

自向敵鐵放重打候間、其分心得可申候、其人數成ニ手、可押候、迎ニ人數越候間合候者、

其人數押添自敵大軍、與見申候様ニ可押來候、道ニ而迎ニ越候人數ニ合候様ニ、自夜

中迎之者ニ合次第可押候、万吉候、以上、

九月十三日

謙信(花押)

〔附錄〕

栗林次郎左衛門尉とのへ〇謙信、再ビ、越中ニ入ルコト詳ナラズ

〔栗林文書〕〇羽前

尚々、あら、不申、衆徒中間分候様ニ、又ぬくらす(肝)簡要候、明日專柳齋ニ精可申候、

以上、

人數重而申越候、無心元義候歟、様ケ間敷義候哉、案斗候、左様候ハ、大宮坊火宮坊其(能登石動山)

外老敷衆徒中陣下へ召寄、普請出來之内差置尤候、爰元へ越候衆徒へも申分候間、如

大宮坊火宮坊

何ニも聞分歸候つる、人數重而可越由候間、(村山善左衛門慶綱)村善ニ黒川衆差越候、今夜用心(肝)管心候、無何事ゆり靜候ハ、案候間、明日早々可申越候、以上、

三月廿七日

謙信(花押)

河田窓隣軒

栗林二郎左衛門尉殿

河田對馬守殿〇以下五通、年次詳ナ、姑ク茲ニ附收ス、

〔歷代古案〕〇羽前

敵不時ニ新地取詰之由、申越候間、即喜平(顯景)次者共差遣候處、敵退散候由、いつも、辛

勞させ痛敷候、此段以下之者迄も、可爲申聞候、加地衆ニ大石山下差添、新地江越候、大

儀候共送届可歸候、穴賢、

七月朔日

謙信(花押)

國分喜兵衛尉とのへ

栗林次郎左衛門尉とのへ

〔歷代古案〕〇羽前

急度申遣候、市川寄居成之候間、自然從敵地横合候、而者外見不可然候條、其地ニ少滯

天正元年九月十三日

長尾喜平次赴援セテルモ敵退散ス

國分喜兵衛尉

天正元年九月十三日

市川新地
ノ普請
本田右近

留候而、可_レ見届由、龍澤ニ申越候つる、然處市川新地之普請出來之由、本田右近ウヨ
リ申越候間、早々歸上田可_レ休、人馬候、永々陣勞重而普請申付、傍輩共苦勞大義之由、何
へも可_レ申候、以上、

六月十六日

謙信(花押)

栗林次郎左衛門とのへ

彌知ノ敵
退散ス
上田衆
尾衆ト交
替シテ守
備セシム

自_(西頸城郡)彌知_(如)注進者、敵退散、先以可_レ然由申越候間、餘之衆を可_レ越候間、上田衆者爰元へ可_レ
越候、_(柄尾)柄生衆者後藤付添、先可有_レ其元候、一左右次第可_レ越候、爲其申遣候、上田之者、爰元
江越候者、其替者柄生衆彌知江可_レ越候、早々上田衆ヲ爰元へ可_レ越候、此口如何ニも
可_レ然候、昨日も水橋をこしめ、十余人從敵陣引除候、可_レ心安候、万吉重而謹言、
追而、其元を上田衆越候者、小旗を去不_レり、夜中越候而、自_(越中)石田小旗を可_レ開候、京田ニ待_(越中經田)

一左右を可_レ申候、從爰元鍵小旗を越成多、敵ニ見セ可_レ召寄候、是者栗林ニ申候、以上、

九月十日

謙信(花押)

後藤勝元
後藤 左京亮殿

栗林次郎左衛門尉殿

本庄秀綱

本庄 清七郎殿

〔歷代古案〕_(四羽前)

伊賀澤多之駒依相尋吉江織部佑及内義候處、見事成駒三疋爲牽候、於自_(越中)巖候、猶織部
佑可_レ申候、謹言、

外月十一日

謙信(花押)

栗林二郎左衛門尉殿

十月 大申 盡

十一日、_(戊申)謙信、越中神保彌次郎ヲシテ、父民部大夫ノ家督ヲ嗣ガシム、是日、小
島職鎮、狩野道州等コレヲ答謝ス、

〔上杉家古文書〕

(上包)天正元年十月十一日

神保民部大夫跡職之儀、彌次郎被仰付忝存候、自今以後上様御前一筋奉守走廻候様
々意見可_レ仕候、彌御取成可_レ爲恐悅候、恐々謹言、

小島六郎左衛門尉

(天正元) 拾月十一日

職鎮(花押)

天正元年十月十一日

天正元年十月十九日

狩野右京入道

(秀基)
道州(花押)

二〇二

河田豐前守殿

(長親)
參御陣所

十九日、丙寅謙信、河田長親ニ、越中太田保下郷ヲ、尋テ、村田秀頼ニ同上郷ノ地ヲ料所トシテ管セシメ、流離ノ百姓ヲ召返サシム、

〔上杉文書〕一〇羽前

今度、改而太田之下郷吾分ニ爲料所申付候、縦如何様ニ前々無沙汰申候百姓等有之共、此度者令宥赦召返、如前々用所等申付、可相立人家候也、仍如件、

天正元年

拾月拾九日

謙信

河田豐前守殿

今度改而太田之上郷、吾分ニ爲料所申付候、縦如何様ニ前々無沙汰申候百姓等有之共、此度者令宥赦召返、如前々用所等申付、可相立人家候也、仍如件、

天正六年

水田家

十月十九日

謙信

村田忠右衛門尉殿

十二月

丁未朔

三日、己酉謙信、越中ヨリ凱旋シ、是日、コレヲ德川家康ニ報ズ、

〔歴代古案〕六〇羽前

去頃、權現堂大橋刑部歸路申合候條、家康江以使申届候、可然様々取成頼入候、彼者若輩ニ候間、被爲引廻、可爲祝著候、敵之仕合万々無心元迄ニ候、(越中)此口隙明無二段信、關手合可申心中無他事候、可心安候、猶彼者可申候、恐々謹言、

謙信

松平親乘

極月三日

(親乘)
松平左近殿

〔下條正雄氏所藏文書〕京〇東

略〇上越山之儀、越中歸馬以來、令覺悟候處、越中ニも數日立馬候條、以此足至干越山者、勞兵ニ而無見立、〇下略、全文ハ十二月二十五日ノ條ニ收ム、

極月廿五日

刻酉

玉井豐前守殿

玉井豐前守

天正元年十二月三日

一〇三

天正元年十二月八日 十二月十六日

二〇四

○謙信、關東ヨリ歸陣シ、更ニ越中ニ出軍スルノ日詳ナラズ、但シ、十月十一日、十日越中仕置ニ關スル文書、及ビ本書竝ニ二十五日ノ書狀ニヨリテ越中出陣ノコトヲ知ルベシ、

八日、^{甲寅}謙信、村上國清ニ、舊領越後山浦、信濃飯山ノ地ヲ知行セシム、

〔村上家文書〕

^{〔義清〕}亡父知行分於山浦四万貫、無相違令扶助候、并數年被相望候信、越之境、飯山領之儀、出置之畢、全可被所務狀如件、

天正元癸酉

十二月八日

謙信

^{〔國清〕}村上源吾殿

○本條ノコトハ、稍疑アリト雖モ、姑ク茲ニ掲グ、

十六日、^{戊壬}足利義昭、紀伊ニ遁レ、謙信ヲシテ、足利氏ノ再興ヲ圖ラシム、

〔吉川文書〕

^{〔足利義昭〕}公方様は、上下廿人之内外にて、小船に被召候て、紀州宮崎ノ浦と申所へ御忍候、信長も只々討果可申にても無之候間、彼所に可有御逗留候、先々此國江御下向なき事を

は、随分申究候、可御心安候、^{〔略上〕}

^{〔天正元〕}十二月十二日

^{〔安國寺〕}惠瓊(花押)

山縣越前守殿

井上又右衛門尉殿

安國寺惠瓊

〔吉江文書〕

^{〔羽前〕}

御入洛之事、重而被對輝虎被仰越條、彌被抽御忠節候様、可被加異見段肝要、通被成御内書候、尤御面目之至候、猶得其意、可申由被仰出候、恐々謹言、

^{〔天正元〕}十二月十六日

^{〔真木島〕}昭光(花押)

^{〔資堅〕}吉江喜四郎殿

○義昭、織田信長ト戰フコト、七月二十九日ノ條ニ見ユ、

二十五日、^{辛未}謙信、人馬ヲ休養シテ後、關東ニ出陣セントシ、是日、コレヲ玉井豐

前守ニ答報ス、

〔下條正雄氏所藏文書〕

^{〔京東〕}

重而爲使關口被越候、越山之儀、越中歸馬以來令覺悟候處、越中ニも數日立馬候條、以此足至于越山者、勞兵ニ而、無見立、又張陣も無之候得者、其地引立儀ニ者無之、結句引

天正元年十二月二十五日

二〇五

天正二年正月九日

二〇六

雪中ノ行
軍
矢錢

殺道理ニ候條先、年内者休諸軍、越年候者、則正月五ヶ日之内ニ、雪(を)おわらせ可越山迄候、氣付候様ニ可思候、其支證者、當國年寄共ニ何も爲誓詞、以下之者ニも神水(を)お爲飲、如何ニも堅申付候、是ニ不審有間敷候、乍去雪時ニ候間、路次よていつもの土之時分ヨリハ可有逗留、由令校量、其内爲矢錢(木戸重朝)、木伊父子(菅原左衛門佐)、菅左へ黄金貳百兩申付差置處、彼使關口可請取、由申候條、相渡候、可然様ニ心得候て可申、其方忠信之儀者、何様越山之時分可申候間、可心安候、恐々謹言、
追而、東方如何ニも相調、佐宮(佐竹宇都宮)何も飛脚(を)お被越候、此なりおぢおいへ可申候、以上、
(天正元)極月廿五日刻西
謙信(花押)

玉井豊前守殿

二見ユ、

天正二年甲戌

紀元二千二百三十四年

正月

丁丑朔

九日、(酉)謙信、武田勝頼ノ領地、西上野ヲ經略セントシ、十八日ニ出馬スベキヲ、德川家康ニ告ゲ、且ツ、織田信長ト共ニ應援センコトヲ求ム、

〔榊原家文書〕

越中歸陣已來者、家康不申通、本意之外候、内々舊冬至于信申、雖可及調儀候、味方中不相調、遂越山候へ者、家康劬勞も不休候歟、味方中爲可調、當春迄令延引候、然處、關東之諸士、何も屬當方候條、當十八令越山、於西上州可揚放火候、被遁此時節候者、於信申不可有一切候間、信長江有諷諫、急度被及手合、被付興亡候様ニ、家康へ諫言專一候、例式武田四郎(勝頼)計略名之下ニ候間、不可過推察候、猶巨細村源可演說候、恐々謹言、
(天正二)正月九日
謙信(花押)

榊原小平太殿

榊原康政

〔端書〕
村上源五郎

態啓達、抑舊冬者越陣預御飛脚候、則其砌信州雖可被亂入候、諸口爲可被相調、于今遅々、然處關左諸士被申有筋目、當月十八日被致出馬、向西上州可被軍行分定候、此度家康、信申御發向、御手合御備專一候、此旨能々御取成簡要候、恐々謹言、
(村上)國清(花押)
正月廿三日

榊原小平太殿

御宿所

天正二年正月九日

二〇七

天正二年正月二十六日 二月五日

二〇八

二十六日、寅謙信、關東出陣ノ令ヲ布ク、

〔後藤文書〕○羽前 後藤常助氏所藏

吉日ヲ選
ビ陣觸

扱亦、北條氏政南方之儀、晝夜案候、目付をも差越、珍儀於有之者、早速注進待入候、將又當春越山令儀定、去月廿六依吉日、令陣觸候之條、其間之儀、彌稼肝要候、目出彌可申候、謹言、○上略、全文ハ、二月五日ノ條ニ收ム、

二月五日

謙信(花押)

後藤勝元

後藤左京亮殿

同新六

同 新六殿

二月五日

大 朔

五日、辛亥謙信、上野沼田城ニ入り、將ニ兵ヲ西上野ニ進メ、德川家康ト策應シテ武田勝頼ト戰ハントス、

〔古文書寫〕

家康遠江
二股城ヲ
攻ム
十六日ニ
西上野ニ
火ヲ揚ゲ
ントス

態以早飛脚申届候、家康二侯被取詰付而、信州西上州之人數、至于其國、爲後詰相働之由候間、到上州沼田著馬候、當月十六日ニ、必西上州可揚放火候、此節之手合專一候、取通此隙候ハ、儘可爲後悔候、五日一昨日上州到于沼田打著、始諸家中、關東之諸士、何も打

謙信家康
ト相呼應
シテ甲斐
ニ當ルヲ
説ク

浮候、於此口者、不審有間敷候、遠境之間、重而者申届間敷候、此度家康手合到于無之者、向後催促在間敷候、定而甲衆敗北之躰ニ而當口之様可見得候、除可取擬事、千言萬句候、此段能々家康江諷諫專一ニ候、恐々謹言、

二月七日

謙信判

酒井忠次

酒井左衛門殿

〔歷代古案〕九 羽前

態飛脚預示候、祝著無他候、仍上州沼田表著馬之由候、本望候、就其此方出陣之儀、最前如申候、此時候條、即向于駿發向之事、可御心安候、殊以諸家中并關東諸士續軍尤珍重候、此節敵國悉被擊碎之處肝要候、此等之旨、宜奏達尤候、猶從是以使者可申述候、恐々謹言、

三月十三日

家康

村上源吾殿

〔枋窪村與右衛門所藏文書〕

二月七日、御札令拜見候、仍就沼田へ御著馬、遠路早速御飛脚、本望被存候、殊西上州可被及御行之由、御本意案之圖候、然上者爲御手合、來十九日、家康父子も被出馬、駿州悉

天正二年二月五日

二〇九

石川數正
國清ニ返
書シ家康
ノ駿河ニ

家康村上
國清ニ返
書シ兵ヲ
駿河ニ出
サンコト
ヲ告グ

向ハント
スルヲ告
計ヲ長ト
スルコト
ヲ報ズ

天正二年二月五日

可被放火候、此方之儀、且者累年互被仰首尾云、且者手前難遁云、更不被存弓斷、此節可被碎手候、剩信長計策御擬候條、可被任存分事勿論候、畢竟甲信滅亡之御調略、悉皆可、在御馳走候、猶自陣中、吉左右可被申達候、恐々謹言、

三月十五日

數正

村上源吾殿

〔武德編年集成〕

七日、上杉謙信書牒ヲ

神君へ呈シ、

當月十六日、武田カ領内西上野

ノ地ヲ放火スヘキ間、徳川家ニモ參遠ノ敵地ヲ襲ヒ玉フヘキ由ヲ諭シ、酒井左衛門

尉忠次ヘモ一簡ヲ贈リ、右ノ趣ヲ達ス、茲ニ因テ神君モ參遠ノ敵地ヲ侵略シ玉フ、

〔伊達家文書〕

御日日記

伊達輝

天正二年二月廿一日、天きよし、くもる、晚よりあめふる、(雨)中、信長よりの返狀參候、同

河田所より狀、輝虎關東發向と申候、(織田)下

〔當代記〕

天正二年申戌正月、武田四郎岩村表へ發向、カウ野、串原以下小城、(勝頼)美濃

ス、信長則大井、中津川迄有出馬ケレ、人数未相揃、殊爲節所之間、不被單合戰、參河之

人数移足助小原、此時越後謙信與信長一味之間、至于上州沼田出張之間、武田則引入

勝頼美濃
岩村ヲ侵
略ス

謙信上野
ニ入ルヤ
勝頼信濃
ヲ襲フ
謙信信長
ノ無禮ヲ
恨ム

信州、特ニ深雪之事也、此後詰ヲ信長へ爲忠節之由、謙信存念之所、自信長無禮事、謙信爲遺恨ノ由、以狀啓之、此度武田東美濃へ出シヨリ、不亡武田、可爲天下大事之由、信長彌思給フ、

〔參考〕

〔北越家書〕

天正二年甲戌、遠州二股城ハ、去ル元龜三年ノ冬ヨリ、武田家ノ持ト成

テ、當時信州ノ蘆田ノ領主依田右衛門大夫信蕃、番隊トシテ籠リ居レリ、然ルニ徳川

家康公是ヲ攻落シ玉ハン内評アルノ由、甲府へ聞へアリ、勝頼ハ、今春東美濃へ出張、

織田家抱ノ堡障共、片端ヨリ抜捕ヘシトテ、舊冬ヨリ備完決シケレハ、二股表ノ事ハ、

信州ノ先方及西上野ノ輩ニ任セ置條、後攻可仕ト豫メ令ヲ示スニ付テ、大神君越後

へ牒者ヲ送ラセラレ、(中)謙信公、東上野へ出馬ノ儀ヲ促シ頼マセラル、是ニ依テ公

俄ニ陣觸有テ、殘雪ヲ凌キ、二月五日上州へ越山、同七日大神君エ羽檄ヲ送ラル、其文

ハ、一昨五日、沼田ニ著馬、關東隨身ノ諸士ヲ驅集メ、當月十六日、西上野ノ敵地ニ放火

ヲ揚ヘシ、遠境再往ハ申届ヘカラス、當方ノ亶全御不審ナク御手合肝要タルヘシ、若

此時ヲ取延サレナハ、千悔必定タラン乎、自然今般御手合ノ首尾ナカランニ於テハ、

向後御催促用拾ニ預ルヘシト云々、然レハ件ノ趣專諷諫ヲ加フヘキ旨、酒井左衛門

家康勝頼
ノ攻入ヲ
長レ援ヲ
謙信ニ請
フ

天正二年二月五日

二二一

天正二年二月五日

忠次カ許ヘモ一通ヲ投贈セラルト云、

二二二

後藤勝元等、由良成繁ヲ上野新田城ニ攻ム、是日、謙信、コレヲ褒シ、且ツ、北條氏ノ動靜ヲ探報セシム、

〔後藤文書〕○羽前 後藤常助氏所藏

到新田表、調儀及仕相、(上野)屈候、得勝利、敵討取、(北條高廣)驗厩橋ヘ差越、自丹後守所之返札、何も到來

披見、吾分心馳之程、感入候、扱亦、(北條氏政)南方之儀、晝夜案候、目付をも差越、珍儀有之者、早速注

進待入候、將亦、當春越山令議定、去月廿六依吉日、令陣觸候之條、其間之儀、彌稼肝要候、

目出彌可申候、謹言、

(天正二)二月五日

謙信(花押)

後藤左京亮殿

同 新六殿

後藤新六

首級ヲ厩橋城ニ送ル
高廣ノ書ヲ併セテ謙信ニ報メ
關東出陣ノ報

二十八日、(酉)宇都宮廣綱、謙信ニ、佐竹義重ト共ニ、軍ニ會センコトヲ報ズ、

〔宇都宮文書〕○乾 常陸

急度啓達

越 (佐竹)義重相談、可及手合之由承候上、任其意、(佐竹)義重へ秀綱有同意、成諫

承候、本望ニ候、將亦、至于上州御

義重白川義親ノ攻圍ヲ止メ謙信ノ軍ニ會セントス

言候之間、速可被及手合之由返答、然間近日當表へ可被打出候、諸篇申合可及其刷候

條、御調儀之模様御回章、可得其意候、義重先月以來、向白川口出勢、屋裏及子ヶ城被屬

手裏、白川義親在城之地計ニ被取成之上、不通此節、雖可被打詰候、既有御越山、半途ニ

御張陣之上、先以一兩日之内歸馬候、萬々以使者可申届之上、不能一二候、恐々謹言、

(天正二)二月廿八日

(宇都宮)廣綱(花押)

山内殿
御陣所

〔佐竹家譜〕(二十代目)常陸介義重 天正二年甲戌、上杉輝虎、小田原江發向ニ付、正月六日、義

重も出馬致、白川領ノ内手ニ入候而、致歸陣候、

三月小 丙子 朔 盡

十一日、(丙)謙信、紀伊高野山無量光院ニ、師檀ノ契約ヲ締シ、將士及ビ分國ノ檀契

モコレニ准ゼシム、

〔無量光院文書〕○紀 伊

定

越後國貴院旦那之事、師檀契約已厚矣、然則不啻予累葉、旗下將士及(分)合國之檀契、亦可准同于予者也、

天正二年三月十一日

二二三

天正二年三月十三日

天正二年 戊甲

三月十一日

無量光院法納

机下

謙信(花押)

二一四

○謙信、清胤ヲ師トシ、剃髮シテ法印トナルコト、十二月十九日ノ條ニ、高野山ノ一院ヲ再興シテ、菩提所トナサント約スルコト、三年六月五日ノ條ニ見ユ、

十三日、子謙信、上野膳山・上女淵ノ諸壘ヲ陷レ、深澤城ニ阿久澤某等ヲ降ス、是日、御覽田ヲ攻破シ、武藏ニ入ラントシ、コレヲ木戸忠朝等ニ答報シ、且ツ、太田資正・築田政信等ニ出兵ヲ促サシム、

〔西澤徳太郎氏所藏文書〕○羽前

沼田平八郎由良成繁ニ同心ス
御覽田要害ニアラザルヲ以テ放棄ス
東方ノ衆

昨十二文書中、今十三披見候、仍、去月廿八日ニ被差越候飛脚、今月六日飛脚同日ニ返候キ、無到著候哉、無心元候、先段ニ如申届善山(上野膳山)上女淵付落居候、然處ニ、沼田平八郎重而横瀬ニ令同心候間、遂靜謐、女淵ニ越衆差置候、其上當地深澤江押寄、折懸ニ取詰候處、阿久澤弟兄ニ候者、押出令忠信候、乍、去模様無心元子細候間、當手之者爲押入要害、是も越衆ニ申付候、同(御覽田)ごらん田之地、彼飛脚如見聞、今日押落、無所詮地ニ候間、相捨候、此上、其表江可打出迄候、何共東方之衆手おもよて笑止候、(太田資正)三樂父子江も、(築田政信)築中江も催

手おももニテ笑止ナリ
佐藤筑前守

促候て肝心候、猶佐藤筑前守可申候間、万吉重而恐々謹言、

追啓、彼飛脚者、今日午刻到著、則及直報候、以上、

三月十三日

謙信(花押)

木戸伊豆守殿○武藏羽生城將

同 右衛門大夫殿

菅原左衛門佐殿

〔由良文書〕○東京帝國大學所藏

義氏深澤城ノ危急ヲ憂ヘ國繁ヲシテ警備ヲ嚴ニシ且ツ狀情ヲ注進セシム

急度以使節申遣候、然者輝虎深澤へ寄陣之由、被聞召及候、様躰無心元候、内々敏ニ雖

可被仰出候、當城古河普請被仰付候、氏照(北條)自身馳走無手透、故御遅延候、其地之備肝要

候、敵陣之様子、信濃守致談合、節々注進可然候、巨細町野備中守口上被仰含候、恐々謹

言、

三月十六日

義氏(足利)(花押)

由良刑部太輔殿

十八日、巳謙信、戰捷ヲ、常陸江戸崎城主土岐治英ニ答報シテ、參陣ヲ促ス、

〔土岐文書〕○子爵土岐章氏所藏

天正二年三月十八日

二一五

治英母子ノ死去ヲ甲フ

入心凌遠路使祝著候、仍越山敵地數ヶ所攻落仕置堅固ニ申付候間、此表存分之儘ニ候、東方之諸士何も可參陣、由候間、此上沖中江可打下候條、手透も候者、馳來可被相嫁事尤候、扱亦孫二郎うゝへ之如書中者、老母幼少之息死去之由、心底察入候、恐々謹言、

三月十八日

謙信(花押)

土岐大膳大夫殿治英 戶崎城主常陸江

〔參考〕

〔土岐系圖〕

○子爵土岐章氏所藏

賴藝——治賴

治英

童名大進、源次郎、弓馬、鷹秀逸、從持氏將軍、六代目晴氏將軍、江、募忠節、因茲大膳大夫賜之、於關東稀例也、

二十二日、西上野國峯城主小幡信貞、同國新田城ヲ攻メ、首級及ビ捕虜ヲ沼田城

ニ送ル、是日、謙信コレヲ褒ス、

〔歷代古案〕

○羽前

北條氏ノ兵赤石ニ陣スルニ乘ジ新田ヲ襲フ

南方之凶徒追散候由、注進到來、得其意候、彌敵之手成聞届、細々注進專一ニ候、然而南衆赤石表在陣中、(金山城)新田并向敵陣、足輕深々與差遣、敵數多討捕、生捕廿人餘、馬已下迄頭ニ相添、至于倉内、(沼田)差越候由、感悅至極候、猶委細吉江喜四郎可申越候、謹言、

三月廿二日

謙信

小幡山城守殿(信貞) 峰城主上野國

〔蠹簡集殘編〕

○土佐

謙信桐生ヲ去リ羽生ニ至ルト噂ス

輝虎、桐生陣拂、先以心易候、然ニ(武藏)羽生口へ可打下、由告來候間、今日出馬候、明日者彌可爲進陣候、其地加勢之儀尤至極候、早々可籠置候、如此ニ出馬之上者、手前心易可被存候、一途ニ堅固ニ防戰肝要候、恐々謹言、

三月廿七日

氏政(北條)

富岡重朝

富岡主稅助殿(重朝) 泉城主上野小

○富岡重朝、曩ニ謙信ニ屬セシガ、是時、既ニ北條氏ニ降服セルカ、

二十六日、辛謙信、上野藤阿久ニ陣シテ、由良成繁ヲ金山城ニ攻メントシ、武藏羽生城將木戸忠朝等ヲシテ參陣セシム、時ニ北條氏忠、羽生城附近ヲ侵略スト聞キ、忠朝ノ弟右衛門大夫ヲシテ、留リテ城ヲ守ラシム、

〔中山小太郎氏所藏文書〕

○羽

就陣寄使祝著候、先書ニハ、(縣尾カ)あぐと袂、赤岩江可打下、由申候つる、雖然、自其元金山可押詰事、簡要之由ニ候間、廿六、當地藤阿久ニ陣取、所々涯分爐爲之候工夫之旨候間、明後

天正二年三月二十六日

藤阿久附

近ヲ蹂躪
セントス

天正二年三月二十七日

二一八

(四月)朔日必迎動可申候、菅左木伊玉井當陣江越尤候、右衛門大夫者定而被越度可有之候、併敵城數ヶ所差向、殊北條左衛門大夫以下近邊江打出由候間、先右衛門大夫有其元、留守中用心申付、重而被越事專一候、猶万吉面之時分可申候、恐々謹言、

(天正二)三月廿八日未刻

謙信(花押)

木戸伊豆守殿○武藏羽生城將

同 右衛門大夫殿

菅原左衛門佐殿

○謙信、北條氏政下利根川ヲ隔テ、陣シ、又金山城ヲ攻ムルコト、四月十三日ノ條ニ見ユ、

二十七日、壬寅謙信、上野倉賀野城ノ安否ヲ、倉賀野尙行ニ問フ、是日、尙行答謝ス、

〔吉江文書〕○羽前

使者一瀬
某

就其許御仕合之儀、當口無御心元、被思召、一瀬方爲御使、被指越候、善之地(上野膳山)へ罷越、御使江懸御目、御様躰承届、過分之至存候、於御様躰者、彼御方へ申展候間、定被仰上候、雖無申迄候、可然様ニ御心得御披露奉存候、恐々謹言、

倉賀野左衛門五郎

(天正二)三月廿七日

尙行(花押)

吉江資堅

喜四郎殿

北條高常

下總守殿

三條信宗

道如齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

齋

吉江資堅
北條高常
三條信宗

小倭右近後家某、地ヲ越後專稱寺ニ寄進ス、

〔專稱寺文書〕○越後

寄進狀支

右爲淨阿彌

佛靈供

不そこへ

七十五束

束

又身

つ

くら爲

逆修

ふ

あ

さ

か

の内

卅

束

又

爲

珠阿彌

佛

あ

せ

屋

の内

多

き

百

束

合

而

貳

百

五

束

奉

天正二 甲午 三月廿七日

後室(黒印)

小倭右近

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

後室(黒印)

是月、織田信長、謙信ニ、狩野永徳畫ク所ノ屏風ヲ贈ル、

〔上杉家什寶目録〕屏風 第一號

一六尺金地洛中洛外畫 永徳筆、織田信長ヨリ謙信公ニ贈ル、

壹双

天正二年三月是月

二一九

源氏屏風
ヲ贈ル

〔上杉年譜〕十七 天正二年春三月下旬、織田信長ヨリ使節到來ス、濃彩ノ屏風二雙
贈ラル、一雙ハ洛陽ノ名所、一雙ハ源氏ヲ畫ク、狩野源四郎貞信筆也、墨妙精工ニシテ、
見者目ヲ驚カス、管領モ彌信長ノ深情ヲ感シ給フ、

信長ノ表
裏ヲ責ム

〔北越軍記〕四下 天正二年^甲四十五歲、三月、信長公ヨリ兩使ヲ以テ、洛中洛外ノ圖
ノ屏風一雙、源氏物語ノ屏風一雙、何レモ狩野永徳筆極彩色ナリ、是ヲ謙信ヘ進入、事
ノ外ノ懇志ナリ、然レモ色々行ヲ以テ、上杉領内ヘ手遣有ニ付、謙信書札ヲ遣シ、信長
表裏アル事ヲ讓、手切之旨被申遣、信長ハ、誰人カ讒言ニテ可有之旨様々陳謝アリ、謙
信不用、

信長柴田
右馬助稻
葉彌助ヲ
越後ニ遣
ス

〔北越家書〕

天正元年十月、織田信長ノ兩使柴田右馬助、稻葉彌助越府ヘ來ル、公ノ
著料トシテ錦衣五襲、并狩野右京亮州信、後号永徳畫ノ洛中洛外ノ地圖ノ屏風一雙、
各極彩色ニシテ、又源氏物語ノ屏風一雙、各極彩色ニ仕立是ヲ送り、向後上方筋要用
ノ義、件ノ兩使ニ宣ヒ附ラルヘシ、是信長至誠ヲ表示スル所以也ト、隔心ナキ懇切ヲ
申越ル、右馬助ハ修理亮勝家^(柴田)カ從父兄弟ニテ、分際相應ノ走廻ヲ勤、才覺ノ士也、信長
是ニ託セラル、ハ、公ノ内用ヲ承ルヘシト也、稻葉ハ日々春日山ノ城館ヘ出仕シ、寒
天ノ間機嫌ノ容、鉢丁寧ニ伺ヘキ旨、乞ト含ラル、ノ由ニテ、兩使越年ノ設ヲナシ、城

佐々長秋
赤座宮内
左衛門ノ
二人柴田
稻葉ニ代
ル

下ノ邸家ニ止リ居ル、信長ハ生得表裏ノ大將故、甲府ヘモ數ケ度ノ音問ヲナシ、表ハ
信玄ノ心ヲ攬テ、裏ニハ大神君ノ轂ヲ推テ、彼ト矛盾ノ詞儀ヲ計リ、今亦當家ヘ親ヲ
厚シ、他念ナキ風情ヲ見スレトモ、底ニ虎狼ノ害心ヲ夾ミ、越中ノ神保安藝守ヲ内々
ニテ妹聲ニシ、間道ヨリ密使ヲ通シテカヲ合セ、公ノ爲ニ倍怨ヲ構ル如ク行ヲ致サ
ル、奸謀ノ甚キ推テ以テ察スヘシ、是ヨリ年頭^(午)端五、重陽、歲末ノ如キ嘉辰毎ニ、祝義ノ
贈物闕如スルヲナシ、然レモ公ヨリハ信長ヘ禮謝トシテ使ヲタモ差越玉ハス、漸兩
年ノ間一ケ度モ其式ヲ償ル、迄ノ書信アリシ、天正三年乙亥ノ冬ニ到リ、佐々權左
衛門政祐^(長秋)赤座宮内左衛門用番ノ交代ニ來リ、柴田、稻葉ハ安土ヘ歸ル、佐々ハ殊ニ輝
虎公心ニ叶ヒ、伊豆守ト受領セラレテ懇志ニ預ル、左ニアリナカラ、公實ニハ渠儕ニ
賢慮ヲ許シ玉フヲナク、常ニ横目ヲ付置、其動作ヲ窺シメ玉フト云々、

四月小巳盡

十三日、謙信、北條氏政ト、利根川ヲ隔テ、對陣シ、又、金山城ニ由良成繁ヲ攻ム、
〔秋元興朝氏所藏文書〕

兩人招候日限、被申越候、乍去、早々招寄、自然其地江南衆取懸候ヘ者、右衛門大夫計有
之仕置窮届ニ候間、先以延引申候、定而^(北條)氏政直ニ越候共、爲差儀有間敷歟、利根川水ウ

天正二年四月十三日

利根川溢
水ヲ利シ
敵ノ襲撃
ヲ慮リ忠
朝等ヲシ
テ探報セ
シム

さニ候間、加様之儀(を)於能見届、水於力ニ南衆打出候由、令校量候、當手へ可乘向儀、咲敷候、氏康、信玄自在世、當家之弓箭も互之甲乙實儀ニ候條、其義者可爲校量之前候、猶佐藤筑前可申候、万吉重而恐々謹言、

追而、横瀬(由良成繁)知行之儀者、涯分墟ニ申付候、以上、

四月朔日

謙信(花押)

木戸伊豆守殿

菅原左衛門佐殿

〔志賀楨太郎氏所藏文書〕

前羽

大輪ニ對
陣ス

利根川増
水ニテ兩
軍共ニ渡
ル能ハズ
佐藤筑前
ヲシテ彈
藥糧食ヲ
羽生城ニ
送ラシム

如啓先書、幾日大輪之陣ニ有之を、大河與云、水増與云、爲如何も其地江助成之儀、依不成之、河ニ付押上、自朝至夕迄瀬々於爲驗候得共、瀬無之候條、無了簡、爰元ニ立馬候、佐藤淵底如見聞、來秋迄之兵糧玉藥以下迄申付、既ニ前後左右及百里味方之地一城も無之所江、不痛凶事打下候儀、忠信之不感歎、縱令懸引ニ一騎一人敵不慕不出候儀者、年月之以覺如此候、南衆も無水増候て、瀬を候者、如只今其地江之妨可有如何候哉、自元旁忠信於忘失申ニ雖無之與、陸路不續候へ者無申事候、まてあるをの壹人被越候者、用所候間、口上ニ申度候、佐藤ごうものニ候、其故者、大河お隔、船ニて兵糧送入候ハ

佐藤筑前
守計策ヲ
失ス
一生申ノ
不足

、羽生之地自瀬端隔ニ里由申候間、敵妨候者、兵糧者不入、結句關不足事ニ候、如何之由尋候へ者、少も敵之可致妨地形ニ無之候、船をも三十艘ニ而一船ニ可越由申候つる條、さうと心得、一世中之不足(を)おろき候事、無念ニ候併此度ニ限間敷候、何様諸口お差置當口ニ入念、此可散鬱憤候間、身之備者一向不苦候、信玄氏康も、無了簡地形者不叶候つる歎、愚老不叶ニも無之候、佐藤地形之様子有儘申候者、別而工夫之旨も候つるをのをと、丹後守合手ニ成之申事ニ候、猶重而自是可申候、恐々謹言、追而、玉井豊前くさへも申度候へ共、路次不自由之間、狀數多候へ者、造作ニ候間、傳言之申度候、以上、

四月十三日

謙信(花押)

木戸伊豆守殿

同 右衛門大夫殿

菅原左衛門佐殿

〔歷代古案〕

一羽前

重而、使無餘儀候、幾度如申、幾日有其元對陣候共、其地之不成助成、結句於世間者、氏政與對陣、合向之押合之様ニ批判可申候間、押上爲瀬踏候處、氏政窮届候哉、當手ニ付而

天正二年四月十三日

二二三

羽生城ヲ
援フ能ハ
ズ

天正二年四月十三日

二二四

利根川漸
ク減水ス
氏政本田
ニ退營ス
謙信今村
ニ陣ス

登本庄ニ陣取候つる、漸水可落處校量も候哉、昨日日本田江引上由申候、さも候歟、今日者武見ニ而も不得見候、將亦其地之續之義、様々令工夫候間、可心安候、然者諸軍徒ニ非可置候間、向赤石號今村(上野)興地取立候、可心安候、何様逗留之内ニ、まてあるをの被越候者、其時分委可申候、萬々其地之上下之劬勞案迄候、恐々謹言、

四月十六日

謙信

菅原左衛門佐殿

〔由良文書〕

○東京帝國大學所藏

北條氏政
防戦ノ功
ヲ賞シテ
刀ヲ由良
國繁ニ贈
ル

今度、越衆出張、桐生、金山向兩地數日令在陣候處、城々堅固ニ被相拘、一途之被及防戦故、輝虎早々敗北、誠武勇之至、御名譽ニ候、何様此度之御忠功、一度報謝存詰候、此條伊勢兵庫頭方相雇申届候、仍刀一兼光久所持候間、進之候、表祝儀候、委曲伊兵可爲演說候、恐々謹言、

卯月廿五日

左京大夫氏政(北條)花押

謹上 由良六郎殿

〔松平義行所藏文書〕

由良家證文之内

義氏成繁

急度以御使節被仰出候、然者今般、北敵出張、其表永々在陣、内々無心元候處、存忠信、其

ヲ褒ス

町野備中
守

防戦故、無損儀、敗北、誠以戰功至、御感悅候、此上氏政被致越河、東北之仕置可有之分候、彌以抽忠信、走廻專要候、委碎町野備中守口上被仰含候、恐々謹言、

五月二日

義氏判(足利)

由良刑部大輔殿

五月

大甲戌朔

一日、謙信、佐竹義重、宇都宮廣綱等ヲシテ、守備ヲ嚴ニセシム、

〔阿保文書〕

○陸奥

返々、よししけひろつあさんうあつそ、けんこのしをきうんよふ候、(其) 捲のたもそのやうとひりた好そ、よし志氣むろつあより、(意) 見んあつそ、(別) ちなく、おろやすうるへく候、(要) けん信(花押)、

五月一日

〔表書〕

〔少將〕

けん信

二十四日、謙信、越後ニ歸ラントシ武藏羽生城將菅原左衛門佐等ノ戦功ヲ褒

天正二年五月一日 二十四日

二二五

シ、來秋出援ノ日ヲ俟タシメ、且ツ、コレヲ築田政信父子ニ報ゼシム、

〔歷代古案〕一羽前

急度以飛脚申届候、于今堅固之防戰故、先以無何事由、誠ニ無比類感入候、如斯之申事、雖無際限候、子細共候間、とても儀候者、來秋越山迄堪忍可有之歟、存分之旨候間、餘忠信惜仕合候條如此申候、同者爲口才者一人被越候者、精申度候、万吉重而可申候、恐々謹言、

追而、書中築田父子（政信政綱）被届入頼入候、

五月廿四日（天正二）

謙信

菅原左衛門佐殿（武藏羽生城守將）

六月甲辰朔

三日丙午、謙信、山田修理亮ノ知行地ヲ、郡司不入ト爲ス、

〔歷代古案〕三羽前

出置候知行分、郡司可爲不入者也、仍如件、

天正二年

六月三日

謙信（御朱印）

山田修理亮殿

〔米〕家中諸士由緒書延寶五年五月書上

山田八左衛門

本多飯地式部三尾

一爲景様御代、曾祖父本名本多飯地式部、與申、謙信様御代、彌御忠信仕候付而、山田一跡被下置、山田修理ニ罷成、古志郡之内三尾之地ニ被差置候、略下
十五日戊午、上杉政勝、越後大窪歌代神五郎ニ、細工ノ辛勞分トシテ、内藤分ノ地ヲ宛行ヒ、諸役ヲ停止ス、

〔白川領風土記〕十六鏡郷大窪村、越後國二鏡物師新羽郡鶴川庄

細工之爲辛勞分、内藤分事五百刈諸役停止出之、於何時も申付候細工之儀、無如在可致之者也、仍如件、

天正貳年六月十五日

政勝（上杉）（花押）

○政景、神五郎ニ、梵鐘鑄造ノ業ヲ許スコト、永祿六年閏十二月四日ノ條ニ見ユ、
天正五年三月七日、地頭役ヲ免ズルコト、便宜左ニ附收ス、

〔白川領風土記〕十六鏡郷大窪村、越後國二鏡物師新羽郡鶴川庄

天正二年六月十五日

天正二年六月二十日

地頭役之義、於何事ニモ是を用捨可致者也、爲後日之

天正五年三月七日 神田清左衛門尉

神田信吉

大工新兵衛殿

二十日、癸亥謙信、吉江景資ノ子景泰ヲシテ、中條藤資ノ後ヲ嗣ガシメ、ソノ軍役ヲ

定ム、

〔吉江文書〕前

今度、中條名字吾分ニ申付候間、改而軍役之覺、

鐘

一鐘九十七候間、是者拾丁宥免、八拾之軍役、

騎馬

一馬上拾騎候間、是者五騎過上、拾五騎、同腰差、

旗

一大小旗拾三本、

手明

一手明貳拾人、同腰差、

鐵炮

一鐵炮拾丁、同腰差、

以上

天正二年

六月廿日

〔謙信〕
朱印

中條與次

〔景泰〕
中條與次殿

〔吉江系圖〕

景資

初與橋 後織部佐
大永七年生、略天正十年六月於魚津戰死、五十六歲、法名功運玄忠居士

長秀 童名龜千代丸 初景秀 後號六三 天文廿二年生 母河田對馬守

景泰 永祿元年生 沙彌法師 改與次 後嫁中條越前守藤資女繼中條家、號越前守、略

長忠 初茂高 與三郎 後與橋 又木工助 永祿九年生

〔上杉年譜〕十七

天正二年夏六月廿日、中條越前入道藤資カ家督與次景資ニ、軍徭

定ノ御書出アリ、藤資卒去以前ヨリ、吉江常陸介宗信カ男與次ヲ家督ニ命セラル、是

中條藤資

ハ藤資ノ夙旨ニ依テ也、

二十二日、乙丑武藏羽生城將菅原左衛門佐、謙信ニ、關東ノ狀況ヲ報ズ、是日、謙信

コレニ答書ス、

〔歷代古案〕一

〔上野〕
〇羽前

内々其地之模様無心元候條、〔上野〕厩橋迄使お越如何共見合、深谷其地へ可返候由、思案候

處、小安隱岐守被越候、彼口上條目聞届上、身之事も内意申含候、扱亦、從所々之證文共、

彼兩使ニ入披見候條、定而可申分候、越山之儀者涯分油斷有間敷候、万吉重而自是可

天正二年六月二十二日

小安隱岐守

天正二年六月二十七日 二十九日

二三〇

申候、恐々謹言、

追、而雖不初儀候、御忠信不淺難露筆頭候、

六月廿二日

菅原左衛門殿（佐脱カ）
生城將

二十七日、庚午松田織部佑二、信濃更科八幡宮社領ヲ管セシメ、稻荷城ヲ守ラシム、

〔謙信文庫所藏文書〕〇越後

仁科本意之間、松田分并八幡領一圓預置、修造祭禮如恒例、嚴重可相勤候、次稻荷之地（信濃）
在城申付之間、同城之者共令入魂、用心普請不可有油斷者、仍如件、

天正二

六月廿七日

謙信（花押）

松田織部佑殿〇信濃更科
八幡宮神主

〇上杉景勝、松田民部助ニ、八幡社領ヲ管セシメ、稻荷城ヲ守ラシムルコト、十二年五月十七日ノ條ニ見ユ、

二十九日、壬申是ヨリ先、謙信、織田信長ト、武田勝頼ヲ夾撃センコトヲ約ス、信長違背セルニ因リ、謙信、山崎秀仙ヲ遣シテ之ヲ詰ル、是日、信長辯疏ス、

〔上杉文書〕

〇羽前

山村山氏文書

一 專柳齋被差上候、即令參會候事、（山崎秀仙）

一 信甲表之儀、信長不入勢之由承候、全雖無油斷候、近年五畿内并江北越前之儀付而、

取紛候つる事、

一 當春、武田四郎濃信、堺目へ動候つる、其次第申舊候、貴所關東御動之儀、舊冬廿八日

書中ニ案内承候、尤之時分出馬候、旁四郎失手事、

一 御間之儀、自然申妨之者有之歟之由、御不審候哉、努々不可有之候、縦左様之族候共、

信長不可能許容事、

一 來秋、信甲への出勢得其意候、九月上旬時分可然哉之由尤候、重而猶自他儘日限之

儀、可申定事、

一 四郎雖若輩候、信玄掟を守、可爲表裏之條、無油斷之儀候、五畿内をおろそくして、

甲、信ニせいを入候様ニと承候、尤候、大坂表之儀ハ、畿内ノ以、人數申付候、東國への

事ハ、江尾勢三遠ノ以、人數可相働候條、上方之行更東國への懸組無之候、其段可御

心安事、

天正二年六月二十九日

二三一

畿内江北
ニ取紛レ
甲信ニ侵
入スルヲ
得ズ

讒者ニツ
キテ

來秋信甲
ニ侵入セ
ン

畿内ノ兵
ヲ以テ大
坂ニ當リ
江尾勢三
遠ノ兵ヲ
以テ東國

天正二年六月二十九日

一委曲專柳齋可有口上事、

以上

六月廿九日

〔宇都江文書〕

○羽

御書謹致頂戴候、爲御使專柳齋被差上候、信長被滿足申候、當春關東御進發、敵城所々御退治之趣、寔無比類御様子ニ候、重而當秋中信州表可被及御行付、信長被仰談可被成御働之由、信長啐啄之儀候、第一御入魂之處、下々迄大慶候、委曲專柳齋可爲被申候、我等迄被仰下候、無冥如次第、此等之者可御披露候、恐々謹言、

竹井夕庵

七月朔日

爾云(花押)

長景連

與一殿

利治河田
長親ニ武
田勝頼ノ
退軍ヲ報
ズ

御書之趣、委細致拜見候、信長以御使僧被仰越候、然共條々被仰下候、面目之至候、如御定當春武田東美濃岩村城下へ出張候、則信長走向可被及一戰由候處、彼城下山中節所不大形地候、士卒之備不自由候、然武田不單手合引執候間、不及力候間、其節關左へ有御越山、敵城數ヶ所被攻執、被納御馬由候、併連々信長被仰談首尾、乍恐尤ニ奉存

知候猶御使僧へ申殘候之條、先預御披露候、恐々謹言、

(天正二) 七月三日

河田豐前守殿

利治花押

○織田信
長家臣

利治

貴札致拜見候、仍專柳齋被差上、御書并御頭書條々申聞、何茂啐啄候、殊お不鷹ニ被進候、一段鐘愛不斜候、委曲以報被申入候、就其當春至濃、信堺目、武田四郎出勢候刻、信長雖馳向候、彼地山中行路嶮難候條、難通歸、令思慮候所ニ、敵退散候間、不被及是非納馬候、其刻至關左御出馬、敵城數ヶ所被御存分旨、誠快然之至候、來秋信申表可被及御行之由、尤存候、此方同時可被出張之間、其節可申展候、御間深重之儀、都鄙無其隱候、彌御入魂於下々、可致滿足候、尙以使者可被申入候旨候、萬般專柳齋可有演暢候、此等之趣、宜預御披露候、恐々謹言、

(天正二) 七月三日

直江大和守殿

秀貞花押

○織田信
長家臣

秀貞

○勝頼ノ信濃ニ入ルコト、二月五日ノ條ニ收ムル當代記ニ、謙信、德川家康ヲシテ、信長ノ信申出勢ヲ促サシムルコト、次ノ條ニ見ユ、

天正二年六月二十九日

天正二年七月九日 二十一日

二三四

七月大 癸酉 朔

九日辛巳、謙信、徳川家康ヲシテ、織田信長ニ勸メテ兵ヲ信濃及ビ甲斐ニ出サシム、是日、家康コレニ答フ、

〔歴代古案〕九 羽前

大室某ヲ遣ス 度々預書音候、過當此事候、重而大室被差越候、御懇情承悦候、然者當秋有計策、互出馬之儀、尤肝心之處ニ候、就其信長(織田)信甲へ出張、疎意之趣蒙仰候、元來非其儀ニ候、併猶從當表諷諫候條、不可有異論候、信州當秋發向異見候歟、近日自此方急度、以使可申宣候間、令省略候、恐々謹言、

(朱書) 天正元 七月九日

(徳川) 家康

上杉殿

二十一日癸巳、謙信、先例ニ依リテ、高橋又五郎ノ所領、信濃河東計見等ノ地ヲ安堵セシム、

〔歴代古案〕二 羽前

爲景以來ノ由緒

信州河東計見七百貫之内、下宮之島分之儀、從道七(長尾爲景)以御判形申候、先代之筋目違有間敷者也、仍如件、

天正二年

七月廿一日

謙信

高橋又五郎殿

八月

小 癸卯 朔

三日乙巳、謙信、北條氏政ノ、上野厩橋城ヲ攻メントスルヲ聞キ、親ラ關東ニ出陣シテ、今春ノ憾ヲ釋カントシ、是日、上條政繁等ヲシテ、上野沼田城ニ入ラシム、

〔由良文書〕大 東京帝國大學所藏

急度申遣候、然者先日以代官言上之時分、信濃守以條目申上様體、何も被聞召届候間、今般以御使節(北條)氏政へ被仰出候、就中向厩橋(上野)當調儀之事、可爲肝要之由、別而口上被仰含候、早速出馬之間、定而可爲満足候、動之模様節々注進可然候、委細芳春院可被申遣候、恐々謹言、

(天正二) 七月廿一日

(足利) 義氏(花押)

(國繁) 由良刑部太輔殿

〔歴代古案〕一 羽前

越山爲催促、態使僧具聞届候、殊(北條)氏政向厩橋可出張由、得其旨候條、陣觸兼而申付候處、

天正二年八月三日

二三五

足利義氏

由良國繁

木戸忠朝 援ヲ請フ

天正二年八月三日

二三六

先隊二十
六日發ス
今春利根
川ノ憾ヲ
釋カント
ス

厩橋江敵相動由候間、今日廿六出馬候、先勢至^(上野沼田)于倉内爲押出候、越山迄氏政相あらへ候ハ、春中之鬱憤此時候歟、猶山吉孫次郎可申候、恐々謹言、

七月廿六日

謙信

木戸伊豆守殿

同 右衛門大夫殿

菅原左衛門佐殿

〔歷代古案〕

○羽前

南衆出張之由、只今刻午自厩橋之注進候間、最前ニ如申付候、早々其地鹽津^(澤カ)ヲ打立至于倉内著城^(肝)簡心ニ候、愚入事者、明日出馬候、珍儀待入候、以上、

八月三日

謙信

上條殿

十郎殿

本庄清七郎殿

松本代

栗林政頼

政繁等ヲ
シテ沼田
ニ入ラシ
ム
四日出發
セントス

上杉景信

本庄秀綱

松本代

栗林政頼

○謙信、四日ヲ以テ春日山城ヲ發セントセシモ、果サバリシガ如シ、ソノ出馬ノコト、十月十九日ノ條ニ見ユ

九月 壬申朔

五日、謙信ノ兵、北條氏政ノ兵ト、上野黒川谷ニ戰ヒ、尋テ、御覽田ニ戰フ、

〔松平義行所藏文書〕

由良家證文之内

屬芳春院懇申上候、御悅喜候、然者去五日黒河谷寄居ニケ所打散、其上同八日前五覽^(御)

田根小屋治田衆三百餘人討捕、頭之注文致進上候、戰功之至心地好仕合專要候、猶彼

筋珍儀節々言上尤候、巨碎芳春院可申遣候、恐々謹言

九月十四日

義氏判

由良刑部殿

二十六日、謙信、詔言ノ旨ニ任セテ、二宮左衛門大夫ノ所領ヲ安堵セシム、

〔狩野享吉氏所藏文書〕

京東

任詔言之旨、重而證判出上者、本知行新地并其方ニ爲從申付地、號被官人横合有間敷者也、仍如件、

天正貳年 戊申

天正二年九月五日 二十六日

二三七

足利義氏
由良國繁
ノ戦功ヲ
褒ス

天正二年九月二十七日

九月廿六日

二宮左衛門大夫殿

謙信(花押)

二三八

〔附録〕

〔渡邊秀二氏所藏文書〕

後〇越

一字ヲ授

一字之義、依望長興出之候、其旨可被心得候、恐々謹言、

三月十二日

謙信(花押)

二宮左衛門大夫殿

〇年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

二十七日、戊上野白井城主長尾憲景等、由良成繁ヲ同國金山城ニ攻ム、

〔石川忠總留書〕

〇上牧和泉二男源六郎、上野軍ニ新田城主由良信濃守林伊賀同

牧源六郎討死ス

伊勢崎の城主、晝夜相戰、天正二年九月廿七日、源六郎廿一ヨテ討死仕候、その様子を、左衛門督より謙信江注進被申處、御返答、和泉せうを源六郎、小田原方へうとせハ貴

牧和泉ニ證人ヲ返ス

方彌二心なく可爲味方との仰也、偕それより三年目の夏、證人免許の由、て牧又四郎を御返し被成、その刻又四郎を、謙信御前へ被召出之儀、云、公方義輝公より拜領

謙信又四郎ニ賜フトコロノ鐵砲及ビ給

いとせ御鏡砲十挺之内一挺被下置之旨、並にの御給拜領仕罷歸候事、四方亂國よ成候、八崎より田富への通不成候ニ付て、左衛門督より和泉方へ使を以被申ハ、世

憲景北條輔廣ニ類リテ武田勝頼ニ屬ス

間のおとを見合甲州勝頼をたのみ可申之旨被仰候、依之喜多條安藝守を頼、勝頼ニ申寄罷在候事、

〔上杉家古文書〕

態令啓候、然者、去御陣江以脚力申宣候キ、御懇切之廻答本望之至候、仍上口之儀も被

屬御本意之由、其間候、簡用至極ニ候、新田之地も、追日手詰之由申來候、當秋御調儀之

様子承度候、彼此御報待入候、恐々謹言、

九月廿一日

義重(佐竹)(花押)

山内殿御宿所

〔附録〕

〔歷代古案〕

〇羽前

覺

一長尾左衛門尉重而使差越被申候、然共有申斷旨、四日ニ返シ申候、昨日酉刻罷越候

間、小曾根攝津守相副差上申事、

一不動山者、去三日、西上州江乘取候事、

付、自此方差越候目付、上州衆之備之内ニ有之、爲方之様躰見届、昨日巳刻罷歸候、

天正二年九月二十七日

二三九

小曾根攝津守、不動山城、西上州へ乘取

天正二年九月二十七日

猶委細長尾左衛門使申事

一越國江之御備ニ西口江被進御陣半途ニ被立御馬候者何事も可爲如思召歎之由存事

以上

六月八日

由良六郎

國繁

由良信濃守

成繁

結城御陣

結城御陣 ○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

是月、謙信、越後安田筑前守ノ領分ヲ檢地ス、

安田領檢地帳 ○羽前伊佐早謙氏所藏

天正貳年九月吉日

給恩 同上地 寺社 御直納 軍役衆

四千六百五十石

合拾六貫六拾文

草水 左京亮殿

五千三百四十石

合貳拾貳貫貳百文

田那部清左衛門尉

合貳拾四貫貳拾文

馬下大膳助

壹萬石

渡邊彦右衛門尉

觀音寺

馬下大膳助

地子屋

田那部清左衛門尉

給恩同上地寺社方御直納軍役衆
草水左京亮殿
帶巻村

淨福寺

合參貫四百文

六百五十石

三林村

五千百石

安田

合貳拾參貫五百拾五文

地子屋

合貳拾參貫五百拾五文

井口文三

井口文三

合貳拾參貫五百拾五文

金屋村

六千四百四十五束

さしほり

合拾九貫五百五拾文

石井新右衛門尉

石井新右衛門尉

合拾九貫五百五拾文

向新保

合貳拾六貫五百卅文

井口彌八郎

合貳拾六貫五百卅文

井口彌八郎

中の村

合貳拾六貫五百卅文

折あかり村

合貳拾六貫五百卅文

次郎丸

合貳拾六貫五百卅文

行方與三左衛門尉

合貳拾六貫五百卅文

行方與三左衛門尉

六野瀬

合貳拾六貫五百卅文

天正二年九月是月

四千六百八十五束

天正二年九月是月

は津津村

松岡村

神田與五右衛門尉

小栗山村

中河原

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

高山平右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

渡邊彦右衛門尉

二四〇

二四一

笠堀
三瀬新五郎
乙丸吉田

合貳拾五貫百四拾五文

合拾九貫百拾文

合九貫六拾文

合四貫文

「安田之内橋之薬師堂免」

合壹貫六百拾文

「薬師堂免」

合壹貫五百八拾文

合拾參貫百五十文

「道場分安田橋下有」

里村
小野里與八郎

草水次郎右衛門尉

草水村

草水右京助

草水大炊助

草水新介

乙津丸

乙津丸

乙津丸

乙津丸

北とほり

二和田勘拾郎

三瀬賀兵衛

渡邊善左衛門尉

大谷

金山村

渡邊次郎右衛門尉

渡邊三郎右衛門尉

渡邊甚三郎

合四貫九百五拾文

合四貫六百文

合參貫貳百五拾文

合拾八貫參百文

合六百八拾文

「付箋」

「合貳貫」

合貳貫百八拾文

合六貫八百文

「付箋」

「一諏訪分羽禰津有」

「四百文」

「百文」

「百文」

「百文」

「百文」

「百文」

河上與三右衛門尉

神田彦左衛門尉

神田新右兵衛尉

松岡

神田平右兵衛尉

ゆわらせ

神田武介

浦村

神田美濃壽丸

神田五郎左衛門尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

千五百八十蒨

合九貫貳百八拾文

合拾貫百七拾文

合貳貫九百五拾文

合貳貫四百卅五文

「付箋」

「閏月」

合參貫參百九拾文

「付箋」

合六貫五百文

合壹貫八百五拾文

合貳貫八百六拾文

河上與三右衛門尉

神田彦左衛門尉

神田新右兵衛尉

松岡

神田平右兵衛尉

ゆわらせ

神田武介

浦村

神田美濃壽丸

神田五郎左衛門尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

神田新右兵衛尉

野中與八郎
 合六貫七百五文此内五百廿五文之田地安田二之儀共計 野中與八郎
 (付箋) 千五百十
 「此内七百五十 御上納」
 六百九十菊(付箋)「本所此へ」
 穴澤新衛丞
 穴澤與太郎
 合四貫廿五文此田地月岡村二有、此内百廿五文之儀共計 穴澤與太郎
 (付箋) 「壹貫五十文あなさへ地之内 同與太郎取」
 四百八十菊
 合貳貫六百廿文此田地月岡村二有、此内百廿五文之儀共計 菊屋彌八
 五百五十菊
 合參貫五拾文此田地月岡村二有、此内百廿五文之儀共計 内山五郎右兵衛
 五百八十菊
 合參貫八百五拾文此田地月岡村二有、此内百廿五文之儀共計 同 雅樂助
 (付箋) 「三貫之分」以下
 八百七十菊
 合五貫七百五文此田地小栗山村二有、此内百廿五文之儀共計 北澤勘右衛門尉
 千三百七十菊此内百菊ふさく
 合七貫六百七拾文此田地安田二有、此内百廿五文之儀共計 齊藤久松丸
 六百八十菊
 合參貫八百四拾文此田地小栗山二有、此内百廿五文之儀共計 同 新右兵衛
 千三束菊
 合五貫拾五文此田地三林二有、此内百廿五文之儀共計 同 彌左衛門尉

齊藤後藤右衛門尉
 山崎彦三郎
 齊藤清七郎
 合貳貫卅文此田地安田二有、此内百廿五文之儀共計 同後藤右衛門尉
 (付箋) 千百廿菊
 千百廿菊「地子屋村三貫之所木村取」
 合四貫四百五拾文此内壹貫貳百五之田地六度、此内二百七十之儀共計 同 清七郎
 (付箋) 「ふや廿」以下
 千菊
 合四貫參百文此田地六度淵二有、此内百廿五文之儀共計 同 半介
 (付箋) 「石塚五郎左衛門尉取」
 此内壹貫文御上納
 七百五十菊(付箋)「齋藤七右衛門尉」
 合貳貫六百七拾文此内九百之田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 同 忠右衛門尉
 七百五十菊其外六度淵二有
 合貳貫六百七拾五文此田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 同 七衛門尉
 貳百菊
 合四百文地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 同 掃部助
 五百卅菊
 合四貫七百六拾文此田地二郎丸村二有、此内百廿五文之儀共計 同 栗山孫右衛門尉
 六百七十菊
 合參貫四百七拾文此田地松岡村二有、此内百廿五文之儀共計 澁屋藤内左衛門尉
 百菊此内百廿五文之儀共計
 合七百文此田地安田二有、此内百廿五文之儀共計 中竹三介

里村
 合貳貫文此田地里村二有、小野二有、此内百廿五文之儀共計 漆山文
 六百十束菊
 合參貫百文此田地松岡村二有、此内百廿五文之儀共計 田口彌七郎
 合五貫貳百拾五文此内百廿五文之儀共計 今井惣右衛門尉
 七百五十菊
 合參貫百文此田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 半澤五郎左衛門尉
 三百菊
 合壹貫百文此田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 畑 藤次郎
 千三百五十菊
 合五貫百五拾文此田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 熊倉源次郎
 千四百菊
 合五貫四百九拾文此田地安田同地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 深井源四郎
 三百五十菊
 合壹貫六百文此田地はしか二有、同三百地、此内百廿五文之儀共計 山口與次郎
 貳百九十菊
 合壹貫五拾文此田地安田二有、此内百廿五文之儀共計 吉田清右衛門尉
 百菊(付箋)「長谷川藤六」
 合六百文同百みやしき橋か二有、此内百廿五文之儀共計 羽賀助右衛門尉
 (付箋) 「藏真野安田橋下有」
 三百菊野田
 壹貫貳百文
 五百菊此内百廿五文之儀共計、安田二有

小池四郎右兵衛尉
 成海彦六
 小池六郎右衛門尉
 湯原太郎兵衛尉
 成海五郎二郎
 小片甚右衛門尉
 小川甚右衛門尉
 合壹貫九百廿文此内三百之野地さき橋か二有、此内百廿五文之儀共計 小池四郎右兵衛尉
 「安田橋上關大夫之内六十五束二百かり」
 合壹文あいた免ゆる木田入の堂甚十郎參候」
 (付箋) 「みゆせん分三百文屋敷一間をしるこ有」
 (付箋) 「成海隼人」
 勘定致し昨年間「御直納」
 二百菊くれろこまり
 同二百野屋 一間」
 三百五十菊(付箋)「成海彦六」
 合壹貫四百文此田地六度淵二有、同百、此内百廿五文之儀共計 同六郎右衛門尉
 (付箋) 「湯原太郎兵衛惣」ヨリ渡也」
 (付箋) 合壹貫七百五十文 滿福寺分橋上二有
 八百貳拾菊
 合參貫四百八拾文此内壹貫貳百田地果村二有、此内百廿五文之儀共計 小片甚右衛門尉
 (付箋) 小杉取
 此内四百五十村かた」
 四百菊
 合壹貫參百七拾文此内六百之田地地子屋村二有、此内百廿五文之儀共計 小川甚右衛門尉

七百八十菰

合貳貫六百五拾文此田地安田ニ有、同百之、深井五郎次郎

六百菰 (付箋) 取本領より殘百有り

合貳貫七百文此田地安田ニ有、同百之、同 平左衛門尉

(付箋) 一殘有分

百より〇以下

七百五十菰

合參貫五百五拾文此田地大度ニ有、同、湯原太郎兵衛

貳百五十菰

合壹貫參百文此田地安田ニ有、貳百五十之、石田惣右衛門尉

九百四十菰 (付箋) 一雅樂丞

合四貫四百文此田地はね津ニ有、同、本間九郎次郎

此内壹貫四百文

五百七十五束菰

合貳貫貳百七拾文此田地安田ニ有、同七十之、同次郎左衛門尉

合壹貫八百文此田地安田ニ有、同、山口惣右衛門尉

(付箋) 一子春荒ヨリ三百五十菰
小池六右衛門尉分渡丑春渡

大恩寺分百菰五百文

酒井兵部少輔

松岡隨泉寺

(付箋) 一松岡隨泉寺分
七十七菰 四百廿文

二百菰 壹貫百五十文

同五十菰 七百五十文

合貳貫五百文此田地月岡村ニ有、

同月岡村十玉免

貳百地畠

合七貫七百文此内壹貫九百文ハ田地大度ニ有、安邊忠右兵衛

此内七百文 安邊源丞

合九貫五百八拾五文野地共、此外ニ三貫之、野口藤七郎

十五菰 成海五郎二郎分

五百菰 此田地何も六度瀬ニ有、

合參貫九百文此田地安田ニ有、同、石塚五郎左衛門尉

千百菰

合七貫貳百九拾文此内五貫五百文之田地月岡成實隼人丞

貳千三百菰 天谷澤 右馬助

合拾貫六百七拾文此田地はしかミニ、伊藤助左衛門尉

合壹貫七百二十文此田地安田ニ有、内五

(付箋) 一諏訪分六度瀬

貳百五十文野地 成實 五郎次郎

合貳貫百文此田地大度瀬ニ有、同貳百之野、

(付箋) 一滿福寺分亥かり渡丑春ヨリ

六百文

合九百五拾文此田地何も地子屋ニ有、同、山崎次郎兵衛

(付箋) 一若宮大明神分安田

合貳貫百文此田地何も地子屋ニ有、同、

天正二年九月是月

小池六右衛門尉

大恩寺

酒井兵部少輔

松岡隨泉寺

野口藤七郎

安邊忠右兵衛

安邊源丞

高山村

近藤市介

安邊源丞

高山村

野口藤七郎

山崎三郎

藤卷新右兵衛

合貳貫文此田地地子屋ニ有、同 彦三郎

合貳貫參百文同地子屋ニ有、藤卷新右兵衛

合四百文地子屋有 先達免

合貳貫文此田地地子屋ニ有、

合五百五拾文此田地はしかミニ、中 右衛門尉

合貳貫文此田地安田ニ有、

合壹貫五百五拾文居屋敷野地共ニ有、安杉山與五郎

參百菰 壹貫五百文御西分之内有安田ニ、小野里甚左衛門尉

百五拾地 居屋敷壹間同たてきわニ有、乙壽殿 御老母

(付箋) 一そのまゝ 齋藤助兵衛

(付箋) 一新福寺分二郎丸あり

遠藤四郎兵衛
安邊彦六

三百蒨とつちう免
合貳貫貳百文

四百五拾地 居屋敷壹間かきつれ間ニ有 遠藤四郎兵衛
百五拾地 居屋敷壹間高山村ニ有 安邊彦六

(付箋)
一さしかりやくしたう分

五百文屋敷もしり地迄合壹貫四百十文
六百廿文すじ分三百地くわんおん免

福隆寺

(付箋) 福隆寺

一ふくくう寺地子屋有

本間小六郎

本間小六郎
宮嶋五藤衛門
尉

(付箋) 三百蒨壹ノ五十文

四百地 居屋敷かきつれ間ニ有
貳百五拾地 野地橋下ニ有
百五拾地 居屋敷安田ニ有

(付箋) 同
同 宮嶋五藤衛門尉

小者藤七
松崎
新町
番匠分
齋藤與十郎

(付箋) 御小者 藤七

六百拾地 居屋敷橋かきニ有
六拾地 居屋敷新町ニ有
參百蒨 壹貫五百文地子やニ有
百地 居屋敷壹間小栗山村ニ有

(付箋) 安邊

一そのまゝ、三右衛門尉
百地 居屋敷小栗山村ニ有

(付箋) 加地

一そのまゝ、
六百五十蒨安田ニ有
貳貫五百文 此内五十蒨五十之野地子や村ニ有、
地四ツかうやニ有、安田ニ有、百地野
給分上地

羽多屋村

千貳百八十蒨同發田ニ有

合五貫貳百拾文 此内八十五蒨三貫四百文
申此外野地也、是八御公用定

合壹貫八百五拾文

徳長

五百蒨何も地子屋ニ有

合壹貫六百文

細藤次郎
小杉次郎左衛
門尉

四百蒨 地子屋村ニ有

(付箋) 小杉次郎左衛門尉

合參貫五百五拾文

渡邊隼人丞
小境

六百八拾蒨里村ニ有

(付箋) 渡邊隼人丞

合壹貫文

小野里甚左衛
門尉

三百蒨 此内貳蒨小作
此内百蒨へこさかいニ有地子屋村

(付箋) 小野里甚左衛門尉

合四百文

切梅

三百蒨 此内貳蒨小作
此内百蒨へこさかいニ有地子屋村

(付箋) 伊藤

合九百文

齋藤次郎四郎

同石塚四郎左衛門尉給恩

貳百蒨 此田地子屋村之内

合六百文

仁和田左京助

貳百五十蒨 此田地里村ニ有六ヤち、

合壹貫文

仁和田 左京助

天正二年九月是月

宮嶋五藤右衛
門尉

八百蒨同三百之發田屋敷共ニ、
合參貫八百六拾文 此内六十地畠とたりニ有、宮嶋後藤右衛門尉
(付箋) 一成海藤五郎九りさり

成海藤五郎

六百卅蒨 此内百卅蒨六百之野
同百廿之野屋敷壹間、其外地子
合貳貫三百五拾文 此内貳百卅蒨六百蒨
小作

渡邊忠左衛門尉

六百蒨同發田屋敷有、
合壹貫九百廿文 此内百蒨壹貫貳百之所
長不作、何も有安田、

安邊太郎左衛
門尉

(付箋) 安邊惣八郎分

安邊惣八郎

二百四十地野屋敷橋くニ有
五百蒨 此内貳百蒨四反之所地子や村ニ有、
其外八安田ニ有、おき田か田

合壹貫六百五拾文
(付箋) 同か、たの中使免共

仁平

百蒨さりそら
合四百文 安田ニ有

小杉次郎四郎

合壹貫文 地子屋村ニ有、
(付箋) 石塚四郎左衛門尉

石塚四郎左衛
門尉

三百蒨 大まゝ同貳百蒨せ田、
地子屋三有居屋敷一間浦ニ有、

山崎次郎右兵
衛

合壹貫五百文
貳百五十蒨 此内百蒨八か田ノ内、
合八百五拾文 此内同所ニ屋敷少有、

小池忠介

安邊惣八郎
寺社方

合貳百四拾文 野屋しき橋くニ有、
貳千五拾蒨

不動院

合九貫八百九拾文 此内八百五拾蒨三貫四百文
所、同五百之等社屋敷有、
津二有、四百五十文之地畠
屋敷同五十之く、其外は
共ニ六度瀬ニ有、其外は
しかみニ有、

大見寺

千四百蒨 此田地六度瀬ニ有、
合七貫六百文 此内五百之等社屋しき門前共ニ有、
(付箋) 大見寺

滿福寺

三百八拾蒨 此田地六度瀬ニ有、
(付箋) 滿福寺

藥師堂

四百八拾蒨 此野やしきはしかみの内有、
合貳貫百八拾文 此野やしきはしかみの内有、
(付箋) 藥師堂

善住院

百五十蒨 此田地安田ニ有、
合六百六拾文 同百之野地にて廻ニ有、
百七十蒨 此田地子屋村ニ有、
(付箋) 善住院

天神免伊勢抱

四百七十蒨
合參貫四百文 此内八百之居屋敷橋かきニ有、
同田六度瀬ニ有、
四百五十蒨
合貳貫四百文 此内百五十之野やしき共ニ此
田安田ニ有、おにし分の内、

二田大菩薩

新寺

新寺

二田大菩薩

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

新寺

貳千八百卅苜

宗壽寺

合拾參貫五百文 同寺社やしき何も田地安田ニ有 (北蒲原郡保田)

福輪寺

合壹貫五拾文 三百苜 此田地子屋ニ有

諏訪

合貳百五拾文 野地六度瀬ニ有

寶泉坊

(付箋) 一伊藤助左衛門尉給分

若宮大明神

合百拾文 野屋敷六度瀬ニ有

新福寺

(付箋) 千九百廿苜安田ニ有

道場

○合七貫六百九拾文 此内四百五十苜ノ壹貫 其内か田之内

東善寺

合九百文 此内百之野地有

永光坊

合九百五拾文 此内百五文之等屋敷共ニ、

先達免

(付箋) 一草水殿給分

日光免

(付箋) 一町屋敷分

二郎丸村

合貳百文 屋敷くほの道場

珠光院

合壹貫八百文 四百五十苜後有

忠月

合貳貫文 貳百苜地子屋ニ有

若宮

合四百文 (付箋) 一給恩

若一王子

合四貫四百文 (付箋) 一給恩

香福院

合貳貫五拾文 七百苜地子屋村ニ有

瑞泉寺

合參貫六百文 千三百五十苜地子屋村ニ有

天正二年九月是月

密藏坊

合百五拾文 野屋敷共ニ有

あかい田金六

(付箋) 一あかい田金六給分

關大夫

○合壹貫百卅文 此内貳百之野地共ニ有

ゆするき田

合六六文 長不作

あみた免

合貳百文 山のみき

入之堂

合貳百文 五十苜

常樂寺

合七百文 此内百廿苜あみた免寺屋敷共ニ、

瑞福光院

○合壹貫百文 此内貳百地寺屋敷共ニ、

觀音免

合參百四拾文 百拾束苜 此田地安田かこ田

岩瀬

合貳貫貳百文 五百苜

藏眞軒

合壹貫貳百文 (付箋) 一御不うまやうさほより

ふらい平介

(付箋) 三百苜安田之内後有

十五堂

合壹貫四百六拾文 (付箋) 一ふらい平介給恩

金藏寺

合參貫五百廿文 六百九十苜松岡村之内此内寺やしき寄開共ニ、

宮分

合貳貫九百五拾文 五百九十苜松岡村之内

白山

(付箋) 一給恩

藥師堂

合壹貫百廿文 百六十苜 (北蒲原郡) 金山村ニ有 此内五十苜三十五文五十之所、

諏訪

(付箋) 一御上納合百文

藥師堂

合五百文 居屋敷地共ニさ、ほり村ニ有

白山

(付箋) 一本間小六郎給恩

諏訪

合壹貫四百廿文 此内三百地觀音免

乘福寺

(付箋) 一同

乘福寺

合五貫六百文 八百苜 (北蒲原郡) 月岡村ニ有 此内五百之所島同、

淨福寺

(付箋) 一給恩

淨福寺

合參貫七百五拾文 六百五十苜月岡村之内、此内三百五十

圓福寺

合參貫文 四百五十苜月岡村之内此三百地寺やしき共ニ、

天正二年九月是月

密藏坊

合百五拾文 野屋敷共ニ有

あかい田金六

(付箋) 一あかい田金六給分

關大夫

○合壹貫百卅文 此内貳百之野地共ニ有

ゆするき田

合六六文 長不作

あみた免

合貳百文 山のみき

入之堂

合貳百文 五十苜

常樂寺

合七百文 此内百廿苜あみた免寺屋敷共ニ、

瑞福光院

○合壹貫百文 此内貳百地寺屋敷共ニ、

觀音免

合參百四拾文 百拾束苜 此田地安田かこ田

岩瀬

合貳貫貳百文 五百苜

藏眞軒

合壹貫貳百文 (付箋) 一御不うまやうさほより

ふらい平介

(付箋) 三百苜安田之内後有

十五堂

合壹貫四百六拾文 (付箋) 一ふらい平介給恩

金藏寺

合參貫五百廿文 六百九十苜松岡村之内此内寺やしき寄開共ニ、

宮分

合貳貫九百五拾文 五百九十苜松岡村之内

白山

(付箋) 一給恩

藥師堂

合壹貫百廿文 百六十苜 (北蒲原郡) 金山村ニ有 此内五十苜三十五文五十之所、

諏訪

(付箋) 一御上納合百文

藥師堂

合五百文 居屋敷地共ニさ、ほり村ニ有

白山

(付箋) 一本間小六郎給恩

諏訪

合壹貫四百廿文 此内三百地觀音免

乘福寺

(付箋) 一同

乘福寺

合五貫六百文 八百苜 (北蒲原郡) 月岡村ニ有 此内五百之所島同、

淨福寺

(付箋) 一給恩

淨福寺

合參貫七百五拾文 六百五十苜月岡村之内、此内三百五十

圓福寺

合參貫文 四百五十苜月岡村之内此三百地寺やしき共ニ、

天正二年九月是月

(付箋) 一給恩 六十蒨月岡村三百之所はうじやう江、免此内百地つゝの宮のやう江、 十王免

(付箋) 一給恩 千百蒨(南蒲原郡) 小栗山村二有、此内百地寺、やしき寺開同百地島共二、 不動院

合六貫六百文 小栗山上之上 不動院(南蒲原郡小栗山)

○御直納 二百七拾蒨小栗山村之内此内百地寺屋敷寺開共二、 良藏坊

合壹貫六百四拾文 三百九十蒨小栗山之内此百地寺屋敷寺開同五十地之島共二、 千手院

合貳貫六百九拾文 小栗山中 千手院

(付箋) 一給恩 小栗山下之下 〇御直納 百五十蒨小栗山之内此内百地寺屋敷寺開共二、 福長寺

合壹貫百文 小栗山上之上 福長寺

(付箋) 一給恩 〇御直納 百廿蒨小栗山之内同百地寺やしき寺開共二、 瀧覺寺

合壹貫文 瀧覺寺

玉林坊 三百卅蒨小栗山之内此内百地之寺屋敷寺開共二、 合貳貫貳百拾五文 玉林坊

(付箋) 一給恩 〇御直納 貳百八拾蒨小栗山之内此内四十地島同百地寺屋敷同五十地之野地共二、 不斷所

合貳貫拾文 小栗山上之上 不斷所

(付箋) 一給恩 〇御直納 貳百卅五束蒨小栗山之内此内百地寺屋敷寺開共二、 寶泉坊

合壹貫六百拾五文 小栗山上之上 寶泉坊

(付箋) 一給恩 〇御直納 三百卅蒨小栗山之内此内百地寺屋敷同八十地島共二、 我成寺

合貳貫四百五拾文 田地斗 我成寺

(付箋) 一給恩 〇御直納 〇、や惣三郎給恩 上之上 實相坊

合九百七拾文 齋藤三右衛門尉 實相坊

(付箋) 一給恩 〇御直納 七百廿蒨小栗山村之内此内貳百地寺屋敷寺開共二、 七所宮分

合四貫七百六拾文 七所宮分

實藤三郎左衛門尉 七所分計上 (付箋) 一給恩 齋藤三右衛門尉給恩 其身居屋敷 百文 諏訪免

三林村 百廿蒨(南蒲原郡) 三林村二有、 諏訪免

合六百元 御直納 五十蒨 瀧泉院

(付箋) 一給恩 〇御直納 合貳百五拾文 瀧泉院

瀧泉坊 御直納 御直納(南蒲原郡) 瀧泉坊二有、 諏訪免

合貳百文 御直納之分 渡邊源十郎尉 諏訪免

合五貫五百卅文 八百卅蒨此外二發田有、同貳貫島也、 直納

合拾貫文 〇合壹貫貳百六十文わらはん免島、此内七發田有、 同

〇合壹貫七百九拾文四百文發田卅文橋かミ、屋敷野地共三、 小使免

同渡邊源十郎尉 同村居屋敷三間 直納

合四貫九百八拾三文 同村居屋敷三間 直納

百姓衆 〇合五百文荷かしき免、百姓衆 百姓衆

〇合參百六拾文 同村居屋敷三間、 代官免

〇合九百七拾文 九百蒨安田 中使免

合參貫文 三百蒨 御手作

合九百文石井新右衛門尉井口文三 地子屋村直納

(付箋) 一給恩 一井口文三給恩 千蒨 代官免

合參貫文 同文三給恩 千八百九十蒨内か、田此内百蒨不作、 直納

合七貫三百四拾文 一上 直納

(付箋) 一給恩 〇合貳貫 此外二壹 四百七十蒨はゞき免、 貳

合壹貫七百六拾文 〇合貳貫 貳千八百卅蒨安田之内、 貳

(付箋) 一給恩 〇御直納 貳千八百卅蒨安田之内、 直

合拾貳貫八百七拾五文御西分 直納

貳千六百六十五束蒨二郎丸村 直納

合拾七貫卅文行方與三左衛門尉尉
 貳百四十菊
 ○合壹貫九百廿文
 百菊
 ○合八百文
 七百卅菊藤田村
 合五貫七百六拾文行方與三左衛門尉尉
 合參百文
 町屋敷五間
 ○合參百文
 同村
 居屋敷五間
 ○合六拾文
 同村
 居屋敷壹間
 四千菊神田與五右衛門尉尉
 合拾九貫參百八拾文松岡村
 四百菊同村
 ○合貳貫文
 百五十菊同松岡村
 ○合七百五拾文
 六百五十菊同松岡村
 ○合參貫貳百五拾文
 長不作
 千菊同松
 合貳拾參貫貳百五拾五文羽瀧津村二有
 (付箋)
 一〇廿×定
 合貳拾此内ニ
 三百九拾菊
 ○合貳貫文

代官免
 直官免
 中使免
 直納
 同官免
 代官免
 中使免
 直納
 代官免
 小使免
 太耶四耶名
 ふる山名之内
 直納
 代官免

五千八十菊
 ○合貳貫九百五拾文
 千九百菊同羽瀧津村
 長不作
 ○合七貫六百元
 六百菊壹貫貳百八拾文穴清水同
 六百菊壹貫貳百八拾文穴清水同
 六百菊壹貫貳百八拾文穴清水同
 六百菊壹貫貳百八拾文穴清水同
 貳千五百四十菊井口彌八郎尉
 合拾參貫九百九拾文月岡村寺内分
 貳百菊同村
 ○合壹貫貳百文
 四百廿菊同村
 ○合參貫貳百廿文此内壹貫文ハ島
 貳百四十五束菊
 ○合壹貫三百七拾五文此内百五十地屋敷壹間
 百菊
 ○合九百文此内四百之所居屋敷にカシキ免
 (北浦原郡)
 千三百五十菊渡邊源十郎尉金山村
 合九貫九百九拾文此内參貫文ハ渡邊
 七百菊同村
 ○合四貫九百文
 三百菊同村
 ○合貳貫百文
 五百菊同村
 長不作
 ○合參貫五百文
 千九百菊安田之内
 ○合四貫八百八拾文此内貳百四十地野地也
 三百菊地子屋村ニ有
 ○合四貫參百六拾文此内同も島しもくつれまニ百姓前共ニ
 壹貫之所いやしきまわり同齋藤忠右衛門尉尉

中使免
 直納
 關免
 代官免
 中使免
 小使免
 直納
 小使免
 代官免
 直納
 小使免
 石島名

(付箋) 一此外ニ壹貫百五十文石島名ヨリ相渡

(付箋) 一御不うしやうさほへ參る

千貳百菊觀音寺分
 ○合五貫參百七拾文
 (付箋) 一彦右衛門尉給分ニ成ル

觀音寺分
 ○合五貫文
 島 大新保村
 此内八百文ハ屋敷四間

觀音寺分
 ○合四貫五百五拾文此内七百之所居屋敷三間
 (付箋) 一御けいめん

御米名
 (北浦原郡安田村駒込)

合七貫四百六拾文島
 此内六百之所居屋敷三間
 三間同三百地ニシテ
 齋藤五藤右衛門尉
 同三百地屋敷同
 同三百地屋敷同

合拾壹貫五百八拾文島
 此内六百之所居屋敷三間
 三間同三百地ニシテ
 田名邊惣左衛門尉

合九百五拾文
 居屋敷九間 百中
 (付箋) 一勘の承給分ニ成ル

合參拾壹貫百八拾文
 此内拾貫文ハ
 井口分三給分

合五百文
 貳百菊同村

關免
 天正二年九月是月

にらしき免

江堀免

にらしき免

江堀免

代官免

代官免

中使免

直納

江堀免

中使免

代官免

代官免

中使免

小使免

直納

中使免

合六百文
 百廿菊同村

〇合壹貫貳百五十拾文 此外二屋敷七間
 八百石里村
 〇合六貫四百文
 三百五十石同村
 合貳貫八百文
 (付箋) (其力)
 一〇給恩具身被下
 千四百四十石同村
 〇合拾壹貫六拾文
 四百石同村
 〇合參貫貳百文
 (付箋) (其力)
 一給恩具身被下
 五十石同村
 〇合四百文
 長不作
 〇合千四百石
 同村
 千八十石同村
 〇合八貫五百六拾文
 三百石同村
 〇合貳貫四百文
 (南蒲原郡卷卷)
 貳百石(一)卷村行方與三左衛門尉尉
 〇合五貫百文 此外四貫百地負共二同居屋敷壹間
 草水殿同村二有
 合五貫文 關所
 關 免
 〇合四百文
 〇合千四百石
 〇合八貫五百六拾文
 〇合貳貫四百文
 〇合五貫百文 此外四貫百地負共二同居屋敷壹間
 草水殿同村二有
 合五貫文 關所

〔附錄〕
〔安田文書〕

知行定納之覺
 揚河化
 安田館邊
 一四十六石七斗壹升三合
 右之外
 百五拾貫之所
 同
 卅六貫文之所
 一貳拾九石八升
 右之外
 六貫五百文
 一八拾八石五斗
 右之外
 四拾六貫文之所
 一百貳石六斗三升
 右之外
 卅貳貫五百文之所
 一拾八石七斗四升四合
 右之外
 拾四貫之所
 一卅六石貳斗貳升四合
 右之外
 參拾貳貫三百文之所
 一五拾八石貳斗貳升
 右之外
 參拾貫文之所
 知行定納之覺
 (北蒲原郡) 蒲原郡揚河北
 安田館邊
 同所永不作
 河 崩
 (北蒲原郡) 草水村
 同村永不作
 (北蒲原郡) 里村
 同村永不作
 (北蒲原郡) 二耶丸村
 同村永不作
 (北蒲原郡) 同村永不作
 (北蒲原郡) 金山村
 同村永不作
 (北蒲原郡) 松岡村
 同村永不作
 (北蒲原郡) 羽根津村
 同村永不作
 同村永不作

河原田孫右兵衛名
 〇合八貫五百六拾文
 〇合貳貫四百文
 〇合五貫百文 此外四貫百地負共二同居屋敷壹間
 草水殿同村二有
 合五貫文 關所
 〇合四百文
 〇合千四百石
 〇合八貫五百六拾文
 〇合貳貫四百文
 〇合五貫百文 此外四貫百地負共二同居屋敷壹間
 草水殿同村二有
 合五貫文 關所

瀨瀧村
 同村永不作
 帶織村
 同村永不作
 同村永不作
 三林村
 葛卷村
 一拾六石壹斗貳升五合
 右之外
 參貫文之所
 一貳百六拾五石六斗五升
 右之外
 六貫五百文之所
 以上
 合千貳百六拾石四斗三升二合
 同村永不作
 (南蒲原郡) 葛卷村
 同村永不作
 (南蒲原郡) 小栗山村
 同村永不作
 同村永不作

十月 大寅 盡
壬寅 朔

一日、壬寅、謙信、復、合力トシテ、越後專念寺領新役、主役、并ニ寺家門前山屋敷等ヲ、郡司不入地ト爲ス、

〔專念寺文書〕
〇越後

爲合力寺領新役、主役、并寺家門前山屋敷等、可爲不入者也、仍執達如件、

天正二

十月朔日

(刈羽郡矢田) 專念寺

(北條) 景廣(花押)

天正二年十月一日

二五七

北條景廣 執達

天正二年十月十日

二五八

○景虎專念寺領ヲ郡司不入ノ地トナスコト、弘治三年四月七日ノ條ニ、桐澤具繁、專念寺ノ石口采女正寄進地ヲ安堵スルコト、天正十二年十一月十二日ノ條ニ見ユ、

十日、亥、辛謙信、越中館山城將若林家吉ニ、越後美守津野川水科ノ地ヲ宛行ヒ、且ツ、軍役ヲ定ム、

〔上杉年譜〕十七 天正二年冬十月十日、越中館山城ニ差置レタル若林九郎左衛門

大關彌七

一家吉軍功アルニ依テ、菜地ヲ賜フ、所謂頸城郡内、中頸郡美守肥田森村内、大關彌七分、同津野川村、

同水品村也、軍糴ノ夏、前々ハ以彼地鎗五挺召連ト雖モ、吾分ニハ四挺御宥免アリ、則

吉江織部助景資ニ命シ給フ、

覺

一 鏡 壹挺

一 大小旗 壹本

一 同腰差 壹本

一 毛糸具足

一 金之前後

以上

天正二年

十月十日

吉江

景資

吉江景資

若林九郎左衛門殿

十八日、己未謙信ノ兵、上野谷山城ヲ陷ル、北條氏政、下總古河城ニ赴援ス、是日、足利義氏コレヲ由良國繁ニ告グ、

〔松平義行所藏文書〕由良家證文之内

屬芳春院、周興北敵之模様節々言上、喜入候、然者谷山落居之由、一段無心元候、併楯籠人數

無恙之由、簡要候、氏照栗橋致在城間、北條氏政後詰之儀、無御油斷被仰出候、心安可存候、猶

替候者注進尤候、巨細芳春院可被申遣候、恐々謹言、

十月十八日

由良刑部大輔殿

義氏判

〔集古文書〕七十

急度被仰出候、然者、氏政當表へ不圖出馬候、定而干要可存候、此度罷立、一途致馳走候、

可爲御悅喜候、委細芳春院可被申遣候、恐々謹言、

天正二年十月十八日

二五九

氏照栗橋城ニ在リ

天正二年十月十九日

十月十五日

由良刑部大輔殿

義氏花押

二六〇

十九日、庚申謙信、關東ニ出陣ス、是日、春日山城武庫吏某、謙信戰陣所用ノ戎裝ヲ注記ス、

〔讀史堂古文書〕伊佐早謙氏所藏

關東御陣御立之時、具足し申御日記

疊具足

一御具足と、足とくそく、同御おひ共ニ、

一御扇うふき、

一御籠手こて、

一御喉のと輪、

一御佩はいたて、

一御扇ゑとて、同御扇とてくらとむらさき、

一御臙すねあて、

一星不しの御かふと、御うち物ハ、三足鳥うらそひの丸御めん面る頰、

一頭ぐ金御うち物ハ、無の字にて候、御半もん頰る頰、

星ノ甲
無ノ字ノ
打物

以上

天正二甲戌

十月十九日

御藏

御藏

芹澤

芹澤殿

一貳つ くるき御笠うさ、

一壹つ 御團うち扇、

以上

此ほろ十一月廿一日ニ、芹澤方より請取申候、

一壹つ あめいろの御一うさ、

一壹兩 た一とくそく、

〇謙信、八月四日ヲ以テ春日山城ヲ發セントスルコト、同月三日ノ條ニ謙信ノ

兵、北條氏ノ兵ト上野黒川谷ニ戰フコト九月五日ノ條ニ、其後謙信ハ、十月ニ至

リテ出馬セルナラン、

三十日辛未、足利義氏、謙信ノ關東出陣ヲ聞キテ未ダ確報ヲ得ズ、由良國繁ヲシテ

コレヲ探報セシム、尋デ、義氏、北條氏政ト共ニ、下總古河城ノ守備ヲ嚴ニス、

天正二年十月三十日

二六一

天正二年十一月七日

二六二

〔由良文書〕○東京帝國大學所藏

輝虎可致越山段、方々同說候歟、委細言上、實儀御不審候、雖然厩橋(上野)至于著城者、重而注進尤候、巨碎芳春院可被申遣候、恐々謹言、

十月晦日(天正二)

義氏(足利)花押

由良刑部大輔殿(國繁)

由良國繁
謙信利根
川ヲ渡リ
テ進軍ス
ルヲ義氏
ニ報ズ
十一月三
日義氏動
座

越國衆之越川付而、急度注進、委細御披見、早々申上處、一段御悅喜候、即(北條)氏政へ被仰出候、下地被及其備之間、防戰之儀、心易可存候、仍當城古河御普請爲可被仰付、去三日被移御座候、以夜繼日、被相移之間、御普請過半出來、定而肝要可存候、巨細芳春院可被申遣候、恐々謹言、

霜月八日

義氏(花押)

由良刑部大輔殿

十一月(大)壬申朔

七日(戌)是ヨリ先、北條氏政、築田政信ヲ下總關宿城ニ攻ム、謙信、コレヲ救ハントシテ、先ヅ、氏政ノ黨由良成繁ヲ上野金山城ニ攻メ、猿窪城ヲ屠リ、是日、利根

川ヲ渡リテ武藏鉢形城下及ビ忍騎西ノ領内ニ放火ス、

〔歷代古案〕○羽前

白川義親
蘆名盛氏
ト盟約ス
築田政信
氏政ニ背
ク

先度者令啓候處、具御報、誠大慶候、如露先書於自今以後者、任前々筋目、無二可申談候、御同意可爲肝要候、殊其口之儀、(蘆名)江有相談、万端任御存分候由、目出珍重候、隨而爰元之儀、築田中務大輔企逆心顯形候間、向被地二ヶ城築立候、於本意不可廻踵候、猶令期來信之時候、恐々謹言、

十月十七日(天正二)

氏政(北條)

白川殿(義親)

〔御列祖史略〕

十月築田中務大夫晴助、北條氏政ニ叛テ籠城ス、氏政怒リテ人衆ヲ率テ之ヲ攻、上杉輝虎來リテ晴助ニ加勢シ、(佐竹)義重モ兵ヲ率シ、宇都宮ヲ發シテ晴助ヲ助ケ給フ、

〔上杉家古文書〕

如芳墨、今度御越山之由、承届候間、去月以(中田駿河守)使申届候處、通路斷絶之上、于今半途有之由候、然處預御使僧候、本望之至候、然者新田金山其外悉被打散、就中猿窪地御近陣、則被責落、男女共不殘被討終之由、不始御刷不及是非候、當口様子彼口上可有之候間、令略

義重ノ使
途中ニ停
滯ス

佐竹義重
關宿ヲ援
ク

天正二年十一月七日

二六三

天正二年十一月七日

二六四

候、恐々謹言、

霜月七日

(佐竹) 義重(花押)

山内殿

御報

〔歷代古案〕^三羽前

如簡札、今度謙信、御越山之由候間、則以中田駿河守申届候所、通路不自由之上、于今半途ニ有之由候、意外之至候、結句預御使僧候、本望候、然者其口調義無紛所、被打散、就中猿窪之地被攻落之由、其聞不始御刷、不及是非候、當口様子彼口上可有之候、恐々謹言、

霜月七日

義重

北條輔廣

(輔廣) 北條安藝守殿

同 景廣

(景廣) 同 丹後守殿

〔集古文書〕^{七十}

關宿城危

南軍關宿取詰、難儀之由、注進旨、爲後詰、令越山、去七日、利根河越、鉢形城下、成田上田領

悉放火、^{〇下略、全文ハ、二十}

霜月廿四日^申

謙信(花押)

那須資胤

(資胤) 那須修理大夫殿

〔關八州古戦録〕^十 總州關宿陣事

下總國猿島郡關宿城主築田中務太輔政信、同出羽守綱政ハ、古河ノ御所義氏腹心ノ輔弼ニシテ、多年忠勤他ニ混セサリシニ、北條氏政、去年ノ夏大軍ヲ發メ下妻ノ城ヲ攻ラレシ時、後レヲ取り、退散有シヲ、築田謂甲斐ナク思ヒテ、夫ヨリ南方ノ弓矢ヲ疎ミ、佐竹義重ノ幕下トナリ、小田原へ楯ヲツクニ付テ、義氏怒ヲ含給ヒ、是歲癸酉十月、氏政及ヒ結城晴朝へ使者ヲ立テ、彼等父子ヲ追討セン事ヲ促サル、カ故、十一月初旬、氏政一萬六千餘騎ニテ小田原ヲ首途セラル、結城晴朝、并ニ千葉新助胤富カ陣代原式部少輔胤成モ出張シ、寄手彼是三萬餘騎、關宿ヲ取固メ、此城ニテ勝レタル要害ナルニ、大手ノ先陣北條陸奥守氏照、二陣ハ松田左馬介、搦手ハ結城衆、千葉勢雲霞ノ如ク楯ヲ突寄セ、関ヲ作り、弓鐵砲放シ懸テ詰寄々々戰ヲ始ム、^{〇下}

〔參考〕

〔續本朝通鑑〕^{二百} 天正元年是冬、下總關宿城主築田氏、通佐竹義重、叛北條氏政、氏

氏政戰ヲ罷メテ歸ル

政起軍攻之、千葉氏及江戸、小金、雷吸城兵皆會焉、築田部下小造氏、能戰、城兵乘勝、氏政擊却之、越後謙信援兵來救關宿、然氏政兵衛固備、城兵勢屈、氏政亦罷戰而退、

二十一日、^巳謙信、曩ニ武藏ヲ侵掠シ、直ニ北條氏政ト戰ハントセシガ、其退却ノ

天正二年十一月二十二日

二六五

報ヲ得、再ビ利根川ヲ渡リテ上野金山城ニ逼ル、時ニ關宿城ノ攻圍未ダ解ケザルヲ聞キ、下野足利・上野館林・新田領内ニ放火シ、下野多田木山ヲ經テ、是日、沼尻ニ陣ス、

〔集古文書〕一七十

略○上 直南陣可打立處、自深谷(上野)如注進者(北條)氏政敗北之由ニ候間、利根川越通、新田領令放火、向金山陣取候處、築中江申越分者、關宿取詰、凶徒不退散、由候間、足利館林・新田領悉放火、一昨廿二、古井名沼際江押下陣取、次ノ條ニ收ム、

古井名ニ陣ス

霜月廿四日刻申

那須修理大夫殿

〔宇都宮家所藏文書〕上

去十四日之以日付承分者、三日之内ニ可有向陣、由ニ候つる條、謙信事も廿日多田木山へ打著、一日休入馬、佐野・藤岡之間沼尻へ、廿二打著、次ノ條ニ收ム、

霜月廿四日申刻

佐竹次郎殿

〔由良文書〕○東京帝國大學所藏

屬芳春院懇言上喜入候、然者、輝虎赤埴陣致退散、由肝要至極候、此度敵無一功儀、其方父子備堅固申付故候、戦功之至、感恩召候、委碎芳春院可被申遣候、恐々謹言

霜月九日

由良刑部太輔殿

〔鑊阿寺文書〕○普賢院文書

御懇切示預候、祝著存迄候、如仰重而越衆赤石張陣、雖送數日候、無差儀候、可御心易候、仍有御祈念、卷數給之候、目出大慶存候、猶御祈念奉頼候、諸餘期後音候之間、不能詳候、恐々謹言、

十一月十八日

謹上 普賢院

御報

信濃守成繁(由良)花押

普賢院

謙信赤石ノ陣ヲ徹ス

北條氏ノ先鋒大藤鉢形ニ著ス

如御芳情、去以來者不申達候、輝虎赤石之地在陣、雖然別條之儀無之候、其上今朝陣拂見之申候、何方へ陣替候共、于今無其聞得候、珍說候者寶珠院可申届候、然者衆中有御祈念、信濃守所御卷數一段目出度被存候、本望之段被及御報候、將又南方御出馬近日候、既先衆大藤其外鉢形著陣候、萬吉自是可申達候條、令省略候、恐々謹言、

天正二年十一月二十二日

天正二年十一月二十四日

三六八

横瀬國廣

霜月十八日

(横瀬) 横新右

國廣(花押)

普賢院

御同宿中

二十四日、謙信關東ニ入ルヤ、常陸佐竹義重下野宇都宮廣綱那須資胤等ヲ糾合シテ、北條氏政ヲ擊破セントシ、其參陣ヲ促ス、是日、小山秀綱、築田政信ト議シ、將ニ小山ニ進軍セントシテ、義重并ニ資胤ニ戰況ヲ報ジ、復、參陣ヲ催促ス、

〔宇都宮文書〕乾 ○常陸

越府へ被相立脚力歸著、輝虎□□則越給候、本望之至候、然者倉内令著城之由、簡用候、萩原主膳當方へ參著候者、様子承届、味方中申合令出馬、萬可申合候、委曲期其節候、恐惶謹言、

(天正二) 霜月十日

(佐竹) 義重(花押)

(廣綱) 宇都宮殿

〔諸家文書〕六

楓軒文書纂五十九所收

急度令啓候、仍、自新田以使者被申越子細候、而明日十七上之川へ進馬候、於様子者、中務大輔可申届候間、不能具之候、恐々謹言、

霜月十六日

義重(花押)

(政經) 多賀谷修理亮殿

〔宇都宮家所藏文書〕上

去十四日之以日付承分者、三日之内ニ可有向陣由ニ候つる條、謙信事も廿日多田木山へ打著、一日休入馬、佐野藤岡之間、沼尻へ廿二打著、今日秀綱、築田中相招、令相談、明日者小山へ押下候、如此ニ候得者、既敵陣十四五里不足ニ打詰候、明日之内ニも一戰ハ難計、例式悠々ニ御覺悟事、口惜候、若被渡加様、之一戰ニ有見除者、佐竹名字中之後難ニも候歟、同者以夜繼日小山ニ而同陣、南衆同事ニ不被擊歟、もとろしき砌に候、猶萩原主膳可申候、萬吉令期、面候、恐々謹言、

(山崎秀仙) 猶、專柳齋可申候以上、

謙信(花押)

霜月廿四日申刻

(義重) 佐竹次郎殿

〔集古文書〕七十

南軍關宿取詰、難儀之由註進旨、爲後詰令越山、去七日、利根河越、鉢形城下、成田、上田領悉放火、直南陣可打立處、自深谷如注進者、氏政敗北之由ニ候間、利根川越通、新田領令

天正二年十一月二十四日

二六九

氏政敗北ノ報深谷ヨリ到ル

之ヲ多賀谷政經ニ報ズ

二十日多田木山著陣、二十二日沼尻ニ著陣

佐竹氏ノ後難

廣綱謙信ノ著陣ヲ義重ニ報ズ、萩原主膳宇都宮佐竹兩氏ニ使ス

謙信義重ノ參陣ヲ促ス、義重

金山城攻

天正二年十一月二十七日

二七〇

放火、向金山陣取候處、（下野）申越分者、關宿取詰、凶徒不退散、由候間、足利、館林、新田領、悉放火、一昨廿二、（越名沼）古井名沼際、江押下陣取、昨日秀綱、築中相招令談合、明日小山進陣候、左様ニ候得者、敵陣十五里不足ニ候條、明日之一戰難斗候間、片時も早々被打越、有同陣、御稼簡要候、萬吉重而恐々謹言、

霜月廿四日

那須修理大夫殿

謙信（花押）

二十七日、（戊）謙信、關宿ノ危急ヲ憂ヒ、萩原主膳亮及ビ山崎秀仙ヲシテ、復、佐竹義重ノ參陣ヲ促サシム、

〔上杉家古文書〕

使者（ノ）訓令

關宿ノ滅亡ニ三日ニ過ル

昨日廿六之日附之書中、今曉坂本陣よて披見、自以、前今日ニ三宮江義□□□□□□
□□雖然誓詞互ニ不澄候者、同陣難有由候歟、（山崎秀仙）專柳ニ越候誓詞者、先謙信前義重□□
□□疑心有之□□□□陣々さへ、早々被爲候へ者、其上如何様にも如望誓詞可申候處、（宇都宮）自宮□□長ニ使被越候半之沙汰之與候へ者、其内ニ關宿落居、勞而無功事ニ候、昨晚自關宿、忍被越候飛脚、如才覺者、二三日之内ニ滅亡之由候、敵も後詰爲之内、與心得候歟、頼りもとて候、殊ニ城中ニ玉藥無之、時刻を待之由申候、如何様にも、義重一日片

義重家中ノ狐疑

義重ノ參陣ナキ場合ノ處置

關宿陷レバ小山宇都宮危ク、佐竹氏亦安カラズ、太田資正父子ノ越

時も被急有、同陣、南衆押拂、（築田八郎）築八被引助候へ、ウしと申事ニ候、抑、敵（を）お見懸、如何様之謙信、信ぢうものニ候共、争而味方之内にて、義重與謙信無分公事を可申候哉、一點毛頭表裏惡事無心ニ候處、色々ニ義重家中衆、謙信疑心候事、誠ニ天魔之執行歟、此儘關東之諸士、可沉果隨想歟、築八滅亡之基歟、（竟）境敵之被乘計儀之事、無念迄候、此段、（佐竹義斯）佐左、（同義久）中、（梶原政景）梶源、梅江齋小佐にも可申候、余關宿無心元、八郎方劬勞不敏ニ候間、明日とも沼進陣、依様躰可及仕敢覺悟候、如先年佐野陣之様ニ、とても同陣於有之間敷者、早々聞切、兩人者可越候、越衆計ニ而何共可擬候、分理誓詞成之申候へ共、無同陣候間、何共精も盡可申様無之候、扱々謙信爲無越山、義重手前計へ懸る儀ニ見候、如何可有之候哉、謙信弓箭與計被思候者、向後可見得候、謙信事者、擊安國於擊、其上此口おも可心懸候、左様ニ候者、其内ニ築中父子者不及申、小山宇都宮滅亡、其時者、佐竹之家中公事之沙汰も□□被開間敷候、其時者、（太田資正）太美父子もさけ頸ニ可成候、築中進退於其□之衆人□□口惜候、全笑止候間、申候、早々返事待入候、萬吉々々、謹言、
尚々申候、加様ニ申候も、佐竹謙信同陣申候へ者、向後も可有斯興、敵味方之唱も候へ者、則味方中之成備も、此度之凶徒おも、安々興擊得爲、可歡喜候、謙信初陣少々無

天正二年十一月二十七日

二七一

被渡候、□□

天正二年閏十一月七日

霜月廿七日 刻

謙信(花押)

二七一

萩原主膳亮殿

(山崎秀仙)

柳 齋

〔佐竹文書〕

一坤

如啓先書、廿九宮於(宇都宮)被打立、明日之内ニ可有同陣、由令歡喜候、然而以前進候誓詞血判

望之由候間、梶源河井備前守陣下江招速血判申候、此上一刻片時も被相急專肝候、幾

度如申、關宿時刻お待躰ニ候、今日も足輕お遣及箭師候、有御油斷者不可然候、猶重而

以專柳齋申候間、巨細不及申候、恐々謹言、

(山崎秀仙)

霜月廿九日

謙信(花押)

佐竹次郎殿

閏十一月

壬寅朔

七日、申、戊白川義親、使ヲ謙信ニ遣シ、蘆名・佐竹兩氏ト和睦セントスルヲ告グ、是

日、謙信コレニ答フ、

〔大森氏所藏文書〕

〇楓軒文書纂 九十三所收

今度謙信向此國ニ出馬、并會津・白川・佐竹御一和之儀ニ付而、御使僧喜悅之由候、彼御(後力)

詰之儀、大方佐江被申届於御理者、直書被露候旨、可得其意候、恐々謹言、

山吉孫次郎

豐守(花押)

山吉豐守

壬霜月七日

(義親)
白川江

十日、亥、辛結城晴朝、謙信ニ背キテ北條氏ニ應ズ、是日、下總關宿攻圍ノ將北條氏照

コレニ答謝ス、

〔聽濤閣集古文書〕

〇越後

九日之御狀十日未刻參著令披見候、越關陣之模様蒙仰候、被得其意候、於當陣者無二

一戰ニ落著、關宿相守之上、敵如何様之(行カ)有之共、不相驚候、可御心安候、定而越關一途

之行可有之候、覺語之前存候、御用向之義候者幾回も可蒙仰候、不可存無沙汰候、兼又、

敵陣へ被立置御人數被相引之由、一段無御心元存候、越國衆越河歟、新田口へ就□□

者無二一行覺語之前ニ諸人存詰候、案外之無衆與御心得候、恐々謹言、

(北條)
源三

閏十一月十日

氏照(花押)

(晴朝)
結城江

御報

天正二年閏十一月十日

二七三

晴朝越後
軍参加ノ
兵ヲ撤退
ス

十九日、戊壬謙信、佐竹義重ト下野小山ニ會見シ、北條氏政ト戰ハントス、議協ハズ、因リテ關宿城ノ救援ヲ義重ニ一任シ、武藏羽生城ヲ破却シテ、下總古河城下ヲ經、武藏騎西城等ニ放火シテ、是日、軍ヲ上野厩橋城ニ班エシ、尋デ、越後ニ歸ル、

〔名將之消息錄〕

謙信戰況ヲ藪名盛氏ニ報ズ
此度令越山、越利根川、付北條氏邦在城鉢形、始宿城、松山、成田、忍城、深谷城等悉城下迄、燒拂、河内江引越、(由良成繁)橫瀬在城之向金山陣取候處、(北條)氏政關宿付而義重同陣有之、可令相談、由候間、始金山足利、佐野數ヶ所之敵地押通、令放火、小山迄打下候處、義重如兼約、同陣有之、相談候條、則敵陣江押懸、可決勝負處、敵搆陣城、扉門以下迄成之候條、其上利根隔、大河候間、義重同心、可被爲越河、由雖申斷、例式之家中表裏者共ニ候間、搆依估計、謙信不被任意見候間、謙信存分ニ者、所詮關宿之儀者、義重相任候、殊年若與云、謙信愚意、不被畏候條、謙信者可爲各別之弓箭、由申斷候處、關宿之儀者可任義重、由候間、謙信者獨立、(足利)義氏様御座所古河、并南衆抱候栗橋、同館林、四五ヶ所之敵城押通、重而利根越河、始寄、(騎)西城、少輔城岩付等悉武州敵地放火成、壘候、武州總州境、羽生之地、謙信守手前ハ、内々雖爲可申付、(候カ)由能々見届候ニ、第一淺地自味方百里内ニ無之候條、守手前者、不見功所差置、徒ニ可爲滅亡儀、不便候間、從類千餘人引取、羽生之地者、越衆諸勢申付、令破却

羽生ノ將卒ヲ新田付近ニ移シテ金山城ノ攻撃ニ充ツ
謙信敵地ヲ押歩クコト四十餘日旗ヲ合スル敵兵ナシ
源翁派ノ使僧ヲ謙信ニ遣ス

十九日、至于當厩橋城、先令歸馬候、羽生之者共、(心)於、則向新田、構城郭、可差置候、扱又、武藏上野下野、余于四十日、雖押歩候、終ニ昨日迄合、(旗)幡敵無之候、殊ニ南衆陣城之外、一騎一人不乘出儀、有其隱間敷候、定而連々謙信動之様ニ可聞得候、隨而白川、佐竹無事之儀不及承候、涯分春以來入精、雖申届、朝夕義重被申處變候、而實所無之候、義重者若被涉候間、有表裏間敷候、歟、併家中持ニ候間、家中之表裏難盡筆頭候間、謙信不申届様無之候、其(心)お者過御校量間敷候、猶重而置談候者、歸路之時分聞届、自是可申候、然者源翁派之義、自(會津)溫鹽之使僧謙信兩寺江申届候様體、重而可有才覺候間、不能重意候、恐々謹言、

(天正二)閏霜月廿日

謙信

蘆名修理大夫殿

〔安得虎子〕十

輝虎敗北、剩羽生自落、并關宿も明日出城ニ落著、無殘所、遂本意候間、御大慶察存候、隨而從佐竹申旨候間、先遂一和一昨申刻、彼陣退散候、委曲追而可申候、恐々謹言、

閏十一月十八日

(北條)氏政(花押)

天正二年閏十一月十九日

二七五

佐竹ノ仲介ニテ關宿開城ニ決シ氏政退軍ス

天正二年閏十一月十九日

小田殿

〔由良文書〕

○東京帝國大學所藏

内々以御使節可被仰出由思召候處、遮而以代官懇言上喜入候、去比者古河之地無心元之段、節々言上御感悅候、抑此度〔北條〕氏政關宿被取詰候處、輝虎義重相談、雖及後詰候陣中備堅固故、失利退散、羽生地引明敗北、剩佐竹宇都宮令懇望、關宿出城、併關東御靜謐之基候、定肝要可心安由、御識察候、仍一荷三種到來、目出度候、恐々謹言、

閏霜月廿五日

義氏〔足利〕花押

由良刑部太輔殿

〔安得虎子〕

十

此度輝虎出張付而、古河御籠城、不取敢馳參條、忠信之至、感思召候、仍官途之事申上候、御意得候、謹言、

十二月十日

足利義氏〔花押〕

澁垂修理亮殿

〔包紙〕澁垂修理亮殿

義氏

〔伊達家文書〕

御日日記○伊達輝宗日記

天正二年壬霜月二日、天きよし、又ふる、そゝろも合候、輝虎、佐野へ進陣のよし、小關所より到來候、

〔参考〕

〔北越軍記〕

四下

天正元年、其秋、古河義氏公御家老、築田中書逆心、宇都宮貞林下申合、關宿城ニ楯籠候ニ付、北條氏政、四萬ニテ出張、關宿城ヲ被攻候、宇都宮ヨリ佐竹義重へ加勢ヲ乞ニ付、義重、小山迄出張、其砌謙信ハ、北武藏松山鉢形宿成田深谷ノ城下、燒拂、川内へ引越、横瀬上野介カ居城、金山ニ向テ陣取被申候所へ、義重ヨリ注進ニ付、金山、足利、佐野數ヶ所ヲ〔御カ〕法働候テ推通、小山ニ著、義重ト對面アリ、氏政ハ陣城ノ構、塀門丈夫ナルニ付、申合、利根川ヲ越、氏政ヲ可攻討旨頻ニ被勸候へ、義重同心無之ニ付、謙信、無興致、左候ハハ、義重ト輝虎ハ引分レ、各別ノ弓箭ニ可仕トテ、小山ヲ引拂、古河、栗橋、館林ノ城下ヲ攻通リ、利根川ヲ越、奇別〔驛西〕、菖蒲岩、槻城下ヲ不殘燒拂、前後四十日餘、四方ヲ働候へ共、氏政方皆城々ニ引籠、謙信旗先ヲ怖テ不出合、下總境羽生城ニハ、木戸玄齋、川田軍兵衛、數年被指置候へ、是ヲ引取、新田ニ向テ城ヲ取立被入置候、霜月十九日ニ、厩橋迄馬入候、佐竹義重不相叶、早々退散也、謙信ハ、霜月下旬ニ越府へ歸

天正二年閏十一月十九日

築田晴助
義氏ニ背
キテ關宿
ニ籠城ス

由良國繁
酒肴ヲ義
氏ニ贈リ
テ謙信ノ
退軍ヲ祝
ス

義氏澁垂
修理亮ノ
古河籠城
ノ功ヲ褒
シ官途ヲ
約ス

天正二年閏十一月十九日

陣ナリ、關宿城築田ハ降參シ、靜謐、

〔常陸誌料〕 佐竹氏譜

氏政晴助
ヲ攻ム

北條氏政將兵一萬六千餘騎、攻〔築〕梁田〔晴下同〕持助、關宿城、先是義重遣根本忠晴〔太〕、木造清左衛

門、木造傳吉近見新六郎〔並名〕、等二百餘騎、援持助、入城守之、氏政部將大石越後守、師岡

山城守、御宿越前守、松田六郎左衛門〔並名〕、等薄壁、忠晴等防戰疲退、〔小田原記〕持助乞援

謙信、廣綱〔字都宮〕、謙信出兵上野倉内、遣萩原主膳〔名〕、趣義重、廣綱〔那須文書〕、〔字都宮〕、廿四

日、謙信、再遣主膳及書生專柳齋常陸、遣書義重、出兵、書辭頗激勵、蓋怒遲延也、〔字都宮〕、廿

五日、謙信、遷營小山〔字都宮〕、義重往會之、〔北越軍記〕

〔北越家書〕 天正二年、是歲、足利右兵衛佐義氏ノ宿老、梁田中務太輔政信、同出羽守

綱政父子、叛心シテ、佐竹義重ト合躰シ、古河ノ御所ヲ沒倒セント欲スルノ由、巷説ア

ルニ付テ、十月下旬、北條氏政一萬六千餘ヲ率シ、總州ヘ打入テ、世喜宿ノ城ヲ圍マル、

大手ハ陸奥守氏照、搦手ハ新四郎氏忠先陣タリ、當城ニ方ニ大河ヲ抱タレハ、遠山左

衛門佐直政、多米周防守長宗、千葉次郎胤宗、船ニ取乗テ河水ニ浮ミ、三隊ニ分テ押寄、

関ヲ作リ懸テ、喚キ叫テ攻劫カス、中ニモ大手ノ攻口危急ナリシニ、根本太郎忠治〔後小

野崎筑前守、秀景ト號ス、木造清左衛門、二百餘騎ニテ突出、松田尾張守村秀、山岡豊前守政齋カ備

氏政關宿
城ヲ攻圍
ス

再ビ萩原
及ビ專柳
齋ヲ義重
ニ遣ス

ヲ追崩ス、陸奥守入替テ力戰シ、城兵疲テ引退ク、南方ノ津野戸半右衛門、并ニ清水藤

五郎ト云、若黨、付入ニセントヤ思ヒケン、追番フテ來リケルカ、門役ノ有志下知シテ、

城戸ヲ隼ク閉タリケレハ、透サス堀ヘ乗上リ、大音ニ姓名ヲ名乗、氏照是ヲ見テ津野

戸討スナ、駟ヨ者共ト、麾打揮テ高ラカニ呼リケレハ、四五百人混々ト門堀ニ付テ押

破ントヒシメク處ヲ、城兵矢炮ヲ飛セテ、寄手若干命ヲ殞シ、日モ夕陽ニ向ヒタレハ、

後陣ヨリ揚貝吹テ、總勢ヲ引取タリ、此砌、川筋ニテモ、千葉次郎胤宗、堀下ヘ船ヲ盪ツ

テ乘揚、義勢ヲナス、大手搦手ノ戰ハ、既ニ終テ、南方衆殘ナク引拂タル時節ナレハ、城

兵拒クニ便ヲ得テ、弓鎗炮雨電ノ如ク、放シ掛ル程ニ、千葉次郎矢ニ中ツテ、堀ヨリ眞

倒ニ成テ、城内ヘ落ケルヲ、菊間圖書助分捕ス、胤宗ハ千葉ノ庶流タリ、故有テ總州ノ

本領ヲ放レ、氏政ニ仕ヘテ、武州石濱ト云處ヲ知行シ、數年ヲ歴ケルカ、此戰ニ討死シ

テ、而モ嗣ナカリシカハ、北條常陸介氏繁ノ三男、其一迹ヲ受テ、千葉次郎胤宗ト稱シ、

家僕ヲモ元ノ如ク直ニ進止シケルトソ、斯テ胤宗討死ノ後ハ、寄手遠卷シテ急ニ攻

ム、梁田モ佐竹ヘ密使ヲ遣シ、後攻ヲ乞、義重内々武州總劬ノ間ヘ咬入ンコヲ欲シ、變

ヲ伺折柄ナレハ、得タリトシテ、速ニ出馬、宇都宮彌三郎廣綱ハ、聳タルヲ以テ、義重ノ

牒ヲ受テ、是モ全ク軍ヲ出ス、義重進テ武州ノ地ニ帥シ、古河城ヲ援ンノ志アリトイ

晴助援ヲ
義重ニ求
ム

天正二年閏十一月十九日

天正二年閏十一月二十四日

二八〇

廣綱義重
ト軍ヲ合
ス

義重金山
城ヲ攻メ
取ラント
ス

へ共當時越相無事ニシテ、兩家幕下ノ輩左右前後ニ充滿タレハ、深働ニ於テ氣遣ナ
キニアラス、爰ニ金山ノ由良刑部入道宗得、同信濃守國繁、近年古河ノ義氏ニ從ヒ、越
後へ手切シテ沼田、厩橋ト取合半ナル故、義重思案ヲ廻シ、皆川山城守廣照、佐野小太
郎宗綱、成田左馬助氏長カ許へ使札ヲ送り、金澤城ヲ攻捕ン調義ヲ示ス、佐竹ハ從來
輝虎公入魂ナレハ、件ノ諸將最ト同シ、カヲ合センコトヲ約ス、
二十四日、謙信書ヲ宇都宮廣綱ニ遺リ、佐竹義重ニ對シテ計ヲ失スルヲ悔ヒ、
警備ヲ嚴ニセンコトヲ望ム、

〔奈良文書〕〇羽後

返々、卷のくちて、發のむう里にのら終候ハ、としわ(綿)とよてく(首)びをまめへく候
り、女(女儀)ニ御入候とも、御ふん(分)る(別)候へく候、又(遠)路(小)給(重)一し(視)不ゆ
まい入(積)り、以上、
此(佐竹)のよし重(積)を利(リ)ち(違)む(只)い(含)ま(後)こ(悔)う(悔)く(悔)井候、さりち(精)い(精)よ(精)く
うちか(繼)ま(繼)し(繼)爰よし、夢ん信を同意(精)り(精)た(精)を(精)ひ(精)り(精)、せ(精)う(精)も(精)よ(精)爰(精)や(精)う(精)り(精)せ(精)い(精)を
御入もつとも思(精)ひ(精)り(精)、めて(精)と(精)く(精)り(精)しく、

閏霜月廿四日

夢ん信(花押)

廣綱御局

〔表書〕(宇都宮) 中
は(不)な(信)

夢ん信

越(越)つ(越)ち(越)ん(越)より

十二月 辛未朔

十六日、辛巳築田政信、下總關宿城ヲ出テ、水海道ニ入り、是日、北條氏政ト要約ヲ
締結ス、

〔築田文書〕〇上杉輝虎
公記所收

大和丸

右當郷之百姓無異儀可致歸住、自今以後横合非分不有之、桮竹木等も一切不可切、自
然關宿之城用所之儀有之者、直々(北條氏ノ印判)以(下總)虎御判、水海へ可令所理、猶向後假初(北條氏)ニも狼藉有
之者、百姓不及用捨、可捧自安、嚴密ニ遂糺明、背掟輩可處嚴科者也、仍如件、

甲戌 朱印

十二月十一日

源三奉之

築田殿

天正二年十二月十六日

二八一

大和田
虎御判ヲ
以テ處理
ス

氏政義氏
ニ請フテ
築田氏ヲ
赦ス

天正二年十二月十六日

二八二

一古河様へ御赦免之儀、以前雖申上候、御鬱憤之旨深被仰出候條、其後思慮重而一昨日以源三(氏照)申上候、依之無御別條旨御書被下候間、則進候、珍重候事、
付、以代官早々有言上可然事、

一爰元明隙候間、先令歸陣事、

一自今以後之儀、無二可爲入魂由、源三申候、正理至于明白者、爲如何氏政表裏之扱可有之候、元來更何之遺恨可有之候、假令至于時敵對上者、古今之弓矢如此候、扱又向後盡未來、至于被顯可被相談色者、何分ニも於氏政者、任御望懇切可申事以上、

極月十六日

(北條氏政)
朱印

(政信)
築田八郎殿

〔由良文書〕○東京帝國大學所藏

態以使節被仰出候、然者北畝出張付而、古河御仕置無心元之段、節々言上御感悅候、此度關宿被遂御本意候條、定肝要可存候、輝虎無其曲、敗北之間、其口之儀、彌以可心安候、委細町野備中守口上被仰含候、恐々謹言、

極月十八日

(足利)
義氏(花押)

(國繁)
由良刑部太輔殿

十九日(己丑)、謙信、髮ヲ剃リテ、紀伊高野山ノ僧清胤ヲ師トシ、護摩灌頂ヲ執行シテ、法印大和尚ト爲ル、

〔上杉文書〕○羽前

○上 殊去年極月十九日、令發體、遂沙門以來、護摩灌頂迄執行、既任法印大和尚、○下略、全文ハ、三年四月二十四日ノ條ニ收ム、

天正參年乙亥

法印大和尚不識院

卯月廿四日

謙信

御寶前

〔高野山文書〕○紀伊無量光院

態令啓札候、仍、太守謙信、依年來之御宿望、去年(二年)被成御法躰、愚僧與師弟之御契約、四度傳法之儀式、如法被相遂、永宗門之制、誠不可有違犯之旨、御誓詞嚴重候、○下略、全文ハ、三年六月五日ノ條ニ收ム、

寶幢寺

清胤(花押)

(天正三)
六月五日

寶性院
御同宿中

天正二年十二月十九日

二八三

謙信法體
トナル

法印大和
尚不識院
謙信

四度傳法
ノ儀ヲ修
了ス

天正二年十二月十九日

〔上杉古文書〕十羽前

上杉様御代々御位牌御法名

權大僧都
謙信法印

〔上杉家譜〕

輝虎初景虎
政虎

輝虎千代 平三 彈正少弼 宗心 謙信略○中 天正二年十二月十九日、剃髮、護摩灌

頂シ、法印大和尚ニ任ス、

〔上杉年譜〕十七

天正二年冬十二月十九日、管領御剃髮、護摩灌頂御執行有テ、法印大和尚ニ任セララル、

〔參考〕

〔上杉年譜〕十九

天正四年丙子春正月、高野山紀伊無量光院ノ住持清胤法印、越府ニ下著ス、清胤ハ、當時一山ノ碩學英衲ナレハ、管領モ尊崇景慕シ玉ヒ、使介ヲ登山セシム、去ル永祿ノ初年、山ヲ超、水ヲ涉リ、越府ニ請招有テ御馳走アリ、依之眞言秘密ノ法ニ歸依シ玉ヒ、禪機法流モ又忘リ玉ス、此故ニ、林泉寺ニ於テモ御懇篤淺カラス、國中ノ諸寺其宗ニ付テ崇仰ナシ玉ヘハ、闔境ノ寺院モ、我法ヲ精勤シテ、自然ト法流繁昌セ

無量光院
ノ僧清胤
來越ス

清胤ヲ寶
幢寺ニ假
住セシム

謙信清胤
ヲ師トシ
テ密教ヲ
修ム

リ、清胤ヲハ寶幢寺ニ假リニ住居ナサシメ、眞言ノ法ヲ授受シ玉フ、故、越府ニ留滯アリ、然レ共、當時碩學ノ僧ニテ、長ク高野ヲハナレ、越國ノ居住ナリカタシ、御傳法事終テ法印ハ歸山ノ暇ヲ請ヒ、歸寺セラル、然ル處ニ、又去歲十月下旬、俄ニ高野山ニ御使ヲ遣サレ、當春ニ至リ、清胤ノ下山ヲ願ヒ玉フ、流石ニ年來ノ御歸依イナミ難ク、止事ヲ不得シテ下著セリ、一日、清胤ヲ召テ秘密ノ印明ヲ問答シ玉フ、猶御骨髓ニ徹透シ、彌此法ヲ無二景仰有テ、秘密藏ヲ悉ク傳ヘント玉フ、清胤ノ云、出家受戒ノ身ニアラスンハ、凡俗ニ授ル事アタハス、又是ヲ傳フヘカラス、管領ノ云、誠ニ清胤ノ一語尤道理セリ、サレトモ、我戒律ヲタモタサルニハ非ス、素ヨリ佛道ニ他念ナク歸依スル上ハ、ナトカ非義ノ殺生ヲナスヘキヤ、往年越中ニ出馬シ、神保越中守ト鋒ヲ争ヒシモ、我私ニ非ス、松倉城主椎名肥前守ニ頼マレ、其上縁者タルニ依テ也、然ルニ椎名此厚恩ヲ忘レ、神保ト和睦シ、剩ヘ信玄ニ屬シ、我ニ對行スレハ、其罪甚以テ輕カラス、此故ニ彼地ニ働キ、居城ハカリヲ攻メ敗リ、一命ハ赦免ス、我所々ニ出張ストイヘトモ、其城地ヲ乗下ルハカリニテ、猥リニ敵兵ヲ害スル事ナシ、信州ニ出馬スルモ、小笠原村上等ニ頼レ、義理ノ戰ナレハ、信玄ト防戰ス、關左八州ニ働トイヘトモ、憲政ニ頼レ、北條氏康ト合戰ス、關左信州ノ内、攻取トイヘトモ、聊欲心ニアラス、悉ク先方忠信ノ

天正二年十二月十九日

阿闍梨權
大僧都法
印
大乘寺ニ
護摩ヲ修
ス
戰死者ヲ
弔フ

諸士ニ分チ與フ、只凶徒ヲ平ケ、神社佛閣ヲ修補セント也、此外別ニ他事ナシ、我若年ヨリ煩惱ノ意念ヲハナレ、戰場ニノソムトイヘトモ、更ニ表裏ヲ以テ人ヲ殺サス、況ヤ酒飲ニ沈溺シ、法儀ヲミタス事有ンヤ、然ルトキハ、爭カ几流ノ將士ト肩ヲヒトシフセシヤト、形氣憤恚増々テ、其跡近ツキ奉ルヘキヤウナシ、サレ共清胤少モ屈セス、更ニ傳授ノ體ナシ、幾程ナク阿闍梨ノ職位ヲ得玉ヒ、權大僧都法印ト號シ奉ル、夫佛ハ清淨慈悲ニシテ、事々物々ヲ救ヒ玉フ、管領今此道理ニ徹シ玉フニヨリ、彌人民ヲ憐ミ、廉直ヲ旨トセリ、依之城内北ノ丸大乘寺ニ於テ、平生護摩ヲ修シ、武運長久ノ御祈禱アリ、又寶幢寺、至德寺、林泉寺、轉輪寺、廣泰寺ニ於テ、七月十四、十五ノ兩日、金銀米穀ヲ遣シ、施餓鬼ヲ仰付ラレ、國々所々ニ於テ、戰死セシ諸軍ノ亡魂ヲ弔ハセ玉フ、諸人拜感ノ涙ヲ流シケリ、○清胤、來越ノ年次ニ疑アリ、又謙信ト清胤トノ問答ニ信ヲ置キ難キモ、姑ク茲ニ附收シテ參考トナス、

天正三年乙亥
正月 大辛丑朔

十一日、辛亥謙信、義子喜平次顯景ニ加冠シ、諱ヲ景勝ト改メ、上杉彈正少弼ト稱セシム、

〔上杉文書〕一 初前

吉日ヲ選
ビテ加冠
ス
官職ノ由
緒

撰吉日良辰、改名字、官途上相彈正少弼與成之候、彼官途者、先公方様(足利義輝)江深忠信之心馳依有之、被仰立被下候條、不安可被思事、目出度候、恐々謹言、

正月拾一日

謙信(花押)

長尾喜平次殿

改名

任今日吉日、改名乘景勝與可、然候、恐々謹言、

正月拾一日

謙信(花押)

上相彈正少弼殿

景勝普光
寺ノ賀狀
ニ答フ

〔浦佐普光寺文書〕○越

御懇札具令披見候、隨而今度從上様御幕ふと被下、官途させられ候、就之祝儀之趣、祝著之至候、殊卷數守送給候、畏悦之式候、諸餘令期永日之時候、恐々謹言、

少弼

貳月四日

景勝(花押)

普光寺

〔上杉年譜〕十九

天正四年丙子春正月十一日、景勝公ニ、上杉ノ御名字ヲ讓ラレ、彈

天正三年正月十一日

天正三年正月十一日

二八八

正少弼ト號ス、御家督ノ御底蓋ナルヘシ、其御書曰、○書前掲ニ付キ略ス、
〔上杉年譜〕二十 天正四年丙子春正月十一日、喜平次殿二十二歳ノ御時、謙信公ヨリ今日御書ヲ以テ姓名ヲ改メ、自今ハ上杉彈正大弼景勝ト稱スヘキトナリ、其御書云、
○書前掲ニ付キ略ス、

系圖

〔上杉家譜〕

輝虎

景勝 初顯景

卯松

卯松 喜平次 彈正少弼

實ハ、越後上田城主長尾越前守政景永祿四年七月五日、野尻池ニ卒、三十九、二男、母ハ長尾信濃守爲景女、慶長十四年二月十五日、米澤ニ卒、弘治元年十一月廿七日、越後上田城ニ生ル、永祿二年、輝虎ノ養子トナル、五月十一日元服シ、喜平次ト稱ス、天正四年正月十一日、彈正少弼景勝ト稱ス、同六年三月相續、○下略

○上杉年譜及ビ家譜ハ、本條ヲ以テ四年ニ係クルモ、本年二月九日、吉江資堅ニ送ル書ニ、景勝ノ署名アルヲ以テ、今コレヲ本條ニ係グ、

〔附録〕

〔上杉文書〕

○羽前

追而、此書中、大和守所ヘ届可給候、以上、

重而懇比ニ申越候、入心候、心馳難申盡候、山吉(豐守)はしめ身之案候ニ、一度も飛脚不越候

ニ、兩度誠喜悅候、其元留守中簡要ニ候間、返々各其元ニ差置同時ニ備可申付候、爰許之義者案間敷候、以上、

九月廿七日

謙信(花押)

長尾喜平次殿○以下四通、年次詳ナズ、姑ク茲ニ附收ス、

猶々、一左右可申候、其時分待入候、身之者共其元ヘ差越、無人候間、其方者共ニ陣之番申付、晝夜辛勞申候、如何様見參之折節禮を可申候、以上、
細々入心人給候、心馳喜入候、殊從余方增人數多差越候、人目與申、肝要ニ候、如何様其口聞合、可及御左右候、其時分身之者共召連、著陣可爲目出候、以上、

十月三日

謙信(花押)

〔附箋〕
謙信ヨリ景勝ヘノ書狀

天正三年正月十一日

二八九

謙信景勝ノ懇切ヲ悦ビ情意懇歎

景勝信濃
堺ヲ守ル

天正三年二月九日

二九〇

入心細々音信喜入候、隨而爰元さへ雪斷而降候間、信州境定而可爲深雪候條、身之馬廻召連、早々可被越候、爰元者彌可然候、此義老母江可申候、以上、

十月十日

謙信(花押)

喜平次殿

其許雪降候由、注進細々入心大慶候、爰元も雪降申候、依之馬廻之者召連可被越由、先書ニ申候キ、定而此飛脚道ニ而可調候得共、返事申候、被越候者、前へ飛脚を可被越候、迎を可出候、萬吉令期、面候、謹言、

追而申候、爰元ニ而も、上鷹志い入させ申候、た不鷹も志うとけ申候、御越候者ウシ可申候、以上、

十月十二日

謙信(花押)

喜平次殿

二月辛未朔

九日、卯、己上杉景勝、吉江資堅ノ軍役ヲ定ム、

〔吉江文書〕前〇羽

四十騎 甲、打物、(籠手)腰(差)、

馬上

四十人 甲、打物、こて、こしさし、

手明

貳十五本

大小旗

二十丁ウリウキ、こしさし、

鐵炮

貳百五十丁

鎧

天正三年

二月九日

景勝(花押)

吉江喜四郎殿

〔参考〕

系圖

〔吉江系圖〕

甘粕繼成編

景宗

文明十年五月生 上野介

織部佐

松千代

宗信

永正二年生 童名與桶

改木工助略中

信清

(堅)誤カ

資賢

後信景 爲公龍臣

江州住人

天正十年六月三日

命來

越後嗣信

清跡

四十五號喜四郎

景資 初與桶 後織部佐

天正三年二月九日

二九一

信清養嗣
子
後信景ト
改ム

十六日、丙戌謙信部下諸將ノ軍役ヲ定ム、
〔天正三年軍役帳〕○羽前

景勝

御軍役張(帳)
御中城様(景勝)

貳百五拾丁

鐵鑓

上杉景信

(上杉景信)
十郎殿

四拾人手、甲、打物、籠

手明

五拾四丁

鐵鑓

貳拾丁笠、腰指、

鐵炮

拾人手、甲、打物、籠

手明

貳拾五本

大小旗

四丁笠、腰指、

鐵炮

四拾騎手、甲、打物、籠

馬上

五本

大小旗

以上

八騎手、甲、打物、籠

馬上

村上國清

(村上國清)
山浦殿

百七拾丁

鐵鑓

上條政繁

(政繁)
上條殿

貳拾人手、甲、打物、籠

手明

六拾參丁

鐵鑓

貳拾五丁笠、腰指、此內弓五張、

鐵炮

拾五人手、甲、打物、籠

手明

拾五本

大小旗

貳丁笠、腰指、

鐵炮

六本

大小旗

六騎手、甲、打物、籠

馬上

拾騎手、甲、打物、籠

馬上

中條景泰

(景泰)
中條與次

以上

八拾丁

鐵鑓

琵琶嶋彌七郎

(琵琶嶋)
彌七郎殿

百六丁

鐵鑓

貳拾人手、甲、打物、籠

手明

拾五人手、甲、打物、籠

手明

拾丁笠、腰指、

鐵炮

拾丁笠、腰指、

鐵炮

拾拾本此內貳本は御張之外、

大小旗

拾本

大小旗

拾五騎手、甲、打物、籠

馬上

拾五騎手、甲、打物、籠

馬上

以上

黑川清實

(清實)
黑川四郎次郎

山本寺定長

(定長)
山本寺殿

五拾丁

鐵鑓

九拾八丁

鐵鑓

拾人手、甲、打物、籠

手明

拾五人手、甲、打物、籠

手明

貳丁笠、腰指、

鐵炮

拾丁笠、腰指、

鐵炮

參本

大小旗

拾本

大小旗

天正三年二月十六日

二九三

天正三年二月十六日

土澤

以上
同心
土澤初○以下六年行天正
=記年、役帳付箋

貳拾七丁
鐵炮

壹丁笠、腰指、
鐵炮

壹本
大小旗

貳騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

自同心共
合百貳拾五丁
鐵炮

拾壹丁
鐵炮

拾壹本
大小旗

拾七騎
馬上

以上

色部顯長

色部(顯長)
彌三郎

百六拾丁
鐵炮

貳拾人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

二九四

拾貳丁笠、腰指、
鐵炮

拾五本
大小旗

貳拾騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

拾五人以上

五拾八丁
鐵炮

拾人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

五丁笠、腰指、
鐵炮

六本
大小旗

八騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

竹俣慶綱

竹俣三(慶綱)
河守

六拾七丁
鐵炮

拾人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

五丁笠、腰指、
鐵炮

拾壹騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

加地春綱

加地(春綱)
彦次郎

百八丁
鐵炮

拾五人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

拾丁笠、腰指、
鐵炮

拾本
大小旗

拾五騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

安田新太郎

安田新太郎

九拾丁
鐵炮

貳拾人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

拾丁笠、腰指、
鐵炮

拾參本
大小旗

拾五騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

二九五

新發田長敦

新發田(長敦)
尾張守

六本
大小旗

拾騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

百參拾五丁
鐵炮

貳拾人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

拾丁笠、腰指、
鐵炮

拾貳本
大小旗

拾七騎甲、打物、籠
手、腰指、
馬上

以上

五十公野右衛門尉

五十公野右衛門尉

八拾丁
鐵炮

拾五人甲、打物、籠
手、腰指、
手明

拾丁笠、腰指、
鐵炮

八本
大小旗

天正三年二月十六日

天正三年二月十六日

正 下條采女

以上

下條采女正

參拾貳丁

鑓

拾人 手、甲、打物、籠

手明

貳丁 笠、腰指、

鐵炮

參本

大小旗

五騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

荒川彌次郎

荒川彌次郎

參拾貳丁

鑓

拾人 手、甲、打物、籠

手明

貳丁 笠、腰指、

鐵炮

參本

大小旗

五騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

菅名綱輔

菅名與三(綱輔)

二九六

四拾五丁

鑓

拾人 手、甲、打物、籠

手明

五丁 笠、腰指、

鐵炮

五本

大小旗

八騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

菅名孫四郎

菅名孫四郎

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

同心自分 合四拾七丁

鑓
鐵炮
○天正五年初見
○天正五年初見

六丁

鐵炮

木津

木津

以上

同心

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

千田

千田

同心

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

同心自分 合六拾貳丁

鑓
鐵炮
○天正五年初見
○天正五年初見

七丁

鐵炮

二九七

平賀左京亮

平賀左京亮

六本

大小旗

九騎

馬上

以上

五拾四丁

鑓

拾人 手、甲、打物、籠

手明

四丁 笠、腰指、

鐵炮

五本

大小旗

八騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

丸田(丸田) 力丸

四丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

天正三年二月十六日

天正三年二月十六日

新津大膳亮

八本
拾壹騎
以上
大小旗
馬上

新津大膳亮

五拾四丁
鐵鑓

拾人甲、打物、籠
手明

四丁笠、腰指、
鐵炮

五本
大小旗

八騎甲、打物、籠
馬上

以上
鐵炮

舟山
同心
舟山

貳丁
鐵鑓

壹丁笠、腰指、
鐵炮

壹本
大小旗

壹騎甲、打物、籠
馬上

二九八

以上
同心
藏吾
鐵鑓

壹丁笠、腰指、
鐵炮

壹本
大小旗

壹騎甲、打物、籠
馬上

以上
鐵鑓

同心自分共
合五拾八丁
鐵炮

六丁
大小旗

七本
馬上

拾騎
鐵炮

以上

齋藤朝信
齋藤下野守

百五拾參丁
鐵鑓

貳拾人甲、打物、籠
手明

拾五本
大小旗

貳拾騎甲、打物、籠
馬上

以上

新保孫六
新保孫六

四拾丁
鐵鑓

拾五人甲、打物、籠
手明

貳丁笠、腰指、
鐵炮

參本
大小旗

七騎甲、打物、籠
馬上

以上

竹俣小太郎
竹俣小太郎

四拾六丁
鐵鑓

拾人甲、打物、籠
手明

參丁笠、腰指、
鐵炮

五本
大小旗

二九九

拾丁笠、腰指、
鐵炮

拾貳本
大小旗

拾八騎甲、打物、籠
馬上

以上
鐵炮

千坂景親
千坂對馬守

參拾六丁
鐵鑓

拾人甲、打物、籠
手明

貳丁笠、腰指、
鐵炮

四本
大小旗

六騎甲、打物、籠
馬上

以上

柿崎晴家
柿崎左衛門大輔

百八拾丁
鐵鑓

參拾人甲、打物、籠
手明

拾五丁笠、腰指、
鐵炮

天正三年二月十六日

天正三年二月十六日

山岸隼人

六騎 手、甲、打物、籠
以上

馬上

參拾五丁

鑓

山岸隼人佐

拾人 手、甲、打物、籠

手明

貳丁 笠、腰指、

鐵炮

參本

大小旗

五騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

安田景元

安田惣八郎 (景元)

六拾丁

鑓

拾五人 手、甲、打物、籠

手明

五丁 笠、腰指、

鐵炮

五本

大小旗

拾騎 手、甲、打物、籠

馬上

舟見

以上

三〇〇
(宮内少輔)
舟見

七拾丁

鑓

拾人 手、甲、打物、籠

手明

五丁 笠、腰指、

鐵炮

六本

大小旗

拾騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

松本鶴松

松本鶴松

八拾壹丁

鑓

拾五人 手、甲、打物、籠

手明

拾丁 笠、腰指、

鐵炮

八本

大小旗

拾騎 手、甲、打物、籠

馬上

力丸

同心

力丸

拾丁

鑓

壹本

大小旗

貳騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

湯山

同心

湯山

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

向井

同心

向井

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

天正三年三月十六日

白川

壹騎 手、甲、打物、籠
以上

馬上

同心

白川

貳丁

鑓

壹丁 笠、腰指、

鐵炮

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

氏江

同心

氏江

壹丁

鑓

壹本

大小旗

壹騎 手、甲、打物、籠

馬上

以上

同心

山屋

壹丁

鑓

三〇一

天正三年二月十六日

壹丁 鑓 松江
鑓 大堀

以上

同心自分
合百壹丁 鑓
○行天以下
=年軍正初
見軍役帳

拾參丁 鐵炮

拾參本 大小旗

拾六騎 馬上

以上

本庄秀綱
本庄清七郎(秀綱)

百五拾丁 鑓

參拾餘人甲、打物、籠 手明

拾五丁笠、腰指、 鐵炮

拾五本 大小旗

參拾騎甲、打物、籠 馬上

以上

三〇二

吉江佐渡守 鑓

五拾丁 手明

拾人甲、打物、籠 鐵炮

四丁笠、腰指、 大小旗

五本 馬上

七騎甲、打物、籠 鐵炮

以上

石坂七郎三郎
同心 石坂七郎三郎

參丁 鑓

壹丁笠、腰指、 鐵炮

壹本 大小旗

壹騎甲、打物、籠 馬上

以上

同心一丁と杖り
合貳拾參丁 鑓廿三人前

以上

同心自分共
合七拾六丁 鑓

五丁 鐵炮

六本 大小旗

八騎 馬上

以上

山吉豐守
山吉孫次郎(豐守)

貳百參拾五丁此内 鑓

四拾人甲、打物、籠 手明

貳拾丁笠、腰指、 鐵炮

參拾本 大小旗

五拾貳騎甲、打物、籠 馬上

以上

直江景綱
直江大和守(景綱)

貳百丁此内 鑓

參拾人甲、打物、籠 手明

天正三年二月十六日

吉江資堅
吉江喜四郎(資堅)

貳拾丁笠、腰指、 鐵炮

貳拾本 大小旗

參拾五騎甲、打物、籠 馬上

以上

六拾丁 鑓

拾五人甲、打物、籠 手明

五丁笠、腰指、 鐵炮

拾本 大小旗

拾五騎甲、打物、籠 馬上

以上

香取彌平太

九拾丁 鑓

拾五人甲、打物、籠 手明

五丁笠、腰指、 鐵炮

三〇三

天正三年二月十六日

七本
大小旗
拾五騎甲、打物、籠
馬上

以上

河田吉久

河田對馬守(吉久)

六拾丁

鑓

貳拾人甲、打物、籠

手明

五丁笠、腰指

鐵炮

七本

大小旗

拾五騎甲、打物、籠

馬上

以上

北條高常

北條(高常)下總守

六拾丁

鑓

貳拾人甲、打物、籠

手明

七丁笠、腰指

鐵炮

七本

大小旗

拾壹騎甲、打物、籠

馬上

三〇四

以上

(付箋)

小國刑部少輔

小國刑部少輔

八拾丁

鑓

拾五人甲、打物、籠、手

手明

拾丁笠、こし、さし

鐵炮

拾本

大小旗

拾騎甲、打物、籠、手

馬上

以上

長尾景直

長尾小四郎(景直)

五拾丁

鑓

拾五人甲、打物、籠、手

手明

參丁こし、さし

鐵炮

參本

大小旗

拾騎こし、さし、甲、打物、籠、手

馬上

以上

四月己巳朔

二十四日壬辰、謙信、北條氏政ヲ擊滅センコトヲ多聞天ニ祈ル、

〔上杉文書〕一〇羽前

敬白 願文之意趣者

氏政誓詞ヲ翻ス
 弟及ビ譜代ノ臣ヲ見捨ツ
 父ノ遺言ニ背キ東將軍ヲ殺ス
 多聞堂ニ代官ヲ參籠セシム
 氏政父子ノ誓書ヲ佛前ニ供ス

毎日、謙信如修、北條氏政働非分之當家分國江成妨、恣儘ニ振舞候、彼者事者、先年謙信一和之時、如斯數枚之成誓詞、翌年翻誓詞、剩弟(景虎)三郎并不限代、忠信仕來遠山父子差捨、父氏康背遺言、東將軍爲切腹申、天道神慮筋目不辨、法樣ヲも不知、親子兄弟之好をも、誓詞之罰をも無分別處、神明佛隨爭而無當罰哉、爰仁藤原謙信、守筋目、爲專天道、順法之及弓箭、殊去年極月十九、令發躰、遂沙門以來、護摩灌頂迄執行、既任法印大和尚、其上勵彌信心、就中多聞依名天、深頼二世、但氏政與謙信双ニ道理與非事を爲似相對、歟、感應有實者、任道理、謙信滿願而、當年中ニ關東如存分之有之而、北條氏政一類退治、可申候、至于其義者、謙信不退有所、近立多聞堂、日夜之成勤行畢、爲先此大願之、氏政父子之捧誓詞、百日立代官、企參籠、日夜ニ五座之行法爲修之、可申處、諸願成就、皆令滿足、仍願文如件、

天正參年亥乙

法印大和尚不識院

天正三年四月二十四日

三〇五

天正三年四月二十六日

天正三年四月二十六日

御寶前

謙信

三〇六

二十六日甲午、武田勝頼、三河ニ出デ、織田信長・徳川家康ト戦フニ方リ、謙信ノ信濃ヲ侵サンコトヲ慮リ、是日、越中杉浦紀伊守ヲシテ、コレヲ牽制セシム、

〔寸金襍録〕三

越中

幸便之間染一翰候、抑其國每事備等堅固之仕置肝煎之由、無是非次第候、併對大坂忠節令感激候、彌無油斷兩越州靜謐候之様ニ馳走簡要候、隨而不圖當表出馬爲始三州足助城、近邊ニ敵城或攻落、或自落、萬方達本意候、可爲安堵候、此上三尾國中へ令亂入、可決是非候、此所畢竟織田上洛之上、大坂へ取懸之由候之條、後詰第一之行ニ候、然而當夏秋之間、輝虎向于越中動干戈者、無二至越後可成働候、然則長尾彼表張陣不可叶候之條、加越兩刃之人數被相催、無用捨可被、遂防戰之儀專要候、委曲令附與彼口上候之間、不能具候、恐々謹言、

〔天正三〕
卯月廿六日

〔武田〕
勝頼(花押)

杉浦紀伊守殿

六月戊辰朔

五日壬申、謙信、使僧ヲ紀伊高野山ニ遣シ、一院ヲ再興シテ菩提所トナサンコトヲ約シ、且ツ、剃髮ノ披露トシテ、學侶衆徒及ビ寶性院等ニ黄金ヲ寄進ス、是日、寶幢寺清胤、コレヲ寶性院ニ報ジテ、衆徒ニ傳達セシム、

〔高野山文書〕〇紀伊

無量光院

態令啓札候、仍、太守謙信依年來之御宿望、去年被成御法躰、愚僧與師弟之御契約、四度傳法之儀式如法被相遂、永宗門之制誡不可有違犯之旨御誓詞嚴重候、此趣衆徒中江可被成御披露、以御内證使僧被差登、御直書并學呂惣分江黄金百兩進獻、貴院江別而黄金拾兩被進之候、是又、現世之非御名聞、高野靈地之爲躰、先年御見聞之上、彌々殊勝被思食入之間、後世菩提善根可被成置、其山御懇志之故如此候、依之別而一院有御再興、御菩提所被相定、惣者大破之伽藍之儀、連々修造可被仰付御臆意候、此等之趣衆徒中被成御披露、被及御回報者可爲御喜悅候、恐々謹言、

〔天正三〕
六月五日

寶性院
御同宿中

天正三年六月五日

三〇七

清胤ヲ師トシ四度傳法ノ儀式ヲ修ス

一院再興菩提所トナシ大破ノ寺院ヲ修復セン

天正三年六月五日

〔上杉家古文書〕

高野山ノ諸僧答謝ス
無量光院ヲ本願ノ寺トナス
椀料十兩ヲ贈ル

御狀令拜見候、抑謙信法印御房、入眞言宗門、御修行如法之趣、希代勝事、併一家繁榮之嘉瑞、不可過之候、滿寺開喜悅之眉候、將亦無量光院可被成御願之寺之旨、依被仰出候、御納得之段尤可然候、就其彼院家之留守居、愚僧罷渡候へ之由候、雖爲斟酌千萬、且者印融、覺融御遺跡相續之儀、悅則移住仕候、隨而院中爲披露、御椀料黄金十兩被仰付候、各々拜受仕、忝之由申候、委曲御兩使可有演說候之間、不能一二候、恐々謹言、

留守僧宥義

七月廿八日

寶幢寺

御返報

宥義(花押)

謙信高野山ノ快慶ニ黄金十兩ヲ贈ル

依年來之御願、被成發心、殊密家所歸之旨、賢慮誠不及春知處、更難盡紙上候、就其爲被開聖主之恩化、黄金十兩到來、御懇情令承悅候、自是祝詞之一儀、具兩使節江申渡候事候、恐々頓首、

快慶

七月廿一日

謙信法印御房

御報

快慶(花押)

〔柳澤氏所藏文書〕

快宣ニ十兩ヲ贈ル
快宣謙信ニ如意羅漢像孔雀明王像ヲ贈ル

尊書拜閱、抑被遂御法體之素意、殊者言御受法之趣、誠以難有奉存候、就之當山學品行人方へ音問之旨申届、則被及尊答候、隨而愚僧へ黄金拾兩拜領、快然無二候、然者爲信喬禪月之如意、羅漢之像、同孔雀明王令進上候、猶寶幢寺可爲演說候、恐々謹言、

七月晦日

快宣

謹上 謙信法印御房

御報

○謙信、無量光院ト師壇ノ契約ヲ爲シ、將士及ビ分國ヲシテ之ニ準ゼシムルコト、二年三月十一日ノ條ニ、清胤ヲ師トシテ、法躰トナルコト、同年十二月十九日ノ條ニ見ユ、

〔附録〕

〔吉江文書〕

前羽

ふをく、ふとうたうの御人さやく御ようしやのき、ひとへにとのミとてまつり候、以上、

おつて申入候、よつてゑつ中ふとうたうへ御人さやくあいあとり候、てうをいぜんあむせて十けん御さ候が、ごふあけ申るきよし申御、以事申候、あはれ御ようしや

天正三年六月五日

三〇九

清胤越中不動堂人脚免除ヲ希望ス

三〇八

天正三年六月五日

三一〇

あされ候やうに、御とりあしとのミとてまつり候、恐々謹言、(寶幢)

不うとう寺

清胤(花押)

二月廿四日

(吉江資堅)

吉喜以下三通、年次詳ナ

ラズ、姑ク茲ニ附收ス、

(表書)「吉喜

參人々

法印」

〔歴代古案〕〇羽前

依的便令啓上候、無量光院爲迎御使僧登山候、則應增命可有下向之由、雖然於季冬學頭職昇進候、學衆中各抑留候、來年秋末必可被罷下旨相談候、此旨可然様可預御披露候、恐々謹言、

七月十六日

左學頭

(附記)「學頭ノ隠居ヲ左學頭ト云」

進上 御奉行所

謙信使ヲ遣シテ清胤ヲ迎ヘシモ學頭職昇進ノ爲ニ來年秋末マデ延期ス

追啓、大乘寺儀、御威光を以、御普請等被仰付由、拙僧不淺次第ニ存候、以上、〇眞言宗時、春日山城下ニ移ルト云フ、後米澤市ニ轉メ、

〔上杉家古文書〕

高野山恒例ノ使僧ヲ越後ニ遣ス

態令啓上候、抑、任、恒例、以使僧申展候、然者、爲御祝儀五明并唐臺一對卷物一端令進上候、誠左當之至、恐多候、猶直江大和守殿可有御披露候、恐々敬白、

暮律廿一日

快宣(花押)

謹上 謙信法印御房

人々御中

十三日、辰、庚是ヨリ先、織田信長、徳川家康ト共ニ、武田勝頼ヲ三河長篠ニ破リ、尋デ、勝頼ニ屬セル美濃岩村城ヲ攻ム、是日、謙信ニ、戦況ヲ報ジ、信濃・甲斐ニ出兵セシコトヲ請フ、

〔今古集狀〕

(美濃)

略 上 次、信濃界目、岩村と申要害從甲州相抱候條、取卷候、種々雖令懇望、可攻殺覺悟ニ候所、赦候、五三日中可爲落居候間、然者至信州可出勢候、連々自其方承候儀も候條、此節至信、甲可被及行之儀、幸時分候歟、〇下

六月十三日

信長(織田)(花押)

不識庵

進覽之候

〔兼見卿記〕

(天正三)

五月廿一日己未、今度於三河表、武田四郎與信長及一戰、武田令敗北、數千騎討死云々、

(長篠)

(勝頼)

數

長篠ノ戦

天正三年六月十三日

三一

〔異本年代記拔萃〕 天正三、五月廿一日、甲州武田四郎ト信長合戰、武田退散、

〔附錄〕

○左ノ四通ハ年次詳ナラズ、蓋シ、謙信、信長ト親交中ノモノニ係ルヲ以テ、姑ク茲ニ附收ス、

〔高橋文書〕

○米

去秋已來、隔音問候、心外之至候、仍、陸奥へ鷹爲令尋求、鷹師兩人差下候、過書同路次番等之事、被加芳言候者、本望候、隨而豹皮二枚進之候、任所在候、猶追而可申候、恐々謹言、

正月廿三日

彈正忠信長(花押)

謹上 上杉彈正少弼殿

〔上杉古文書〕

○羽前

去年畿内所々、就在陣本望之至候、天下之儀無異子細候、乍恐可被安賢慮候、隨而貴邊隣國之屬御存分之由、尤候、仍、就鷹之儀度々雖申入、珍敷鷹在之由、聞及候間、重而差遣候、御分國無異儀樣ニ候者、可爲快然候、猶期後音候、恐々謹言、

三月廿日

信長(花押)

上杉彈正少弼殿

進之候

信長鷹師ヲ陸奥ニ遣シ其路次便宜ヲ與ヘンコトヲ謙信ニ請フ

信長謙信ニ鷹ヲ贈ランコトヲ望ム

生易之鵝鷹御隨身之條、可見給之由、任御内意之旨、鷹師差下候キ、即時遂一覽之候、誠希有之次第、驚目候、秘藏自愛更不知校量候、頓以使者御禮可申展之處、就上意之趣、去月中旬、令上洛候、畿内之體無別條候間、一兩日以前、納馬之式候、依之御禮延引之條、先染一翰以飛脚申候、毎々御懇情之至、難謝候、必追而使者可進之候、猶期其節候、恐々謹言、

九月廿五日

信長(花押)

上杉彈正少弼殿

進覽之候

〔上杉古文書〕

○十六羽前

謙信へ年頭之儀、彼是爲可申述、佐々權左衛門尉差下候、可然之樣ニ被執申候者、可爲祝著候、恐々謹言、

九月十一日

信長(花押)

直江大和守殿

河田豊前守殿

本願寺光佐、大坂石山城ニ據リテ織田信長ト戰フ、是日、光佐、越後淨興寺ヲシ

天正三年六月二十八日

三一四

テ謙信ニ援ヲ請ハシム、

〔淨興寺文書〕○越後

去年以來籠城ス

態染筆候仍當寺之儀、去年以來籠城（謙信）付て、諸人之疲可有推量候、當流法義破滅候（謙信）るき事愁歎至極候、門下之輩被抽忠節者、聖人へたいし奉報謝不可過之候、當國太守累年申談之旨、あひうらそ本望候、就其調略之子細候間、千萬無心之儀（謙信）あら、一廉馳走別而頼入計候、何様（油）も佛法再興之志（謙信）拔（謙信）えけまれ候へく候、殊坊主分の儀者勿論、將又法儀不可有由斷老少不定（謙信）此（謙信）らひ（謙信）よ（謙信）て候間、兼々可有信心決定候、此うへ（謙信）ハ報謝之念佛可申事肝要候、委細按察法橋可申候也、穴賢々々、

六月十三日

淨興寺御房

顯如（光佐）花押

〔信長公記〕七

天正二年四月三日、（本願寺光佐）大坂御敵之色を立申候、則御人數被出、悉作毛薙

捨近邊御放火候也、

二十八日、謙信、越後浦佐普光寺毘沙門堂ニ、地ヲ寄進ス、

〔浦佐普光寺文書〕○越後

爲毘沙門領浦佐之内參拾五貫文之所、令寄進候、於佛前武運長久之懇祈、彌不可有油

斷者也、仍狀如件、

六月廿八日

普光寺

謙信（花押）

○謙信、北條氏政ノ擊滅ヲ多聞天ニ祈ルコト、四月二十四日ノ條ニ、浦佐毘沙門堂ニ關スルコト、本年正月十一日、及ビ承久三年十月三日、應永十一年二月二十二日、文明七年六月十八日、同十九年二月二十八日、天正十年閏十二月二十一日ノ條等ニ見ユ、

〔附録〕

〔浦佐普光寺文書〕○越後

爲新春之祈念、卷數并鳥目卅疋到來、悦入候、恐々謹言、

正月廿七日

普光寺○年次詳ナラズ、姑ク茲ニ附收ス、

謙信（花押）

飛驒江馬輝盛、謙信ヲ存問シ、併テ越中寺島牛助ノ反亂平定セルヲ祝シ、武田勝頼ノ三河ニ於ケル敗軍ヲ報ズ、
〔上杉家古文書〕

天正三年六月二十八日

三一五